

(様式第2号)

研究No. (記載不要)	— —
-----------------	-----

平成19年度配分 研究成果発表報告書(実績)

研究名	近代中国における日本の植民地支配に関する社会史的研究				
配分を受けた 特別研究費	学部長特別研究費 800 千円				
研究者氏名 (代表者)	学部名	学科名	職	氏 名	共同研究者
	文化政策	国際文化学 科	准 教 授	孫 江	他 名
発表の方法	1 紀 要 名 称: 別紙参照			号 数	第 号 (頁～ 頁) (年 月発行)
	2 学会等での発表 学会等名:			発表日	平成 年 月 日
	3 その他 発表の方法:			発表日	平成 年 月 日

- ☐ 学会等での発表及びその他の場合は、学会報等発表を証する資料を添付すること。
- ☐ 配分を受けた翌年度の3月末までに提出

三つの外を握りこぎって左右を左にひく。

19年度研究成果一覧表（孫江）

編集

- ・『新史学』（北京：中華書局）編集共同代表
- ・『海外中国秘密社会研究訳叢』（北京：商務印書館）共同編集代表

論文

- ・「陝北高原の赤い星——革命、哥老会と地域社会」、『立命館経済学』第56巻第3号、2007年9月。pp. 396-424。
- ・「没有暴动的事件——關於抗日戦争時期天道事件的表述問題」、『新史学——感覚・図像・叙事』第1巻、中華書局、2007年4月。pp. 165-181。
- ・「増上寺の香堂——1933年東北青幫代表団訪問日本」、『南京大学学報』2007年第3期。pp. 93-102。
- ・「土匪政治——從档案史料看民国初期華北の土匪」、中国社会科学院近代史所民国史研究室、四川師範大学歴史文化学院編『一九一〇年代的中国』、社会科学文献出版社、2007年8月。
- ・「連続性與断絶——清末民初期歴史教科書中の黄帝叙述」、復旦大学現代化研究中心編『中国現代学科的形成』、上海古籍出版社、2007年8月。pp. 25-61。
- ・「作為他者の『洋教』——關於基督教与晚清社会關係的再解釈」、黄愛平、黄興濤主編『西学与清代文化』、中華書局、2008年1月。pp. 201-213。
- ・「語言学転変後の中国新史学」、『中国書評』、2008年3月。pp. 45-52。
- ・その他
- ・「歴史学找回想像力」、『中華読書報』2007年5月16日。
- ・『中国秘密社会研究訳叢』序、商務印書館、2007年7月。

学会発表

- ・「近代知の雜種性——東洋概念についての一考察」、「東アジアにおける文化の多様性と可能性」シンポジウム、弘前大学、2007年7月4日。
- ・「近代中国における宗教言説の系譜」、国際日本文化研究センター「東アジアにおける知

的システムの近代的編成」研究班、2007年7月14日。

- ・「越境する宗教の近代」、「東亜近代思想史」国際シンポジウム、東北師範大学歴史文化学院、2007年8月6日—8日。

- ・「1933年東北青幫代表団訪日之行」、「中国社会文化史」国際シンポジウム、新疆大学歴史系、2007年8月18—20日。

- ・「皮膚的等級——近代中日教科書里の人種叙述」、「西学文本与近代知識」国際シンポジウム、復旦大学歴史系、2007年10月13—14日。

- ・「差異化された皮膚——近代日中の教科書における人種叙述」（ハングル）、「東アジア近代知識の編成」国際シンポジウム、成均館大学東亜学院、2007年12月7—9日。

学術講演

- ・「19世紀中国近代知識的形成」、中国人民大学、2007年4月29日。

- ・「近代中国的公共記憶与認同」、東華大学（台湾）、2007年9月16日。

- ・「語言学的転変与中国新史学」、南京大学、2007年12月28日。

立命館経済学 第56巻 第3号

2007年9月 抜 刷

陝北高原の赤い星

——革命、哥老会と地域社会——

孫 江

陝北高原の赤い星

——革命、哥老会と地域社会——

孫 江

はじめに

一、陝甘地域社会と革命

二、「統一戦線」における哥老会の位置づけ

三、赤い中国の哥老会大会(1)——河連湾哥老会大会——

四、イデオロギーと哥老会動員——哥老会大会の波紋——

五、赤い中国の哥老会大会(2)——馬頭山哥老会大会——

六、結びにかえて——根拠地における哥老会の統合——

はじめに

1935年12月、毛沢東が率いる中央紅軍は国民党軍隊の幾重もの包囲を突破し、「長征」を終えて陝西省北部に到達すると、陝北高原で革命根拠地の建設を始めた。その八ヶ月後の1936年8月26日、共産党の呼びかけで八十名の哥老会メンバーが出席する山堂大会が陝甘（陝西、甘肅の省境地域）根拠地の河連湾で開かれた。この大会では、哥老会が共産党の指導の下で抗日を行うなど十カ条の綱領が打ち出された。¹⁾ 会議は、10月15日に陝甘根拠地志丹県の馬頭山でさらに大規模な哥老会大会を開催することを宣言した。八月の哥老会大会の開催は、共産党支配地域（「蘇区」と呼ばれる）と国民党支配地域（「白区」と呼ばれる）で大きな波紋を呼び、中共内部においても論議を醸した。

中共はなぜ秘密結社である哥老会のメンバーを集めて山堂大会を開いたのか。哥老会は陝北における革命根拠地建設にあたってどのような地位を占めていたのか。これらの問題を解明することは、中央紅軍が陝北に到達する以前の陝北革命の歴史や毛沢東の「延安革命」の社会的背景を理解するうえで重要な意味がある。

中共の延安革命に関する先行研究の中でも、早期の陝北革命と哥老会、土匪との関係は早い時期から研究者たちの関心を集めてきた。²⁾ 例えば邵雍は共産党の哥老会工作の歴史に関する叙述の最初の部分で、本論冒頭に述べた1936年の哥老会大会について言及している。³⁾ その後、筆者は哥老会大会を中心に中共の革命言説と地域社会との関係について考察した博士論文を（1999年に）⁴⁾ 発表した。ちょうどその頃韓国人研究者朴尚洙が陝北、寧夏地域の県レベルの档案馆で豊富な資料を収集しており、2005年に1930～1940年代の陝甘寧根拠地の革命と秘密結社との関係に関する論文を発表した。論文の中で朴は、中共が哥老会大会を開催したのは哥老会を「政治化」しよ

としたからであると指摘している。⁵⁾ 哥老会大会に関するこれらの研究では基本的に同じ資料が使われているが、中共の哥老会政策の転換のプロセスに関する認識は必ずしも一致していない。哥老会大会について、邵雍、朴尚洙両氏はいずれも中共による哥老会動員の側面に注目し、哥老会大会開催前後の中共内部の動きには十分な注意を払っていない。そのため、後に述べるように、哥老会大会の背後に隠された中共党内のイデオロギー闘争と地域革命との複雑な関係、哥老会の「政治化」の背後に隠された中共自身の「土着化」の問題が見逃されている。

以下、本論文では、陝甘地域社会の様相と中央紅軍が陝北に到達する以前のこの地域の革命との関係について概観した上で、中共による哥老会動員のイデオロギー的動機と地域戦略、および哥老会工作をめぐる中共の政策転換の背後にあるイデオロギーと現実との齟齬について分析する。最後に、根拠地における中共による哥老会統合のプロセスについて考察したい。

一、陝甘地域社会と革命

陝甘地域の共産主義革命の歴史を語る時、劉志丹、謝子長などの革命家と土匪、哥老会との関係は避けて通れない問題である。陝西の地域社会との密接な関わりがなければ、劉志丹、謝子長は早期陝北革命の代表者にはなれなかったであろう。以下は劉志丹、謝子長の経歴である。⁶⁾

劉志丹（1903～1936）は陝西省北部に位置する保安県のある裕福な家に生まれ、1922年に陝北連合県立榆林中学校に入学した。榆林中学の校長は著名な愛国者杜斌丞であった。⁷⁾ 在学中、劉志丹は教師魏野疇、李子洲（いずれも共産党員）を通じて革命の理論に接し、李が設立した社会主義青年団に入った。1925年、劉志丹は広東の黄埔軍校に入った。翌年、劉志丹は馮玉祥の依頼で共産党の代表として国民連合軍第四路軍の馬鴻逵の部隊に入り、政治処処長となった。1927年春、劉は馮玉祥の代理で陝西省と河南省の隣接地域で軍閥劉鎮華の部隊を改編した。これが翌年五月に劉が「渭華蜂起」を策動するきっかけとなった。

謝子長（1897～1935）は保安県北部に位置する安定県の裕福な家に生まれ、1919年に陝西省立第一中学校に入り、翌年に榆林中学校に転入学した。1922年、謝は小学校を創設するために故郷に帰ったが成功しなかった。同年秋、謝は閻錫山が山西省太原で設立した「太原学兵团」に入った。1924年、謝は安定県に戻って民団を設立し、自ら民団の頭領（「団総」）となった。翌年、謝は北京で中国共産党に入り、同年末に故郷に戻り、引き続き民団を組織した。その後、安定県の共産党員李象九の紹介で、謝の率いる民団は軍閥井岳秀の部下である石謙の部隊に編入された。石謙の部隊には多くの革命者がおり、このことが謝の1927年10月の「清渭蜂起」の基礎となった。

中共が武装闘争を開始した1927年10月、謝子長は陝北の清渭県で井岳秀に反旗を翻し、「西北工農革命軍遊撃隊」を設立したが、翌年1月には敗北した。1928年5月、劉志丹らが陝西と河南が隣接する渭華県で武装蜂起し、「西北工農革命軍」を設立したが、これもまもなく失敗に終わった。その後、劉志丹は保安県に戻り、民団の団総となった。⁸⁾ 1929～1931年の間、劉志丹、謝子長は陝西、甘肅省境の軍閥部隊の内部でクーデターを数回行ったがいずれも失敗した。劉志丹の伝記の著者は、「これらの蜂起の多くは単なるクーデターに過ぎず、農民運動と結合していなかった」と指摘している。⁹⁾ 1931年末以降、劉、謝は部隊を率いて陝西、甘肅の省境地域に入ってゲ

リラ戦を始めた。これをきっかけに、彼らは地元の土匪勢力と直接関わるようになった。

土匪は主に破産した農民からなる組織である。南京国民政府行政院農村復興委員会が1933年に陝西省の渭南、鳳翔、綏徳の三県で行った調査によれば、いずれも貧農が三県の人口の大多数を占める一方、地主は極めて少なく、しかも日に日に減少している。貧農のなかでも、綏徳県の小作人の比率が最も高く、約半数を占めていた。渭南県と鳳翔県では貧農の人数は（綏徳県に比べて）少ないが、その人数は急速に増加していた。三県に関する調査からは、連年の自然災害のほか、重い捐税負担が貧困の直接的な原因であることが分かる。¹¹⁾「陝西各県では捐税を支払えないために、小役人や保衛団に身柄を拘束されるのは、少しも珍しいことではなかった」のである。この調査は三つの県を対象としたものであるが、これを通じて1920～1930年代の陝西農村の貧困状態を垣間見ることができる。¹³⁾陝西省では、自然災害や官吏、軍隊の搾取に耐えられず、土匪になる者が多数おり、解散した軍隊の兵士が土匪に加わるケースもまれではなかった。¹⁴⁾

1927年秋、武装蜂起に関する中共中央の指示が陝西省に伝わると、中共陝西省委員会は陝西省農村の状況を次のように分析している。すなわち、「農村経済の破綻はすでに収拾のつかない状態である。ただし、（陝西省は）辺鄙なところに位置するため、戦争の渦に巻き込まれていない。地方の治安状況は比較的良好で、陝北人はもとより気の弱い性質で、反抗精神に欠けている。したがって、革命の意欲は甚だ弱い」¹⁵⁾。また、「西北は交通が不便で文化が後れているため、農民も比較的立ち後れている。その大部分は反抗の精神に欠けている。陝西の北部と西部は特にそうである。民間にこういう言い回しが伝わっている。『安穩に暮らすことさえできれば、重捐雑税でもかまわない』」¹⁶⁾。こうした状況に鑑み、中共陝西省委員会は陝西省で武装蜂起を起こすには、時期がまだ熟していないと主張した。

劉志丹、謝子長がゲリラ闘争を行った陝西、甘肅が隣接する地域は、北は定辺県、南は淳化県、耀県の橋山山脈までの地域である。華北農村の一部と同様に、この地域の村落は「高度に分化されかつ分散化した」状態にあり、¹⁷⁾軍閥、土匪が身を隠す場所であった。劉志丹はかつて次のように述べている。「土匪でさえここではさばることができる。軍閥は、これはどうしようもない。われわれ共産党がここで革命を行えないことがあるのか」。実際、土匪と共産党軍隊の活動地域はほぼ重なっていた。このことは国民党軍隊の「剿匪」報告にも表されている。謝子長、劉志丹が率いる紅軍が活動していた1932年の陝西、甘肅省境の寧県、合水県では、土匪、兵匪武装勢力の活動も盛んであった。1932年8月現在、甘肅省寧県には四つの土匪勢力があった。千人以上の土匪勢力が三つ、三百人以上の土匪が一つであったが、これに対して共産党の軍隊は七百人あまりであった。同年八月、謝子長、劉志丹などの軍隊が寧県に入り、「道中財物を略奪し、赤化（共産主義）を宣伝している」ことが報告されている。また、国民党側のスパイの報告によれば、謝子長部隊は自動機関銃三、四丁、手動式機関銃五、六丁、ブローニング自動拳銃二、三十丁を擁し、弾薬も十分持っていた。²⁰⁾謝子長、劉志丹の紅軍は寧県県城を襲撃後、ただちに撤収している。九月、百人あまりの別の共産党部隊が陝西省から寧県北部に入り、「当地の民団を破り、行く先々で騒ぎを起こした」という。²¹⁾

共産党軍隊と土匪との関係について、共産党側の資料は、慶陽、安塞、合水などの大部分の共産党ゲリラ部隊は土匪、流民によって成り立ったものであると指摘する。国民党側の資料では、陝西、甘肅地域で活動した劉志丹、謝子長は地元の土匪、哥老会と手を組んで活動したとされて

いる。²³⁾また、セルデンは劉志丹などの若い革命家の行動には「土匪の下位文化（bandit subculture）」が浸透していたと述べた。²⁴⁾早期の共産党と土匪・哥老会との関係について、J. エシエリック（周錫瑞）は土匪が共産党勢力の拡大に大きな役割を果たしたと指摘し、ほかの地域と同様に、陝西地域早期の革命の歴史は、革命思想を持つ知識人と農村社会の「境界人」が結合した産物である、としている。また、共産党の行動方式には土匪の習慣と特徴（原文：「江湖色彩」）が色濃く残されていることをも指摘している。²⁵⁾

このように、これまで多くの研究者は土匪と哥老会を同等に扱ってきた。しかし筆者は、確かに土匪集団も哥老会のように義兄弟の契りを結ぶが、略奪を目的とする武装集団たる土匪を、人間関係のネットワークを擁し地域社会と密接な関係を持つ哥老会と決して同等に扱うべきではないと考える。一部の地域では、哥老会に入ることは恥ずかしいことではなかった。つまり、哥老会は「下位文化」（subculture）ではなく、地方文化（local culture）であった。たとえば、保安県永寧山の「大爺」馬錫五は教師の経歴があったため、地元では一定の威信があった。そのため、劉志丹が陝北で革命活動を行った際に、馬と哥老会のネットワークは大きな役割を果たし、二百人の哥老会メンバーが革命に参加している。²⁶⁾

日中戦争期に、駐包頭日本軍特務機関の西村透は、「西北漢回軍ノ百分ノ九十、民衆中百分ノ七十ハ哥老会会員デアルトシタラ、此ノ問題ノ哥老会工作ガ如何ニ重要ナルカラ窺ウ事ガ出来ト思フ」と述べている。²⁷⁾これは明らかに誇張した記述だと思われるが、一部の地域や集団に関しては当時の状況を反映したものと言える。1936年、国民党軍隊に対する工作活動を担当する中共西北局「白軍工作処」の鄧穎超の調査報告によると、陝西省の保安、合水、固原地域には、威武山、辛亥山などの哥老会が存在し、保安から合水一帯には三十あまりの「龍頭」がいた。環県、合水県の民衆は十人に九人が哥老会に参加し、国民党軍隊の高双城、馬鴻賓の部隊の兵士もほとんど哥老会のメンバーであった。²⁸⁾

鄧穎超によれば、陝甘地域の哥老会は魏、徳、福、起、宣、松、柏、一、枝、青という十の堂（「輩」ともいう）に分かれていた。そのうち、「西派」とも呼ばれる魏の輩分が最も高位であった。徳は魏より下の輩分で、東派とも呼ばれる（以下類推）。それぞれの堂には上、下それぞれ八つの歩（すなわち八人の兄弟）があり、「上八歩」は乾、坤、坎、艮、震、巽、離、兌、「下八歩」は孝、弟、綏、信、礼、義、廉、恥に分かれる。それぞれの山堂には山主と副山主がいる。哥老会のなかでも名声の高い人物が山堂を開くことができ、山堂を開いた人は「龍頭」と呼ばれた。哥老会に加入するためには、恩、臣、保、引の四人の義兄弟の紹介が必要になる。「哥老会のなかの人間同士が初対面の時でも、その人の身分を証明するものを見せれば、互いに家族兄弟のように親しくなり、助け合うようになる」という。このような義兄弟関係のネットワークをもつ哥老会は、陝甘地域に対して影響力を持つ社会組織となった。また、「合水、保安一帯では、子供や女性も哥老会に入っている」と言われるほど、³⁰⁾哥老会は地域社会と密接な関わりがあった。「哥老会のなかに農民は少数で、ちんぴらや土匪が多数を占める。しかし、農民と哥老会はとてもよい関係にあった。哥老会は自分の村を略奪しないだけでなく、それを守っている」とも言われていた。³¹⁾

このような哥老会の形態は、当然、陝西地域で革命運動を行おうとする早期の共産党員たちの関心を引いた。劉志丹、謝子長を始めとするこの地域の共産党幹部は哥老会と何らかの関係を持っており、哥老会のメンバーであったような者も一部にはいた。劉志丹と謝子長がかつて哥老会

に参加していたことは広く知られることである。1928年、劉志丹は渭華蜂起失敗後故郷の保安県に戻り、陝甘地域で活動していた哥老会の首領（「金鼎大爺」）馬錫五と知り合いになり、馬の紹介で馬海旺を「龍頭大爺」とする哥老会山堂に入り、「行義智大爺」（哥老会下八歩「孝字輩」に属する）と名づけられた。劉志丹は三百人以上の人を哥老会に紹介し、哥老会を革命の拠点とした³²⁾。志丹県の哥老会「龍頭」羅連臣、馬海旺は、劉の部隊に対して食料の運搬、武器の調達および負傷兵士の保護などを行っている³³⁾。

中共革命が陝甘地域で展開されるなかで、義兄弟の契りを結ぶという哥老会の儀式は人間関係の強化に役立った。1931年末、幾つかの地方武装勢力（山西省西部から陝西省に入った閻紅彦、楊重遠などが率いる武装勢力、楊祺、楊鼎、師儲傑の率いる地方武装勢力、および劉志丹が招集した武装勢力）を改編してできた紅軍部隊を強化するため、師儲傑、楊祺、楊重遠、謝子長、劉宝堂、劉志丹、馬雲沢、閻紅彦の八人は年齢順に義兄弟の契りを結んでいる³⁴⁾。

一方、林立する山堂が互いに独立し、利益が交錯する哥老会組織の内部では、しばしば衝突が生じることもあった。前出の鄧穎超の報告は、中共が陝北の一部の地域で哥老会メンバーを殺害したことに言及している。それによれば、第二十六軍は陝北的某地に入った時、地元の哥老会組織と衝突を起こした。そのため「特に陝北哥老会の人たちは私たちに対して懐疑的であり、今でもわれわれに接近するのを恐れている。中にはわれわれに対して恨みを持っている人々もいた」のである³⁵⁾。

1986年、中共幹部李立森は若い時自らが加わった陝北地域の革命の状況について、次のように振り返っている³⁶⁾。

1922年、すでに青年になった私は周囲の人々の影響を受けて哥老会に入った。努力の結果、私はまもなく哥老会のなかで名声を高め、各方面の哥老会メンバーと知り合った。1934年春、私は張廷芝の連隊に入った。その間、私は何人かの共産党員と知り合った。その年、私は共産党の協力を得て連隊の一部の同志たちと一緒に武装蜂起し、紅軍に参加して革命の道を歩み始めた。1935年、私は中国共産党に参加した。後に私は赤源県ソビエト政府保衛局につとめた。なぜなら、当時哥老会大爺の身分を利用して治安工作を行うのはたいへん効果的であったからである。当時陝北には多くの哥老会があった。なかには哥老会の名前を利用して地方の有力者（「占山為王」）となった者もいれば、土匪、盗賊になった者、紅軍や遊撃隊に参加した者、蘇区で仕事をした者、国民党の官僚や兵士になった者もいた。つまり、哥老会内部はきわめて複雑であり、ちょっと油断すると、命を落とす危険があった。

李のこうした経験は陝北早期革命における哥老会ネットワークの役割の大きさを物語っている。特に「哥老会の内部はきわめて複雑であり、ちょっと油断すると、命を落とす危険があった」という一節からは、哥老会ネットワークは革命活動の展開に有利に働いた一方で、哥老会組織が互いに支配したり従属したりせず、それぞれに利害関係が有したため、哥老会ネットワークが場合によっては革命活動を妨げることもあったことが分かる。

この点については、筆者が東洋文庫で閲覧した「陝北共産党発展的概況」と題した手書きの資料に、当時の状況がリアルに反映されている³⁷⁾。それによると、1932年、早期革命家の一人高朗亭が政治委員をつとめていた部隊が、銃五十丁余り、五十人余りの規模にまで拡大した頃には、「十数人の哥老会分子が混じり込んでいる」状況であった。哥老会メンバーは部隊の指導権を奪

うため、「4月18日夜、司令官劉善忠を暗殺し、（中略）政治委員高朗亭の銃を取り上げたうえ、政治委員の制度を廃止し、高朗亭を名ばかりの傀儡司令官にした。哥老会はすべての権力を握った³⁸⁾」という。部隊は翌一九日に林鎮という村の攻撃に失敗し、「わずか数日の間に、労働者、農民出身の兵士や学生ら三、四十人が脱走したり、銃をもって逃亡したりした³⁹⁾」。士気がゆるみ、部隊は完全に土匪化してしまったのである。実権を失った高朗亭は負傷のために労山に取り残されたが、体力が回復すると延川に駐屯していた部隊に合流しようとした。彼が目にしたその時の部隊の様子はこうであった⁴⁰⁾。

見ると、（部隊には）わずか兵士十七人、銃十二丁しかなかった。いい労働者、農民分子や党員、団員はほとんどすべて取り除かれてしまった。残っている者の多くは哥老会のメンバーであった。このような状況でこの土匪部隊に残って活動をするのはとても難しかった。第一彼ら哥老会分子は外の人間を仲間に入れようとしない。（高は）あの手この手を使ってようやくこの一群のなかに入れてもらった。その後、高朗亭は辛うじて哥老会メンバーのなかの比較的いい分子、彼と個人的に仲のいい人たちとつながりをつけて、彼らを味方にし、自分の周りに結集した。（中略）時間が経つにつれ、（高は）この一群のなかで多くの人の信頼を得て、次第に（部隊を）変えていった。その結果、哥老会の勢力はだんだん小さくなった。最後に、今年（1932年）6月27日夜に大きな変動があった。（彼らは）四人の哥老会の頭目を殺した。こうしてようやく部隊内部（の悪い勢力）を肅清し、銃と兵士を高朗亭の指揮下に置いた。

この文字の識別しにくい手書きの資料は、陝北地域の早期革命家高朗亭がさまざまな手段を使って哥老会分子を部隊から一掃した経緯を生々しく伝えている⁴¹⁾。ここから、われわれは革命の早期段階の具体的な状況を垣見ることができよう。なお、後述するように陝西省委員会が陝北の早期革命家を土匪と見なしたのは、彼らと哥老会、土匪との間にこのような関係があったことと無縁ではないと考えられる。

劉志丹の紅軍第二十六軍、謝子長（および謝の後継者）が率いる紅軍第二十七軍は、共産党陝西省委員会と不即不離の関係にあった。1933年12月、中共北方局は陝西省米脂県出身の郭洪濤を代表として陝北に派遣したが、彼は陝西地域の革命路線をめぐる劉志丹と意見が対立する。劉志丹が農村でゲリラ戦を行うべきであると主張したのに対して、中共中央の指示を受けた郭洪濤は正規戦と都市攻撃をすべきであると主張したのである。双方の対立は中共北方局代表の肩書きを持つ朱理治が到来したことによって一層激しさを増した。翌年の七月には、郭は劉の革命を「濃厚な土匪的な色」を帯びるゲリラ戦であると批判している⁴²⁾。

陝甘地域の革命史において、1935年は節目の年であった。この年の2月21日、謝子長は病逝した。9月、徐海東が率いる紅軍第二十八軍は「長征」を終えて陝北に到着した後、共産党陝西省委員会は二十六軍、二十七軍を徐海東の指揮下におき、三つの紅軍部隊を紅軍第十五軍に再編した。徐は軍団長、程子華は政治委員、劉志丹は副軍団長兼参謀長となり、また、陝西省と山西省は中共の「陝晋省」となって、朱と郭はそれぞれ書記（長）と副書記（長）に任じられた。陝甘地方で革命の指導権を失った劉志丹は、かつて井岡山の袁文才、王佐がそうされたのと同様に、党内で「梢頭主義（土匪）」と批判された。同年10月には、劉志丹は陝西省委員会に逮捕され、また、その部隊の大隊長以上の幹部や陝甘地域の共産党組織の責任者も全員逮捕された上、その

一部は反革命の罪で殺害された。⁴³⁾ところが、ちょうどこれと時期を同じくして、10月19日に中央紅軍を率いて毛沢東が陝北の呉起鎮に到達した。彼は国民党の新聞を通じて陝甘地域で革命を行っている劉志丹のことを知り、陝甘寧を紅軍の根拠地にすることを決めた。劉志丹は毛沢東の中央紅軍が陝北に到達した後釈放された。毛沢東にとって、中共の革命を如何に黄土高原に根付かせ、そして陝北高原の赤い星を中国各地に広げるか、ということがきわめて重要な課題となった。

二、「統一戦線」における哥老会の位置づけ

日本軍の中国侵略が加速し、中国の抗日ナショナリズムが高まるなかで、陝甘地域を拠点とした中共中央は新たな革命の方向性を模索し始めた。⁴⁴⁾1936年4月25日に、中共は「全国各党派の抗日人民戦線の創立に関する宣言」を發布し、全国各党派に対して、日本軍の侵略に抵抗する「人民戦線」を結成するよう呼びかけ、抗日人民戦線の設立を趣旨とする宣言文を發布した。そこに列挙された四十三の党派のなかには、青幫、洪幫、哥老会、理門の名が並んでおり、⁴⁵⁾秘密結社を抗日運動の一環に組み入れるという中共の方針が明らかにされている。

中国共産党の階級闘争のイデオロギーからすれば、「民族主義」という言葉は、階級の実在という事実を無視するものであり、支配者に利用されやすい狭隘な政治的道具であった。ソ連とコミンテルンの影響の下で、共産党の民族理論は、世界プロレタリアート革命の理論の枠組のなかに組み込まれていた。この点は1925年中共の「民族革命運動に関する議決案」のなかに表明されている。それによれば、封建階級とブルジョワ階級の民族運動は民族と国家の利益に立脚したもので、根本的には、それぞれの階級利益を優先するものであった。そのため、このような民族運動は他民族からの帝国主義侵略に反対・抵抗すると同時に、自国のプロレタリアート階級を圧迫するという限界性も持つ。これに対して、プロレタリアートの民族革命は、「世界全体の資本主義の圧迫を押し倒すと同時に、自国の資本主義にも反対する立場を取り、しかも民族革命をプロレタリアート世界革命の方向に発展させることを目標とする。ゆえに、このような世界革命の性格をもつ民族革命は民族解放運動と称し、けっしていわゆる民族主義的な運動ではない」、と主張している。⁴⁶⁾このように、中共は民族革命から世界革命への転換を通じて、「中華民族」の利益と共産主義イデオロギーとの間の緊張を緩和させ、さらに、国内における政治闘争の指導権を握ろうとしていたのである。中共が設定した民族革命の目標において、労働者と農民を主体とするプロレタリアート階級は指導階級であり、反資本主義、反封建主義的な傾向をもつ知識人や、ルンペンが民族革命の同盟者と見なされる。なぜなら中共は、兵士、土匪、会党などに参加する者の多くは破産した農民と手工業者であり、プロレタリアートの指導の下で、彼らは民族革命に力を発揮できると考えていたからである。⁴⁷⁾ここで注目すべきことは、共産党が階級論の角度から、プロレタリアート階級の同盟者としての秘密結社の位置づけを認めた上、外国の侵略に抵抗する民族革命における秘密結社の役割をも認識していた、ということである。

しかし、中共は労働運動、農民運動、ソビエト運動を展開するなかで、青幫、洪幫、紅槍会、大刀会などの民間結社と関わりを持ったものの、革命の現実においては、秘密結社と総称されるこれらの民間組織と共産党との関係は非常に複雑で、これらの民間組織は共産党の期待どおりの

役割を果たすことはできなかった。革命運動が進むにつれて、中共は秘密結社を「立ち後れた」勢力、あるいは資本家、地主階級の道具と見なして、その役割を否定するようになった。

1931年9月18日に起きた「満洲事変」をきっかけに、中国の抗日ナショナリズムは空前の高まりを見せたが、中共中央は相変わらず民族解放の立場を堅持し、対秘密結社工作を講じていた。ここで中共閩贛省（福建、江西を含む地域）主席邵式平が1933年10月21日に発した宣伝ビラ「革命に関する一通の手紙」の内容を通して、中共の秘密結社認識に注目したい。この手紙の趣旨は、ソビエト政権の支配地域における大刀会の会衆に向かってソビエト政権を支持するよう呼びかけることであり、その内容は主に次の四点である。第一に、日本、イギリス、フランスなどの帝国主義国家が中国を侵略しえたのは、国民党政権の手助けがあったからである。第二に、地主階級と国民党は一体である。第三に、大刀会は土匪組織である。ソビエトの管轄地域で土匪行為を行うことは紅軍とソビエト政権に敵対することであり、このことはすなわち帝国主義、土豪地主の手先になることである。第四に、大刀会の会衆は立ち上がって大刀会の頭目と土豪地主を殺し、武器をもって紅軍に参加し、ともに帝国主義を打倒すべきである。⁴⁸⁾つまり、帝国主義打倒を目標とする民族革命を実現するには、まず地主階級、国民党政権を打倒しなければならない、としたのである。

このような硬直した認識は、モスクワにいた中国共産党の代表が1935年8月1日に「抗日救国のために全国同胞に告げる」（「八一宣言」とも称する）を發布したことをきっかけに大きく変化した。この宣言文において、中共は「中国のすべてのことは中国人自身によって解決すべきである」という立場を表明している。中共は抗日の「国防政府」の下で、国民党政権打倒の方針を放棄し、国民党と連合して「大中華民族」の抗日運動を行うことを宣言した。⁴⁹⁾その結果、「民族解放」のイデオロギーを政策面において放棄し、抗日民族統一戦線の結成を目標とする中共にとって、華南、西北地域のソビエト根拠地の社会的、政治的構造を変えることが大きな課題となった。これをめぐって、中共内部に激しい意見対立が生じ、最終的には、1935年12月の「瓦窯堡決議」で意見が統一された。⁵⁰⁾この決議案は「中国のソビエト革命がすでに新しい時期に入った」ことを前提に、中国の革命が世界革命の一部であることを強調する一方、地主階級、民族ブルジョワ階級の一部の抗日要求にも応じて、彼らと抗日の民族統一戦線を結成することが可能であると述べている。また、中共は「中華民族を代表する」立場を強調するため、それまでの「ソビエト工農共和国」を「ソビエト人民共和国」へと名称を変え、富農の財産、土地を没収する政策を放棄した。⁵¹⁾

上述のような中共ナショナリズム言説の変化にともなって、革命運動における国内各階級、集団の役割に対する中共の認識にも変化が現れた。すなわち、それまでのソビエト運動期の秘密結社政策を一変させ、再び秘密結社の革命的性格を強調し、またナショナリズムの立場から、抗日戦争における秘密結社の役割を再定義したのである。

ところで、陝甘寧根拠地の中共中央は、根拠地の哥老会をどのようにコントロールすべきかという切実な問題に直面していた。1936年の「全国各党派の抗日人民戦線の創立に関する宣言」が發布されてまもなく、中共西北局「白軍工作処」の幹部鄧穎超は陝甘寧中共の地方組織に「哥老会工作の重要性および方法」と題した報告を送った。そのなかで、陝甘寧根拠地における哥老会の位置づけについて、次のように述べている。⁵²⁾

哥老会工作の問題はまだ日程にのぼっていないし、それについての体系的な研究もなされていない。現在、党はすでにこの工作に関心を示し始めた。われわれがこれまでに把握した初步的な資料からみれば、哥老会の組織は陝西、甘肅、寧夏、綏遠など西北の諸省に至る所にある。その会員は農村、都市、敵の軍隊、白区、蘇区に分散しており、その組織や団結力は今もなお存在している。したがって、哥老会組織とその影響下にある多くの群衆を抗日救国の広い道に載せることはきわめて重要な任務である。張廷滋（芝）、史文華などわれわれの北にある敵は、蘇区をかき乱すための道具、前哨として、すでに哥老会を利用したり哥老会を組織したりしている。したがって、哥老会工作は重要であり、敵との戦いのなかで哥老会工作を行うことはより重要である。

ここで、鄧穎超は哥老会工作の重要性を次の二点にまとめた。第一に、「哥老会組織とその影響下にある多くの群衆を抗日救国の広い道に載せる」ことである。これは前述の1936年4月25日中共の「全国各党派の抗日人民戦線の創立に関する宣言」の趣旨を受けて、哥老会を抗日救国戦争の一員として位置づけているものと見られる。第二に、陝北地域で中共と戦う「敵」はすでに哥老会組織を中共攻撃の道具として利用している、ということであった。

では、どのようにして哥老会を「抗日救国」の道に導くべきであろうか。鄧穎超の手紙によれば、哥老会は明末清初期に形成され、明朝の遺老たちが明王朝を復活させるために作った組織である。当初、哥老会は「扶明滅清、興漢滅滿」を方針に、富者の財産を奪い、貧者を救済するスローガンを掲げて行動していたが、時代の変化にともなって次第に当初の方針を失い、下層の民衆組織へと変身した。しかしながら、「現在上述の目的およびスローガンを抱える正統分子が未だにいる」ことを指摘し、「哥老会の大部分を無頼漢と見なし、哥老会の扶明興漢の民族性や彼らの豪俠義氣的な役割を認識することができない」でいる陝北共産党の幹部を批判した。続いて、⁵³⁾鄧穎超は次のように述べている。

われわれの方針は、基本的に哥老会を味方にする、そして哥老会と連合することである。彼らがもつ扶明興漢の趣旨を、中国を興し、日本を打倒する民族戦線の方に利用し、彼らのもつ豪俠義気、生死、困難を共にする精神を漢奸、売国奴を取り除く方向に誘導し、（中略）彼らと団結し、彼らが抗日救国の一勢力になるように努力せよ。

この一節は、孫文などの革命家がかつて秘密会党の「反清復明」を強調したことを連想させ、会党を「排滿」という装置に組み入れた孫文の思考パターンは鄧穎超の手紙からも読みとることができる。さらに、鄧穎超は哥老会組織を以下の三つに分類した。(1)漢口から上海までの揚子江中流、下流地域で活動する紅幫、(2)漢口、通州地域で大きな勢力を持つ青幫、（その多くは「理門」〔在理教〕とも言う）に入っている、(3)哥老会（原文には哥老会の活動地域については言及されていないが、文脈からみると、西北地域を指すものと見られる。⁵⁴⁾つまり、鄧穎超は哥老会をすべての青幫、洪幫、理門組織の源流と見なしたのである。

鄧穎超は、全国範囲における抗日救国戦略のほか、共産党の「蘇区」と国民党の「白区」の対立の中で哥老会をどのように利用すべきかについても明確な方針を打ち出した。具体的には、「蘇区」の中では新たに哥老会組織を設立しないこと、「蘇区」の哥老会を通じて「白区」で哥老会工作を展開すること、「哥老会に加入したことがあり、哥老会のなかで比較的に名声と地位のある黨員、団員を哥老会に派遣し工作を行わせる」こと、「白区」の「龍頭」を「蘇区」に招い

て「面談」し、「われわれの主張と態度を説明し、われわれと親しい兄弟のように団結させる」こと、場合によっては「白区」で新たに山堂を開き、哥老会の「好漢」を招き寄せることを通じて、次第に「革命の大きな道理」と「抗日救国」を宣伝すること、最後に、紅軍のなかで「抗日戦線部」もしくは「地方工作部」⁵⁵⁾を設立し、紅軍が活動する地域あるいは活動する予定の地域で哥老会工作を行うこと、である。概していえば、抗日統一戦線における哥老会工作の目的は以下の二点に集約することができる。第一に、哥老会の「興漢排滿」言説を「抗日救国」につなげることで、第二に、「白区」と「蘇区」の対立のなかで哥老会を通して「白区」への工作を進めること、である。

鄧穎超の報告の日付は不明であるが、「保安県」の三文字から、この手紙は1936年6月以前のものと推察される。なぜなら、この年の6月、中共中央は劉志丹の死を追悼するために保安県を「志丹県」に改めたからである。⁵⁶⁾なお、この手紙や前出の4月25日の宣言文はいずれも青幫、洪幫、理門、哥老会に言及しており、両者の間に一定の関連性があると見られる。鄧穎超の報告と照らし合わせると、四月の宣言文がこれらの幫会組織を救国の「党派」と見なしたのは、中共はすべての秘密結社が哥老会に起源をもち、哥老会はもともと「反清復明」を趣旨とする組織であると認識したからである。鄧穎超の報告は、秘密結社の伝統とその現実的な行動には革命的な要素が含まれていると指摘し、秘密結社に対する認識転換の理論上の可能性を論じている。以下に見るように、この報告はその後の哥老会工作の方針に直接的な影響を与えた。⁵⁷⁾

1936年7月15日、ソビエト人民中央政府主席毛沢東の名義で「対哥老会宣言」が発せられ、哥老会メンバーに対して兄弟義気をもって国難に赴くよう呼びかけた。宣言が陝北の謝子長、劉志丹部隊を哥老会と称していることも興味深い。宣言の次のような一節は注目に値する。

汝たちは興漢滅滿を主張するが、われわれは抗日救国を主張する。汝たちは打富濟貧を唱えるが、われわれは地主を打倒し、その土地を（農民に）分け与えよと唱える。汝たちは財を軽んじて義を重んじ、天下の英雄を好むが、われわれは身を捨てて中国と世界を救おうとし、全世界の被圧迫、被剝奪の民族や階層と手を結びたい。われわれと哥老会は互いの観点、主張もほぼ同じだし、同じ敵、同じ未来を有する。

つまり、中共は哥老会を動員するため、民族、社会、倫理の三つの次元において哥老会との共通性を極力強調し、哥老会にエールを送っているのである。内容からみれば、この「宣言」は前述の鄧穎超の報告と一脈通ずるものである。「宣言」の末尾で、毛沢東は「白区」の哥老会メンバーに次のように呼びかけている。⁵⁸⁾

ソビエト政府は抑圧された全中国の人民の政府である。われわれは責任をもって、国民党政府に踏みこまれたり指名手配されたりした人をすべて招待し守る。したがって、哥老会はソビエト政府の下で公に存在することができる。われわれは哥老会招待所を設けて、白区で立脚できない英雄好漢、義侠心に富む人々を招待する。われわれは各山堂の哥老会山主大爺、四方の好漢兄弟が代表を派遣しあるいは自ら来て、われわれとともに救国の大計について協議することを希望し、求め、歓迎する。われわれは汝たちの到来を熱烈に待ち望み、歓迎している。われわれは大声で叫んでいる。

哥老会のかつての革命精神を発揚せよ。

哥老会は全中国の人民と団結して日本をうち破り、中華を興そう。

中華民族解放万歳。

この熱烈な呼びかけは、哥老会を中共主導の統一戦線に組み入れようとする中共の差し迫った心情を如実に表している。

しかし、共産党と哥老会の「同一性」を強調することは、中共の高度に集権的な組織を損ないかねない行為であった。7月16日、中共中央書記処は中共の各機関に「哥老会工作に関する中央の指示」を下した。それによれば、哥老会は青紅幫、礼門、三合会、紅槍会など数多くの秘密結社の一つであり、清代初期に「民族思想」に富む知識人と「下層社会」とが結合してできた組織である。下層社会の農民、手工業者、兵士、游民は「政治的、経済的にもっとも抑圧、剝奪を受けた階級と階層である」がゆえに、哥老会は「民族の利益と群衆の利益（「興漢滅満」、「打富濟貧」）」を代表する組織である。「人民統一戦線の原則」から、哥老会は抗日・反売国奴の勢力になることができる。したがって、「蘇区」における哥老会の公の活動を容認することができる、とされた。⁵⁹⁾しかし、その一方で、この「指示」は共産党と哥老会の間の相違をも強調している。まず、哥老会の「反動的」、「封建的」な思想と組織形態から、哥老会が時に「反革命の道具」として利用されている面も指摘され、哥老会を共産党を中心とした抗日統一戦線に吸収し、それによって哥老会の「革命」的な側面を発揚し、「反革命」的な側面を取り除くべきであるという方針が明らかにされている。具体的には、第一に、ソビエト地域における哥老会の存在を合法化し、哥老会メンバーを「蘇区」の各種の団体に参加させ、彼らに土地や生活必需品を配給する。そして、これを通じて哥老会の経済的基盤を崩し、哥老会組織を自然に消滅させる。第二に、国民党政権の支配地域において、哥老会が山堂を開くのを助け、まず一つの地域において中共が哥老会組織内部の指導権を握り、次第に哥老会の組織を「革命的な」組織へと転換させる、ということである。⁶⁰⁾党内の哥老会分子の処分について、「指示」は、哥老会に参加したことのある党員、紅軍将校、兵士、およびソビエト政権下の群衆には、「多かれ少なかれ哥老会の遅れた思想と習慣が残っている可能性がある。われわれは政治教育を強化し、同志の間の親しい友愛と団結を提唱することによってそれを取り除くべきである」、と述べている。⁶¹⁾

以上の「同一性」と「相違」を巡る二つのテキストは哥老会に対する認識において大きく異なっているものの、「白区」の哥老会が「蘇区」に来るのを歓迎する点においては共通している。

三、赤い中国の哥老会大会(1)——河連湾哥老会大会

毛沢東の「対哥老会宣言」が発せられた後、ソビエト根拠地で国民党支配地域からの哥老会メンバーを招待するための招待所が設置され、哥老会に対する動員工作が始まった。

ソビエト根拠地の哥老会は中共の呼びかけに一定の反応を示した。中共の機関紙『紅色中華』によれば、1936年8月、「蘇区」の志丹県吳堡区で哥老会大会が開かれ、哥老会の名義で民団と国民党軍隊内の哥老会メンバーを対象に工作を展開することが決められた。会議はソビエト政府に代表を派遣し指導するよう求めた。⁶²⁾これとほぼ同時に、「哥老会に対するソビエトの呼びかけが発せられた後、華池県の哥老会は積極的に抗日救国に参加するようになった」。華池県哥老会の九人の頭目が会議を開き、三十余人のメンバーを数える華池県の「抗日救国会」が設立された。

しかも、哥老会の関係を利用して「白区」と「辺区」（「白区」と「蘇区」の境）でより多くの哥老会のメンバーに参加してもらうよう働きかけることが決定された。⁶³⁾

国民党支配地域の一部の哥老会も中共の呼びかけに応じた。「白区」では、寧夏の軍閥馬鴻逵の部下である哥老会の頭目劉某と馬某が、中共が「三辺」（定辺、安辺、靖辺）に設けた哥老会招待処に赴いた。「馬某」は回族出身の馬懷蘭のことで、かつて馬鴻逵の部隊で副連隊長をつとめていた。中共の報道によれば、この二人は「馬鴻逵が日本軍に投降し、寧夏を売り渡したことに反対したため、馬鴻逵は彼らを『内賊』（回し者、ちなみに紅軍は『外賊』と呼ばれた）と見なし、指名手配した。居場所がなくなった二人は三辺の哥老会招待所に来て、地元の哥老会頭目とともに『反日興中』のスローガンを掲げた」という。⁶⁴⁾

しかし、中共の呼びかけに対する哥老会の反応は熱烈とは言えない。その原因はさまざまである。馬頭山の哥老会大会に参加した中共幹部の報告から分かるように、志丹県の哥老会は動員されたものの、「（共産）党とソビエトの本当の姿を把握していないため、一部の（哥老会）会員はまだ迷って」いた。華池県では哥老会招待所が設立され、十数人の「江湖抗日遊撃隊」も結成されたが、武器がないため、共産党に資金援助を求めた。逆に、慶陽県一区の哥老会は四、五丁のライフルをもつ部隊を組織したが、まもなくその武器は中共の県委員会によって没収された。その一ヶ月後の8月19日に、哥老会工作を速やかに展開するため、中共陝北省委員会は「中華江湖抗日救国籌備委員会」の名義で各地の哥老会メンバーに抗日救国のために「蘇区」に集まるよう呼びかけた。その要約は次のとおりである。

我が中国はすでに滅亡の寸前にある。（中略）われわれ江湖兄弟は、そもそも「滅洋興中」（侵略した外国人を滅ぼし、中国を興し）、「鋤奸扶弱」（奸を取り除き、弱を扶助する）の志を持っている。ただちに起きあがって日本に抵抗し国を救い、漢奸を取り除き民衆を救うために旗を挙げよ。そのため、哥老会同志はここに集まり、中国を救うという従来の趣旨を受け継ぎ、過去の救国の偉業を発揚し、すでに江湖抗日救国委員会を発起し、江湖抗日救国軍を組織する籌備会を設立した。まずは各碼頭（連絡場所）にこのことを文書で通達し、急いで我が漢流兄弟をここに集め、ともに抗日救亡の大計を議論せよ。⁶⁵⁾

毛沢東の「対哥老会宣言」と比べてみると、この通達の特徴は秘密結社の「鋤奸扶弱」という言説、および「滅洋興中」の排外主義的なスローガンを踏まえた点にある。しかし、この通達は「宣言」よりもっとさし迫った口調で次のように述べている。「各処の馬頭（支部）で緊急に漢流（哥老会）兄弟を集めてともに抗日救国の大計について協議する。時はすでに迫ってきた。情勢はすでに危うい。この手紙が届いたら、くれぐれも遅延しないように。直ちに代表を派遣し、参加時宜について相談してくだされば幸甚である」。⁶⁶⁾その一週間後、哥老会大会が開催された。

8月26日、慶陽県、環県と「白区」から計八十名の哥老会メンバーが参加する哥老会大会が陝北省委員会所在地の河連湾で開かれた。そのうち、二十人あまりが西峰鎮など「白区」からの参加者である。中共中央の機関誌『紅色中華』は会議の内容について次のように報じた。⁷⁰⁾まず、中共陝北省ソビエト政府主席馬明方が中央政府の「対哥老会宣言」の内容について説明した。⁷¹⁾そして、中共陝北省委員会の代表が当面の情勢と共産党の抗日救国の方針、哥老会政策について報告した。「省委員会の代表の報告が終わると、拍手の音がしばし鳴りやまなかった」という。その後、西峰鎮哥老会の徐大爺など哥老会の首領が発言し、「過去における哥老会の趣旨や今後ソビ

エトの指導の下で抗日工作を行うこと、過去に辛亥革命に参加した栄光の歴史を再び発揚することなどについて説明した。演説は非常に盛り上がった。哥老会の兄弟はみな興奮して腕を振るいたくて、共産党の指導を支持し、一致して抗日救国を行い、山堂大会を召集するよう提言した。午前の会議が終わった後「省委員会で会食した」。午後の会議では、以下の十の問題について討論した。

- 一、日本と戦って中国を救うこと。
- 二、日本帝国主義者と漢奸の財産を没収し抗日の経費とすること。
- 三、貪官汚吏を取り除くこと。
- 四、漢奸、売国奴に反対すること。
- 五、四方の英雄を団結させ、富者を倒し貧者を救うこと。
- 六、過去の革命精神を発揚し、断固として日本と戦い、売国奴と戦うこと。
- 七、心をつにして互いに助け合い、抗日の人民を守ること。
- 八、断じて国民党の苛捐雑税と壮丁攤款に反対すること。
- 九、各地に散在する武器を集め、抗日のために使うこと。
- 十、共産党の抗日武装を擁護すること。

これらの問題をめぐって、哥老会の首領たちは熱烈に議論した。「特に慶陽から来た大爺は民衆から金銭残物をゆすり取り、搾り取った汚職官僚の行状を余すところなく訴えて、満場の聴衆の心を奮い立たせた。最後に、馬主席は哥老会招待所を設立し、積極的に抗日に参加する「龍頭大爺および江湖好漢」を招待することを宣布し、大会が終わった。

『紅色中華』の報道からみれば、哥老会の首領たちは抗日統一戦線の結成という新しい政治的局面における自らの役割を見出し、大いに興奮していた。しかし、上の十カ条の内容をみれば、あまり筋道が通っておらず、実施の具体的な方法も提示されていない。このことから、陝北省委員会はこの哥老会大会を召集はしたものの、具体的な指導力は欠いていたとすることができよう。そのため、哥老会メンバーが河連湾大会の開催に興奮し、仲間たちを誘って馬頭山大会に参加しようとした時、中共陝北省委員会内部では、馬頭山大会を通じて哥老会をコントロールする計画を立てるために哥老会工作の方針をめぐって激しい論争が展開された。

四、イデオロギーと哥老会動員——哥老会大会の波紋

河連湾大会の開催は哥老会メンバーの間で一定の反響を呼んだ。共産党に対して半信半疑であった一部の哥老会頭目は、共産党の指導の下で大いに腕を振るう機会があると思うようになった。しかし、その一方で、哥老会大会後、共産党にとって憂慮すべき言動も現れた。共産党支配地域において、哥老会の地位はかつてないほど高まった。当時、哥老会の間では、「哥老会なら通行許可証は要らない」（新城県）、「哥老会兄弟ならソビエト地域に行けばアヘンがもらえる」（志丹県）、「紅軍が勝ち戦をしたのも哥老会の力だ」（靖辺）、「地方ゲリラ部隊を拡大するには、哥老会の力を借りなければならない」、などの噂が広がっていた。このことは、周恩来が陝北省委員会に宛てた、哥老会問題に関する手紙からもうかがえ、「現在各方面からまもなく馬頭山で各山堂

の会議が開かれると噂されている。『蘇区』の哥老会兄弟はみなそれに出席すると言っている。この情報は哥老会の碼頭を通じてきわめて速く、広く広がっている。志丹県では、各山堂の会議を開くのはこれまでのどの記念行事よりも人々の関心を集めている」と述べられていた。⁷³⁾

周恩来の手紙は、ゲリラ部隊の指導権をめぐる共産党と哥老会との衝突についても言及している。環県曲子一帯に新しく成立したゲリラ部隊は「われわれの工作が不当であったため、全員敵に投じ」、安定県、華池県の哥老会ゲリラ部隊も敵に投降した。また、八十一師、二十九軍など一部の紅軍部隊では、内部の哥老会の勢力が大きかったため、共産党の命令が有効に実施されないことがあった。八十一師と二十九軍はいずれも陝甘地域地元の共産党軍隊であった。前述のように、徐海東が率いる紅軍と劉志丹の第二十六軍が合流した後第十五軍が結成された。その下に第二十五軍第七十五師団、第二十六軍第七十八師団、第二十七軍第八十一師団がおかれた。⁷⁴⁾ 第八十一師団の師団長と政治委員をつとめたのは賀晋年、張達志で、兵士の大多数が陝甘地域出身の貧しい農民であった。⁷⁵⁾ さらにそのなかには軍閥部隊の脱走兵や地方民団の団員、哥老会メンバーも含まれていた。⁷⁶⁾ 共産党にとって、これらの人々をイデオロギー的に教育するのは困難であった。それに対して、第二十九軍は1936年1月に陝西省富県の直羅鎮でいくつかの独立大隊を合わせて編成された部隊である。中共陝甘省軍区軍事部長肖勁光が軍団長を兼任し、後に謝嵩が軍団長に任じた。共産党側の資料によれば、この部隊は「約半月の整備と訓練を通じて党の基層組織を健全化し」、「雑多な色の服装を廃棄し、統一の黒い軍服と赤い襟章に替えて、帽子には赤い布の五角の星形をつけた」という。しかし、周恩来の10月6日の手紙から判断すれば、この部隊における共産党の指導権は依然確立されていなかった。⁷⁷⁾

共産党にとって心配なのは、哥老会の間で、「紅軍であれ、白軍であれ、いつでも哥老会には食うものがある」という言葉が流行っていたことであった。哥老会メンバーの間に、「紅軍はわれわれに日本と戦ってほしいし、白軍（国民党軍隊）もわれわれに日本と戦ってほしい。われわれは紅軍についてもいいし、白軍についてもいい」という高揚した不敵な雰囲気漂っていたのである。⁷⁸⁾

共産党にとってもう一つの不安だったことは、哥老会の山堂会議を開催する計画は、「蘇区」だけではなく国民党が支配する「白区」でも広い関心を集めていたことである。実際に国民党の地方実力派高桂滋、高双成は西峰鎮で哥老会が山堂を開くなどの公の活動を認め、哥老会を手なずけて、中共が「蘇区」で開いた哥老会大会に対抗した。慶陽県で開かれた哥老会大会に出席した「李大爺」は国民党から金をもらって、各地の哥老会に「帖子」（通達文）を配り、「陰曆九月三日に西峰に集まって会議を開く」ことを呼びかけた。この「李大爺」は河連湾哥老会大会で「土豪劣紳」と国民党の罪状を激しく批判した「李大爺」と同一人物の可能性が大きい。

共産党の哥老会山堂会議に対抗して、国民党の地方実力派も「紅軍の一連隊を引き入れた者には連隊長のポストを与え、武器を持ち込んだ者には二ヶ月分の給料を与える」と言い、積極的に哥老会を引きつけようとしていた。⁷⁹⁾ 共産党側の資料によれば、国民党軍隊と地方民団に手なずけられた哥老会のスパイが「蘇区」に入って活動していたという。⁸⁰⁾ このように、共産党と国民党の政治的対立の下で、哥老会は双方の利用・争奪の対象となったのである。

結局のところ、共産党と哥老会との共通性を強調する毛沢東の「宣言」は中共の哥老会動員の初志に反するものであり、ソビエト政権の建設にとってマイナス的な影響を及ぼした。このこと

は、もとより哥老会に対して懐疑的であった中共党内の一部の党員が哥老会工作を批判する理由となった。最初に反対意見を述べたのは中共陝北省委員会書記郭洪濤である。前述のように、河連湾哥老会大会の司会は中共陝北ソビエト政府出席馬明方であった。それぞれ中共ソビエト政府主席と中共陝北省委員会書記をつとめる郭洪濤と馬明方の間の意見対立は、中共の党とソビエト政権の間の対立でもあった。

実は、郭洪濤と馬明方の対立は毛沢東が率いる中央紅軍が陝北に到着する以前にすでに始まっていた。前述のように、共産党陝西省委員会が1935年10月に劉志丹をめぐる「反革命事件」を演出し、劉志丹部隊の第二十六軍の大隊長以上の幹部、中共陝甘辺県委員会書記などを逮捕した。この事件を作り出した張本人の一人は郭洪濤であったが、逮捕者の中には陝甘工農民主政府主席であった馬明方も含まれていたのである（そのほかに、高岡、習仲勛、劉景範なども含まれる）。劉志丹は彼ら（朱、郭）が「土地革命のなかから成長した紅軍を信じず、長期にわたる闘争で鍛えられた幹部を信じない」ことが事件の原因であると述べていた。⁸¹⁾

興味深いことに、中央紅軍が陝北に進駐した後、事件の被害者たちの名誉はすべて回復され、劉志丹、高岡、馬明方、習仲勛、劉景範などは毛沢東を中心とする中共ソビエト政権の高官となった。しかし、毛沢東は朱、郭を処分してほしいという被害者たちの要求を不問に付し、朱、郭を同年11月に成立した中共陝甘省委員会と陝北省委員会の書記にそれぞれ重用した。⁸²⁾

1936年4月14日、長期にわたって陝西、甘肅の省境地域でゲリラ戦を行っていた劉志丹は毛沢東によって山西省に派遣され、閻錫山の部隊と戦った。中陽県三交鎮で、一発の銃弾が劉志丹の心臓に命中した。⁸³⁾ 国民党の大軍に包囲され、陝北ソビエト根拠地を強化しなければならない中共にとって、劉志丹の死は言うまでもなく大きな損失であった。しかし、その一方で、劉志丹を革命のシンボルとして讃えることが、中共にとってより重要な意味を持つこととなった。劉志丹の死がその後の中共の哥老会工作にどのような影響を与えたかを説明する資料はないが、劉の死後における中共の哥老会政策の展開を時系列に沿って仔細に吟味すれば、両者の間にある関連性があることがうかがえる。⁸⁴⁾

- (1) 4月24日、陝北根拠地の中心地の瓦窑堡で劉志丹の追悼大会が開かれ、数千人が出席した。
- (2) 4月25日の「為抗日救国告全体同胞書」が哥老会を「党派」と見なし、抗日戦争における哥老会の役割に言及した。その後、鄧穎超が所属する中共「西北中央局」は哥老会工作の方針を打ち出した。
- (3) 6月、劉志丹の故郷保安県の名前が志丹県に改められた。
- (4) 7月15日、毛沢東は「宣言」のなかで、特に「謝子長、劉志丹などの同志は、軍のリーダーであっただけでなく、哥老会のなかの模範でもあった」ことを強調した。

以上の(1)から(4)までの経過から読みとれるように、中共は陝北地域社会と密接な関係をもって劉志丹を通じて、ソビエト内部の統合を強化しようとした。その連結点はまさに劉志丹がかつて参加していた、地元社会に大きな影響力を持つ哥老会組織とそのネットワークであった。

しかし、陝北省委員会の所在地で開かれた哥老会大会は、哥老会の山堂大会のような厳粛な雰囲気でもなく、共産党の大会のような緊張感に満ちた雰囲気でもなく、時にがやがやと騒がしい雰囲気であった。かつて劉志丹が指摘したように、陝北省委員会の書記郭洪濤にとって、地元陝北出身の幹部は目障りであった。省委員会の所在地で哥老会大会が開催されることを、郭は半ば

蔑む気持ちで見ていたであろう。彼は河連湾大会以降沈黙を保ったが、馬明方主導の対哥老会工作に多くの問題が露呈したのを見て、ついに沈黙を破り、新しい哥老会対策を打ち出した。

おそらく9月末もしくは10月初頭、郭洪濤は数万字の報告書を起草し、「哥老会を見方に引き入れるために、どうしても哥老会を改造しなければならない」と強く主張した。具体的には、第一に「哥老会を革命群衆の組織に変える」ことが挙げられた。彼は、「(哥老会の) 革命の部分のみを見て、その反革命の部分を見ない」、「(哥老会が) 反革命に利用される部分のみを見て、革命的な性質の部分を見ない」という二つの傾向を批判した。第二に、「哥老会を人民の革命闘争の味方に引き入れ、「白区」、白軍（国民党軍隊）のなかで発展する組織に変える」ことを主張した。郭はまもなく開かれる馬頭山大会は「白区」の哥老会兄弟を十分に召集しておらず、「蘇区」哥老会の大会になりかねないと批判し、このことが「客観的に蘇区内の哥老会の発展を助長することになる」と指摘した。郭洪濤は、次のような哥老会改造の七つの具体的な方法を提出した。⁸⁵⁾

- (1) 馬頭山山堂会議の際に「西北江湖抗日救国会籌備会」の設立計画を撤廃し、引き続き「哥老会」の名称を使用すること。
- (2) 時期的に馬頭山山堂会議が「白区」の哥老会の大会参加にとって不利であることを認め、これを補うために、会議の後に代表を「白区」に派遣し、多くの山堂、香堂を設置すること。
- (3) 日本と戦い、漢奸、貪官汚吏を取り除くなど新しく十ヶ条の哥老会の闘争綱領を設けること。
- (4) 哥老会の旧い会規を放棄し、新しい会規を定めること。
- (5) 哥老会メンバーに会員証を配り、彼らを「白区」に派遣し工作を行わせる。このことは、同時に「蘇区」における哥老会の発展を抑制し、哥老会をコントロールする効果が期待される。
- (6) 「白区」と「辺区」の間に連絡点として碼頭を設置すること。
- (7) 香堂を設けて、「白区」と「辺区」で会員を召集すること。

上の七つの意見のうち、第一条は陝北ソビエト政府がそれまでの二ヶ月半の間に行った哥老会工作を否定する内容であった。第二条は、「白区」で哥老会組織を拡大することに関する「指示」の具体的な実施に関する内容で、第三条～第五条は哥老会の改造に関する具体的な意見、第六、七条は哥老会を利用して革命勢力を拡大させることに関する具体的な方法である。

郭は自分の意見を述べる前に、前出「哥老会工作に関する中央の指示」（7月16日）の内容を長文引用している。彼は「指示」を根拠として、それまでの陝北ソビエト政府の哥老会工作を否定しようとしたのである。郭洪濤の意見は陝北省委員会の二人の幹部の支持を得て、三人の連名で中共中央に上呈された。これは周恩来の有力な支持を得た。10月6日、周恩来は郭洪濤ら三人および陝北省委員会に手紙を送り、ソビエト政府主導の哥老会工作について次のように批判している。「われわれは哥老会の龍頭、大爺、兄弟に白軍、白区の中へ行って、停戦、抗日の宣伝をやってもらい、彼らがもつコネを利用して白軍の官兵と群衆を団結させ、停戦、抗日を促進する会及びほかの抗日団体を結成すべきである。しかし、哥老会による単独の政治組織や武装組織の形成は許すべきではない」。⁸⁶⁾ つまり、周恩来は郭洪濤らの意見を基本的に肯定したうえで、哥老会動員に関する新しい方針を打ち出したのである。このことは、中共の哥老会政策の転換を意味した。

哥老会政策の転換の理由について、周恩来は手紙のなかで次のように説明している。周は、「場所、時間、告示のいずれの条件にも制約され、会議は蘇区内の哥老会兄弟の集会に限られてしまっている。そのため、会議は事実上蘇区の哥老会の集まりとなり、蘇区における哥老会の活動と発展に弾みをつけた」と述べ、馬頭山で哥老会山堂会議の開催を決めた陝北ソビエト政府を批判した。⁸⁷⁾そして周恩来は哥老会工作をめぐる陝北ソビエト政府の錯誤を次の三点にまとめた。すなわち、第一に、共産党の幹部（特にかつて哥老会に参加した者）は党の階級闘争の立場を失い、哥老会の立場に立って共産党を指導している。これは哥老会によって「蘇区」が支配されることを意味し、結局、紅軍が破壊されてしまう結果になりかねない。かつて哥老会に参加した党の一部の党員や幹部は、党の秘密会議の後その足で哥老会の会議に出席した。このことはソビエト政権下の「二重政権」にもつながる。第二に、哥老会工作の責任者は哥老会工作の目的が国民党軍隊を対象とした反革命闘争にあることを知らず、もっぱら「蘇区」内において哥老会工作を行ってきた。そのため、華池県の哥老会は共産党に参加し（共産党員も哥老会に参加する）「蘇区」で活動を行い、哥老会が武装を保持しながら紅軍と連合することを求めた。一部の哥老会分子は哥老会招待処で無料の接待を受けたにもかかわらず、なお接待が周到でないと不満を洩らした。第三に、哥老会を動員する際は、哥老会の首領よりも哥老会の群衆の方を動員し、それを通じて反動的な首領を改造することがより重要である。しかし、一部の共産党幹部はこれを認識していない、という。⁸⁸⁾

以上の三つの問題をめぐって、周恩来は馬頭山の山堂会議が間近に迫る頃、次の三点の意見を陝北省委員会に提示した。第一、哥老会頭目の共産党に対する疑念をなくすために、形式上共産党員が哥老会に加入することを避ける。共産党幹部を訓練し、党の立場に立って哥老会に参加した共産党員を指導させる。そして、重要な発言をするときは、哥老会に参加したことのない党員によって、ソビエトの代表の名義で発言させる。第二、「興中反日」を哥老会の最も中心的なスローガンとし、しかも「蘇区」と紅軍ではなく、「白区」を哥老会の活動範囲とすること。第三、哥老会に対する指導を強化し、哥老会の組織を改造し、その名称を「江湖抗日救国会」に変える。「蘇区」における哥老会の存在は許すが、その組織の発展を禁止する、ということである。⁸⁹⁾周恩来は哥老会の山堂を開くこと自体には反対しなかったが、多くの哥老会頭目が一堂に集まって会議するのではなく、会議の場所も「蘇区」と「白区」が隣接する「辺区」を選ぶべきであると考えていた。周によれば、それには次の二つの利点がある。(1)哥老会の各山堂が別々に会議を開くなら、哥老会に対する中共のコントロールがしやすい。そして(2)「辺区」で哥老会の山堂会議を開くなら、「白区」の哥老会分子に影響を与えやすい、ということである。⁹⁰⁾

「江湖抗日救国会」の名称を残す点を除けば、周恩来は郭洪濤の意見をほぼ全般的に支持した。その後、陝北ソビエト政府に取って代わって、陝北省委員会は哥老会工作の指導権を握るようになった。一週間後の馬頭山大会を控えて、10月5日と10日の『紅色中華』に哥老会に関する記事が連載された。10月5日の記事には哥老会に関する次のような興味深い「三問三答」の内容が含まれている。⁹¹⁾

問：哥老会はどのような組織であるか。

答：哥老会は中国に存在する多くの秘密結社の一つであり、歴史上の各時期にそれぞれの統治者に不満を持つ知識人、農民、手工業者、兵士、遊民によって結合された群衆組織である。

問：われわれは哥老会に対してどのような態度を取るべきであるか。

答：われわれは哥老会の革命精神を発揮させ、彼らを統一戦線に吸収し、抗日救国の運動に参加させるべきである。したがって、われわれは蘇区の哥老会を認め、白区においては抑圧されているすべての哥老会の江湖好漢を受け入れ、これを起用する。

問：しかし、われわれは蘇区内の哥老会に参加すべきであるか。

答：蘇区内においては、あらゆる抗日救国の群衆運動はソビエト政府の指導の下におかれており、また、工会、互済会などの群衆による革命組織もわれわれの利益を保つので、哥老会に参加する必要はない。

つまり、哥老会は階級抑圧に反抗し、革命的精神をもつ組織であり、哥老会メンバーは抗日救国の統一戦線のなかで役割を発揮することができる。しかし、ソビエト政権の下にはさまざまな民衆組織が存在しているため、民衆は哥老会に加入する必要はない。要するに、中共は哥老会の合法性を認めながらも、根拠地内部における哥老会勢力の拡大を警戒していたのである。⁹²⁾

また、10月10日の記事には、哥老会に関する次のような「三問三答」が掲載されている。

問：白区にいる哥老会の兄弟たちの生活はどうであるか。

答：白区にいる哥老会の兄弟たちももっとも抑圧された階層で、経済的には行き詰まっており、政治的には完全に圧迫された状況におかれている。彼らは生存のために危険を冒して造反したが、国民党が彼らを社会のくずとして殺している。このような状況の下では哥老会の兄弟たちには生きる道がない。

問：蘇区にいる哥老会の兄弟たちの生活はどうであるか。

答：蘇区にいる哥老会の兄弟たちにはそれぞれの必需品が分配された。彼らは土地や家畜、家を与えられた。彼らは失業の苦しみもなく、あらゆる政治的圧迫から解放された。ソビエトこそ哥老会や抑圧・略奪されたすべての人民の救いの星と未来である。

問：現在蘇区のあらゆるところに山堂が開かれている。軍閥の毛炳文、馬鴻逵らも山堂を開きたいという。これはどういうことであるか。

答：蘇区で山堂を開くのは白区の哥老会兄弟に革命工作に参加し、ソビエト勝利のために戦ってもらうためである。これと違って、軍閥の毛炳文らが山堂を開いたのは蘇区に進攻し、ソビエト政権を破壊し、哥老会の兄弟たちを殺そうとするためである。もし哥老会の兄弟たちが毛炳文を頼って蘇区を攻撃するとしたら、哥老会の兄弟たちは利益を得どころか、死に追い込まれるにちがいない。

この問答は先の問答とは異なり、「蘇区」と「白区」の哥老会メンバーの政治的、社会的地位の相違を比較することによって、ソビエト政権が哥老会の保護者であることを強調し、哥老会に対して婉曲的に次のような警告をも発している。すなわち、もし哥老会が「白区」の国民党軍隊と結託するような場合には、何の利益も得られないどころか、抜け出ることのできない破滅の道に行くことになる、という警告である。

五、赤い中国の哥老会大会(2)——馬頭山哥老会大会

中共は哥老会に対する公の宣伝攻勢と同時に、開催間近の馬頭山哥老会大会を中共のコントロール下におくためにひそかに動き出した。前述の河連湾哥老会大会と違って、中共中央の機関紙『紅色中華』には10月15日に開かれた馬頭山大会についての報道すら見当たらない。およそ二ヶ月後の12月13日の『紅色中華』の記事が引用した「安塞通信」によって、馬頭山会議において、共産党は哥老会工作の重点を「蘇区」から「白区」に移したことがわずかにうかがえるのみである。⁹³⁾

では、馬頭山の哥老会はどのような雰囲気の中で開かれたのか。これについては、大会直後の報告と半世紀後当事者たちが語った内容との間にかなり大きな違いがある。⁹⁴⁾

出席者が大会後に報告したところによれば、大会前に「われわれの党の多くの同志は哥老会を味方にするために哥老会に加入した」とされる。一部の哥老会組織は中共の哥老会政策の転換に警戒心を持っていた。甘洛県から来た哥老会代表の話では、もとより連絡の取れる哥老会メンバーは多くないし、連絡が取れた人でも、「われわれの真相が分かっているため、恐れていて来なかった」という。馬頭山大会の際、「われわれの同志は多くの条件を出したが、私から見れば、閻老会（＝哥老会）の一部のメンバーはこれを理解したが、一部はまだ疑問をもっている」。「山主」を選挙する際に、閻老会の一部の「大爺」は中共陝西省が予め決めた人選に反対した。そのため、中共は大会開会の前夜に準備大会を開き、抗日救国の任務が重大で、「才能のある人に責任をもって山主になってもらいたい。ゆえに、白区で全般的に閻老会を味方にするための工作を進めていく」ことを強調した。

しかしながら、半世紀後に公にされた参加者による回顧談のなかでは、馬頭山の哥老会大会は成功した大会として語られている。中共の代表として会議に参加した張崇徳は一九八〇年代にこう語った。「各地の山主たちはみな腕を振るいたくて自信満々であった。彼らは日寇に対する満腔の怒りの炎を抱いて、（共産）党と毛主席の指導の下で積極的に抗日戦争救国運動のなかに身を投じ、日本帝国主義を打倒し、蔣（介石）汪（兆銘）売国奴を根こそぎすることを決心した」。⁹⁵⁾しかし、馬頭山会議当時、「毛主席」という呼称はまだ一般的に使われておらず、汪兆銘もまだ日本側に身を預けていない。

同じ時期、もう一人の馬頭山大会の出席者劉守義は次のように当時を振り返っている。「馬頭山会議で（共産）党が哥老会に働きかけた結果、陝甘寧の隣接地域の哥老会組織は党や毛主席の指導と劉志丹同志の導きの下で、甘辺（甘肅省境）と陝辺（陝西省境）革命根拠地の設立に手柄を立てた。それに（彼らは）抗日戦争の始めころにも貢献した。彼ら（の功績）を讃えるべきである」。⁹⁶⁾ここにも「毛主席」という呼称が使われているし、特に劉志丹に関する記述は時系列が前後している。「劉志丹同志の導きの下」云々とあるが、馬頭山会議が開かれた時、劉志丹はすでに死去している。

当事者の回顧談にはこうした不満が残るものの、彼らの話の資料的価値をすべて否定することはできない。これを通じて、七〇年も前に中共が陝北で開催した哥老会大会の詳しい状況をうか

がうことができるからである。

まず、会議の事前準備についてであるが、会議の主導権を握り、会議を中共の意図にそって進行させるため、多くの共産党員が哥老会メンバーとして大会に参加した。前出の張崇徳はその一人であった。彼の話によれば、⁹⁷⁾

1936年春、私は延安県高橋工作委員会の書記をつとめていた。陝西省組織部王達成部長、白区工作部賈托（拓）夫部長は私を志丹県委員会副書記兼白区工作部部長に移動させた。就任後まもなく陝西省委員会白区工作部から通知がきて、志丹県の関係者が永寧区で開かれる碼（馬）頭山の山堂会議に出席するよう命じた。私は一行の責任者の一人であった。通知を受けた後、（志丹）県委員会はただちに会議を開いて、県内すべての党、政治、軍事機構の幹部のうち、かつて哥老会に加入したことのある同志を一律に会議に参加させ、山堂会議の中核になることを決定した。また、旦八寨子を包圍攻撃した部隊から一つの遊撃隊（兵力は一つの大隊に相当する）を会議の警備に当てることも決定された。県の党、政府、軍隊、民衆団体の幹部約二十人余りに遊撃隊員を加えると、全部で六十人余りいた。統一戦線工作のため、高橋工作委員会にいた時、私は中央工作委員会の許可を得たうえで、元紅二十九軍の軍長、中央第二工作委員会委員、哥老会竜頭大爺の李仲英の紹介で哥老会に入った。（李は）哥老会の海底（暗号）や会員同士が会った時に使う暗号や暗語を伝授してくれた。（中略）会議を成功させるため、党中央と上級機関の指示を受けて、私と幹事李鳳才ら数人は会議が開かれる前の数日間、それを学んだ。

このように、中共はかつて哥老会に入ったことのある人を会議に参加させると同時に、哥老会大会のために警備部隊を配置し、厳重な監視態勢を整えた。そして、緊急事態に対応するために、警備に当たる兵士は共産党の指示で哥老会大会の前に哥老会に入会し、哥老会の暗号やしきたりを習った。

馬頭山会議に関するもう一つの回想資料は、こうした周到な準備が実際に重要な意味があったことを物語っている。馬頭山会議のもう一人の中共側の参加者孫玉貴はもともと赤安県遊撃隊第三支隊に所属する兵士であった。旦八寨子の包圍攻撃中の10月11日、彼は志丹県の馬頭山に行くよう命じられた。馬頭山大会について、彼は後に次のように述べている。⁹⁸⁾

私たちの支隊は五十人余りの部隊で、いくつかの小さなグループに分かれて、各方向で順番に警戒に当たっていた。一四日、各方向から人が大勢やって来た。まず哥老会のしきたりに従って相手と会話を交わさなければならない。場所ごとに哥老会の暗号に詳しいメンバーがいて、相手と話をする。合い言葉が合っている人だけ山に登ることができる。合っていない人は容疑者として逮捕される。おそらく一九日の午後、ある歩哨所の前にやって来た南方からの数人は合い言葉が間違っていた。上司の指示を仰いでから彼ら全員の身柄を拘束した。最終的にどう処理したかは知らない。われわれの歩哨所は（会場から）三里離れたところまで置かれ、きわめて厳しく取調べを行った。われわれは一瞬の油断もなく警戒していた。指導部から派遣された人がしょっちゅう巡視しに来て、状況を調べた。

合い言葉を間違った人を逮捕したのは、国民党やその他の敵対勢力が哥老会大会を機に「蘇区」に浸透するのを防ぐためであった。このように、馬頭山大会は中共部隊の厳しい監視の下で行われたことがうかがわれる。

そして、会議の時の様子について、張崇徳は次のように述べている。中共陝西省白区部工作部長賈拓夫による開幕のあいさつに続いて、中共中央の代表龔逢春⁹⁹⁾があいさつした。その後、陝甘寧省ソビエト主席、哥老会大爺の馬錫五が動員報告を行った。その後、中共の代表や哥老会各山堂の大爺が相次いで発言した。また、「興隆山」を「興華山」に、「忠義堂」を「救国堂」にそれぞれ名前を改めて、「打富濟貧（金持ちをやっつけ、その財産を貧しい人に与えよ）」というスローガンを「驅逐日寇、鏟除漢奸（日寇を驅除し、漢奸を根こそぎせよ）」に改め、中華江湖抗日救国委員会を設立した。最後に、会議が閉幕する前に数名の山主が選ばれたが、馬海旺もそのうちの一人であった。黄色い布に印刷された会章が参加者全員に配られた。会議は七日間開かれ、六百人余りが出席した。¹⁰⁰⁾

なお、劉守義が語ったところによれば、¹⁰¹⁾

1936年陰曆九月はじめ、私は組織の指示で哥老会メンバーとして馬頭山の山堂大会に参加した。私の記憶では、会議の状況は次のようである。会議は一九三六年陰曆九月はじめに開会し、七、八日間続いた。会議を主宰したのは陝西省で、中央からは数人の代表が派遣された（私はそのうちの二人を知っていた。一人は龔逢春、もう一人は馬錫武〈馬錫五〉）。陝西、甘肅二省および各地から来た哥老会メンバー六百人余りが会議に出席した。そのうち保安県から来た人が最も多かった。（中略）会議中、山主が選ばれ、興隆山が興華山、忠義堂が救国堂にそれぞれ改められた。そして、救国堂の会員章程が制定され、印刷された章程が出席者たちに配られた。会議中、中華江湖抗日救国会が設立され、会議後にやるべきこととしていくつか挙げられた。一つは土匪を改編することによって抗日救国の力を大きくすること、もう一つは「打富濟貧」、「俠義肝丹（義侠心をもって肝胆相照らせ）」、であった。

もう一人の当事者李立森は次のように述べている。¹⁰²⁾

1936年10月はじめ、私は靖辺県政府白区部から通知を受け、陝西省白区部が志丹県永寧の馬頭山で開かれる哥老会の会議に参加するよう命じられた。通知を受け取った後、私は10月10日（陰曆）ころに出発した。一緒に会議に出席した人のうち、私たち数人の幹部を除けば、五十人余りはみな哥老会のメンバーであった。私たちは10月13日午前馬頭山に到着すると、会議の招待員が予め決められた場所に案内してくれ、食事と宿も手配してくれた。（中略）私は大会が始まった後やっと今回の会議は尋常ではないことが分かった。軍人、農民、労働者、地方の幹部約七、八人が会議に参加した。そのうち東北軍の哥老会メンバーや高双成、高桂茲、井岳秀らの部隊の哥老会メンバーがいた。私は以前石子俊の旅団で仕事をしたことがあったため、一部の軍人とは面識があり、しかも仲がかなり良かった。講壇に坐っていた馬錫武、馬海旺はもともと哥老会の大爺で、比較的信望があった。彼らはみな今回の会議で重要な講演をした。

以上の回顧談の内容はほぼ一致している。これらを通じて明らかになったように、事前に周到な準備が行われたため、馬頭山大会は終始中共の意図に沿って展開されていた。いわば馬頭山大会は中共が哥老会をコントロールする手段の一つとなっていたのである。

中共側の公式の見解によれば、馬頭山の哥老会山堂会議は8月15日から七日間にわたって開かれた。大会では以下の十カ条が決められたが、その内容は河連湾大会の決議と基本的に同じものである。¹⁰³⁾

- (1) 日本帝国主義を打倒し、我が中華人民を救う。
- (2) 漢奸の財産を没収し、これを抗日の基金にする。
- (3) □□を取り除き、国のため、民のための政治を行う。
- (4) 金持ちには血も涙もない。土豪劣紳は我が漢流の敵である。
- (5) 四方の好漢を招待し、金持ちを叩き貧しい人を救済する。
- (6) 義侠心に基づいて困っている人に金を分けて、漢流は心をつににする。
- (7) 救国救民のために紅軍の抗日を援助する。
- (8) 一律に苛捐雑税と壮丁割り当てに反抗し、これに従わない。
- (9) 各地に分散した漢流武装団は自ら抗日のための武器を集める。
- (10) 我が漢流兄弟は本会の規定を守るべし。

また、大会では「中華江湖抗日救国会」の簡単な規則と軍隊武装に関する簡単な規則が承認され、さらに「日本侵略者を驅逐し、漢奸を取り除く」、「中華の英雄が一同に集まり、一気団結して中国を救う。民主共和をもって解放を求め、連合戦線を結成して独立を勝ち取る」という綱領を打ち出した。そして、対内的なスローガンとしては「江湖義侠心」、対外的なスローガンとしては「革命精神」が定められた。会議では正式に「中華江湖抗日救国会」と「抗日救国軍」の設立を決めた。

以上のように、馬頭山大会は哥老会の山堂大会の形をとったものの、内容からみれば、従来の哥老会組織とまったく異なるものであった。この意味で、馬頭山の哥老会大会は「哥老会を改造する」という郭洪濤の期待に沿うものであった。

馬頭山大会が残した唯一の成果は、中共が哥老会を利用して「白区」で活動するという従来の方針を確認した、ということである。これはその一週間後に開かれた中共中央政治局会議に表されている。10月23日、周恩来は中共中央政治局会議の際に、哥老会を利用することは「白区」の民衆を引きつける補助的方法の一種に過ぎないと述べた。¹⁰⁴⁾

このように、「空前の盛況」とされる河連湾の哥老会大会に続いて、六百人余りが参加した馬頭山の哥老会が静かに幕を閉じた。毛沢東の「宣言」の発布からまる三ヶ月が経っていた。

馬頭山会議閉会後の状況は、前出の劉守義によれば次のようなものであった。

馬頭山大会の後、中華江湖抗日救国会はただちに抗日救国義勇軍を派遣した。私たち十数人は隊長李春発に率いられて、土匪收容・改編のために甘肅省の合水県に行った。李春発は合水県に到着した後まず県長商玉山と連絡を取り、合水県で中華江湖抗日救国会外交部を設立した。部長は郭鴻（郭大爺）であった。抗日義勇軍は外交部の指導の下で積極的に工作を展開し、11月に土匪三十人を收容・改編し、その後徐志礼儀ら十二名の土匪を收容・改編した。李春発が率いた抗日義勇軍は合水県に来てから二年余りの間、合わせて百人余りの土匪を收容・改編し、二つの抗日義勇隊を結成した。¹⁰⁵⁾

なお、李立森は次のように述べている。¹⁰⁶⁾

会議が終わった後、会議に出席した中心メンバーは「四保」（四つのグループ）に分かれ、それぞれ個別で行動するよう呼びかけた。当時、「東保」の責任者は井岳秀部隊のある哥老会大爺、「南保」の責任者は東北軍のある哥老会大爺、「西保」の責任者は曹という人で、みなは彼のことを曹大爺と呼んでいた。「北保」の責任者は白大爺と私であった。帰った後私は

県の白区部に会議の内容を報告した。当時私は革命幹部だった。具体的なことに携わるため、組織で討論した結果、賀大爺が宣伝、動員を、私が統計をそれぞれ担当することになった。統計によれば、県内で哥老会に属するのは三百人余りであった。（われわれは）すぐに彼らを組織し訓練した。1937年秋、私は志丹県保衛局に配属された。県内に七百人余りの哥老会メンバーがいた。まもなく哥老会メンバーのうち問題を起こした人がいて、上級機関は哥老会組織を解散し、その活動を一律に停止するよう通知した。

馬頭山会議に関するこれらの回想はいずれもその後の中共の哥老会工作に言及しているが、その具体的な状況については資料の制約によりなお不明である。関連資料からみれば、馬頭山会議以降、中共は計画的に「蘇区」の哥老会に対する統合を強めると同時に、周恩来の指示に基づいて哥老会の利用工作を「白区」内に限定するようにした。こうした哥老会政策の方向転換は、この時期の国民党側の資料からもその一端をうかがうことができる。¹⁰⁷⁾

六、結びにかえて——根拠地における哥老会の統合

以上、本論文では、哥老会大会に焦点を当てて、中共の陝北革命と地域社会の関係について考察した。そこから以下のいくつかの結論が得られる。

第一に、陝甘地域社会と陝甘地域の早期革命との関係について。陝北革命の創始者謝子長、劉志丹は相次ぐクーデターの失敗を経て、陝甘地域で大きな影響をもつ哥老会および哥老会のネットワークを通じて革命を行う道を選んだ。しかし、これをめぐって、中共陝西省委員会内部において終始意見の対立があった。哥老会を利用することと哥老会に参加することとの間の境界線は必ずしも明確ではなく、謝子長、劉志丹らの活動はしばしば「土匪主義」と批判されていた。1935年9月、陝西共産党内部のイデオロギー闘争が激しさを増し、劉志丹は囚われの身となった。毛沢東が率いる中央紅軍がちょうどこの時期に陝北に到着しなかったら、劉志丹はかつて井岡山根拠地の袁文才と王佐を襲ったような悲劇の犠牲者になっていたかもしれない。

第二に、統一戦線と共産党支配の対立の問題について。陝甘革命は、毛沢東の中央紅軍が「長征」を終えて陝北高原に到着したことで第二幕を開けた。中共にとって陝甘地域に根を下ろし確固たる根拠地を建設することにより、より大きな政治舞台へと駒を進めることが課題となった。中共は抗日民族統一戦線の構想を打ち出して、国民党との政権争いのなかで有利な立場に立った。毛沢東の「対哥老会宣言」をきっかけに、陝甘地域の哥老会は「党派」として中共の抗日民族統一戦線に組み込まれた。

ところが、抗日ナショナリズムが哥老会動員の理論的根拠となったものの、陝北ソビエト政権は根拠地で対哥老会工作を行う際、共産党の絶対的な指導を堅持する中共陝西省委員会の反対に遭い、河連湾哥老会大会後には反対意見が優勢を占めるようになった。陝西省委員会宛の周恩来の手紙をきっかけに、中共の哥老会政策は一転した。統一戦線の角度から共産党と哥老会の共通点を強調する毛沢東の「対哥老会宣言」とは対照的に、周恩来の手紙は共産主義イデオロギーに基づいて共産党と哥老会の相違を強調した。この同一か相違か、という対立には、中共の統一戦線思想と党のイデオロギーとの緊張関係が反映されているように思われる。

第三に、「蘇区」と「白区」の哥老会工作について。河連湾哥老会大会後、中共は再び「哥老会は友かそれとも敵か」という問題に直面した。中共陝西省委員会は「蘇区」という政治空間における哥老会の存在意義を否定した。しかし、中共は「白区」という別の政治空間における哥老会の存在意義を全面的に肯定し、哥老会のネットワークを通じて国民党と戦うことに関する具体的な政策をも打ち出した。馬頭山大会がひっそりと幕を下ろした後、中共の哥老会政策はかつて鄧穎超が提起した「白区」における哥老会工作に戻った。その一方で、「蘇区」では、哥老会組織が消滅させられ、共産党の内部から哥老会の影響が取り除かれるようになっていった。

1936年末、西安事変の解決をきっかけに、国民党と共産党は抗日統一戦線の形成に合意した。翌年7月の蘆溝橋事件後、国共の合作はより現実的なものとなった。中共を取り巻く政治状況が変化する中で、中共は根拠地内の土匪武装を肅清し、支配下の各級組織を固めることに力を注いだ。哥老会を根拠地から締め出すのもその一環であった。1937年4月、中共統一戦線工作の責任者李維漢は次のように指摘している。「このような組織（哥老会を指す）は封建制度下の遺物である。組織の形は反民主的であり、内容は反動的なものばかりである。そのため、われわれはこの種の組織を擁護してはならない」。¹⁰⁸⁾これは根拠地における哥老会組織の存在そのものを根底から否定することを意味した。¹⁰⁹⁾

1937年7月15日、中共陝甘寧辺区党委員会は「哥老会工作に関する指示」を下し、「辺区」と「友区」（抗日統一戦線成立後、従来の「白区」は「友区」と改称された）¹¹⁰⁾内の哥老会に対して異なる政策を実施する方針を打ち出し、五つの側面から「特区」と「友区」で実施すべき哥老会政策について指示した。その要点は以下の二つである。¹¹¹⁾まず、哥老会の性質について。哥老会は歴史上の「秘密結社」の一種で、その下層分子は哥老会組織を通じて支配階級に反対する階級闘争を行っているため、哥老会は「革命的な役割」を有する。一方、哥老会組織のなかには土匪、ちんぴらが含まれるため、その思想と組織は保守的、迷信的、封建的、反動的色彩を帯びており、それゆえしばしば反革命の野心家に利用される「反革命の道具」でもある、とされた。次に、哥老会工作の策略について。「友区」の哥老会に対しては、誘導と離間を併用する策略を取り、最終的には哥老会を抗日民族統一戦線内の大衆団体に改造する。それに対して、「特区」の哥老会に対しては、誘導、離間などの策略を併用し、哥老会の組織を消滅させる。「指示」の最後の部分は、哥老会に追従して共産党の立場を捨てるという右の傾向に反対する一方で、哥老会の反動的な部分のみに注目してその革命的部分を無視するという左の傾向にも反対することを強調している。このような哥老会政策における二元的な立場は、中共が党内、党外の哥老会、「特区」と「友区」の哥老会、そして哥老会とその他の結社を区別し、多方面における対哥老会工作を展開する道を開いた。

ところで、哥老会とそのネットワークが早期の陝甘地域の革命において一定の役割を果たしたものの、陝甘寧根拠地の政治統合を行おうとする中共にとって、哥老会組織は好ましくない存在であった。1939年10月5日の統計によれば、「辺区」の共産党員三六一三一名、すでに除名された一二五七名の党員のうち哥老会分子が一五二名を占めている。¹¹²⁾また、同年10月27日の統計では、各種の党派に参加したことのある中共党員は一二九一名で、そのうち八二〇名が哥老会出身であった。¹¹³⁾中共は根拠地における哥老会の活動を警戒したものの、「哥老会全体がわれわれと対立することを避けるために」、¹¹⁴⁾明確な反哥老会のスローガンは掲げなかった。¹¹⁵⁾このことは、中共が陝

甘寧根拠地で行った仏教会、一心会などの宗教結社の取締と対照的であった。¹¹⁶⁾

このように、中共の異なる政治空間のなかで、哥老会は異なる役割を賦与された。すなわち、共産党政権から離れるほど、哥老会は統一戦線内部の「自者」になり¹¹⁷⁾、逆に、共産党政権に近いほど、イデオロギー統合の「他者」になったのである。

注

- 1) 「盛況空前的哥老会大会」,『紅色中華』,第301号,1936年9月18日。
- 2) Stuart R. Schram, “Mao Tse-tung and Secret Societies”, China Quarterly, No. 27, July-September, 1966, pp. 1-13. 菊池一隆「劉志丹与陝北革命」,『中国近現代史の諸問題——田中正美先生退官記念論集』,国書刊行会,1984年,342~343頁。
- 3) 周育民,邵雍『中国幫会史』,上海人民出版社,1993年,620~627頁。邵雍『中国秘密社会』第六卷・民国幫会,福建人民出版社,2002年,216~225頁。
- 4) 拙稿「近代中国の革命と秘密結社,1895—1955」,東京大学博士論文,1999年6月。
- 5) 朴尚洙「20世紀三,四十年代中共在陝甘寧辺区與哥老会關係論析」,『近代史研究』2005年第6期。
- 6) 劉志丹,謝子長の革命生涯については,主に以下の叙述に依拠している。(1)李振民,張守憲「劉志丹」,(2)李振民,張守憲,梁星亮「謝子長」(中共党史人物研究会編『中共党史人物伝』第3巻,陝西人民出版社,1981年)。
- 7) 杜斌丞は共産党史の叙述のなかで「愛国主義者」として称えられたが,当時は反共産党的な立場を取っていた(「陝西省委關於陝北軍事行動與決議案」(1928年1月),中央档案館,陝西档案館編『陝西革命歴史文件匯集』(1925—1936)乙一,1992年,93頁)。
- 8) 選挙の光景について,以下の文章を参照。張培礼「劉志丹競選民团团総」,陝西省文史研究館編『三秦軼事』,上海書店,1994年,8~9頁。
- 9) 前掲李振民,張守憲「劉志丹」,202頁。
- 10) 行政院農村復興委員會編『陝西省農村調查』(1933年),近代中国資料叢刊3編第80輯,文海出版社,143頁。
- 11) 同上,143~144頁,152~153頁。
- 12) 同上,156頁。
- 13) 中哲「陝西土匪何自来」,『共進』第65期,1924年7月10日。中国共産党陝西省委員会党史資料徵集研究委員會編『共進社和「共進」雜誌』,陝西人民出版社,1985年,242~244頁。
- 14) 魏野疇「陝西之政治經濟狀況」,『西安評論』第8期,1925年9月1日。陝西省革命烈士事跡編纂委員會編『魏野疇伝略・回憶・遺文』,陝西人民出版社,1981年,202頁。菊池一隆「陝西省の民衆運動とその背景——土匪反乱の史的意義」(青年中国研究者会議編『統中国民衆反乱の世界』,汲古書院,1983年,375~389頁)を参照。
- 15) 前掲「陝西省委關於陝北軍事行動與決議案」(1928年1月),前掲『陝西革命歴史文件匯集』(1925—1936),乙一,91頁。
- 16) 「団陝西省委对党策略討論の經過與決議」(1928年1月8日),前掲『陝西革命歴史文件匯集』(1925—1936),乙一,86頁。
- 17) 黄宗智『華北的小農經濟與社会変遷』,中華書局,1986年,3~4頁。
- 18) 前掲李振民,張守憲「劉志丹」,前掲『中共党史人物伝』第3巻,二〇〇頁。
- 19) 1931年秋,高桂滋部隊の蒲子英らはクーデターを起こし,兵士を率いて陝西と甘肅の隣接地域で劉志丹のゲリラ部隊と合流した。「陝甘寧辺区実況」,著者・作成年不明,東洋文庫所蔵筆写史料。
- 20) 中国第二歴史档案館所蔵「甘肅省最近匪患実況及剿弁情形調査表」,民国21年8月。
- 21) 同上,「甘肅省最近匪患実況及剿弁情形調査表」,民国21年9月。
- 22) 「陝甘工作に関する文献」,波多野乾一『中国共産党史』第5巻,時事通信社,1961年,672頁。

- 23) 陳言『陝北調査記』,北方雜誌社,1936年,80頁。
- 24) Mark Selden, China in Revolution: The Yen-an Way Revisited, Armonk-New York-London: M. E. Sharpe, Inc, 1995, p. 33.
- 25) 周錫瑞「從農村調查看陝北早期革命史」,南開大学歴史系中国近現代史教研室編『中外學者論抗日根拠地』,档案出版社,1993年。
- 26) 馬文瑞「群衆領袖,革命楷模——緬懷劉志丹同志」,『馬文瑞文選』第1巻,陝西人民出版社,1998年,541~542頁。蓋軍,李東朗「劉志丹对西北革命根拠地党的建設的貢獻」,劉志丹紀念文集編委會編『劉志丹紀念文集』,軍事科学出版社,2003年,500~502頁。
- 27) 防衛庁戦史資料室所蔵「西北哥老会ニ就テ」,包頭陸軍特務機關員西村透,満洲・満蒙八九,作成年代不明,文中「昭和十四年十二月二十日」の事件を取上げていることから1940年以降のものと推測できる。
- 28) 鄧穎超「争取哥老会的重要及方法」(1936年),中共中央档案館所蔵。
- 29) 同上。
- 30) 同上。
- 31) 同上。
- 32) 張光「劉志丹改造哥老会」,前掲陝西省文史研究館編『三秦軼事』,1~2頁。
- 33) 同上,2頁。『志丹県志』編纂委員會編『志丹県志』,陝西人民出版社,1996年,760頁。
- 34) 馬雲沢「創建陝甘寧地区革命武装的一些情况」,『陝西文史資料』第14輯,陝西人民出版社,1984年,12頁。
- 35) 前掲「争取哥老会的重要及方法」。
- 36) 李立森「回憶我参加馬頭山哥老会大会的情况」,1986年。志丹県党史辦公室所蔵。この資料は朴尚洙教授が筆者に提供したものである。ここに記して感謝の意を表したい。
- 37) 『陝北共産党發展の概況』,著者不明,1935年,9頁,東洋文庫所蔵筆写史料。
- 38) 同上。
- 39) 同上,10頁。
- 40) 同上,11~12頁。
- 41) この歴史は中共側の正式な記述の中には見られない。中共榆林地委党史研究室,中共陝西省委党史研究室「陝北革命根拠地の創建」,『中共中央北方局』資料叢書編審委員會編『中共中央北方局』(土地革命戦争時期巻),下冊,中共党史出版社,2000年,1146頁。
- 42) 郭洪濤は陝西北部の米脂県に生まれ,劉志丹と同じ榆林中学で学んだ。彼と劉の衝突について,晩年,自己弁明を含め以下のものを記した。郭洪濤「陝北烽火」,『革命資料』五,文史資料出版社,1981年。「第二次国内革命戦争時期陝北革命斗争史実回憶」,『陝西文史資料』第12輯,陝西人民出版社,1982年。
- 43) この事件の経緯については,前掲李振民,張守憲「劉志丹」を参照。但し,当事者認識の食い違いに関して,以下のものを参照。聶洪鈞「劉志丹同志冤案的產生」,『革命資料』1,文史資料出版社,1980年。聶洪鈞「1942年11月在高幹会上關於陝北肃反問題的發言摘録」,『聶洪鈞回憶與文稿』,中共党史出版社,2005年,41~47頁。程子華「我对聶洪鈞同志文章有些歴史不符的説明」,『革命資料』Ⅲ,1981年。また,以下のものも参照。「陝甘寧辺区実況」,著者不明,作成年代不明,東洋文庫所蔵筆写史料。『王首道回憶録』,解放軍出版社,1987年,166~171頁。
- 44) ソビエト革命路線の挫折と「抗日民族革命」との関係について,田中仁『一九三〇年代中国政治史研究——中国共産党の危機と再生』(勁草書房,2002年)を参照。
- 45) 「為創立全国各党各派的抗日人民陣線宣言」(1936年4月25日),中共中央档案館編『中共中央文件集』(一),中共中央党校出版社,1991年,17頁。
- 46) 「對於民族革命運動之議決案」,同上,330頁。
- 47) 同上,333頁。

- 48) 邵式平「革命的一封信」, 1933年10月21日。アメリカのスタンフォード大学 Hoover Library の石叟資料室所蔵。
- 49) 「為抗日救国告全体同胞書」(1935年8月1日), 前掲『中共中央文件集』(十), 518~525頁。
- 50) Lyman Slyke, *Enemies and Friends: The United Front in Chinese Communist History*, Stanford University Press, 1967, pp. 55-59.
- 51) 「瓦窑堡決議」(1935年12月25日), 前掲『中共中央文件集』(十), 598~623頁。
- 52) 前掲「争取哥老会的重要及方法」。
- 53) 同上。
- 54) 同上。
- 55) 同上。
- 56) 前掲『志丹県志』, 56~57頁。
- 57) 「中華蘇維埃中央政府对哥老会宣言」(1935年7月15日), 中共中央書記処編『六大以来——党内秘密文件』上, 人民出版社, 1981年, 766~767頁。
- 58) 前掲「对哥老会宣言」。
- 59) 「中央關於争取哥老会的指示」(1936年7月16日), 前掲『六大以来』上, 768~770頁。
- 60) 同上, 53~54頁。
- 61) 同上, 56頁。
- 62) 『紅色中華』, 第297号, 1936年8月29日。人民出版社影印本, 1982年。
- 63) 「華池哥老会開会討論抗日救国会工作」, 『紅色中華』, 第302号, 1936年9月23日。
- 64) 中共中央档案館蔵「關於争取閣老会的經過」(1936年)。内容から8月26日の「馬頭山哥老会大会」後作成したものと推測できる。
- 65) 「辺白区群衆擁護蘇維埃」, 『紅色中華』, 第301号, 1936年9月18日。
- 66) 前掲「關於争取閣老会的經過」。
- 67) 根拠地の中共にとって武器以上に重要なものはない。武器をもって遁走することはこの時期の紅軍においては珍しいことではなかった。そのうち有名なのは許世友ら30人の遁走事件であった。許は戦功を重ねていたため、無期懲役に処せられた。『新中華』(1937年1月27日に『紅色中華』は『新中華』に改名)第365号, 1937年6月9日。第385号, 1937年8月19日。
- 68) 「中華江湖抗日救国委員会通函」, 『紅色中華』, 第301号, 1936年9月18日。
- 69) 同上。
- 70) 前掲「盛況空前的哥老会大会」。
- 71) 馬明方の経歴について, 陝西省中共党史人物研究会編『陝西近現代名人録』(西北大学出版社, 1988年, 5~8頁)を参照。
- 72) 前掲「盛況空前的哥老会大会」。
- 73) 中共中央档案館蔵「恩来对哥老会工作指示信」(1936年10月6日)。この手紙の一部は『周恩来統一戦線文選』に収録されている(人民出版社, 1984年, 24~30頁)。
- 74) 李赤然「紅二十七軍戦闘歷程的片断回憶」, 『陝西文史資料』第6輯, 陝西人民出版社, 1979年。
- 75) 李赤然「紅二十七軍八十一師在東征, 西征中」, 『陝西文史資料』第10輯, 陝西人民出版社, 1981年, 45頁。
- 76) 哥老会大会後, かつて, 「81師」の243団の団長を務めた李仲英は安塞工作委員会に対して哥老会の関係を利用して地方武装民団を見方するように指示した。陝西省档案館所蔵「利用閣老会関係發動民団家属写信争取民団」(1936年9月)。
- 77) 劉宝璋「陝甘寧区二十九軍紀事」, 『陝西文史資料』第14輯, 陝西人民出版社, 1984年, 17~35頁。
- 78) 前掲「恩来对哥老会工作指示信」。
- 79) 同上。
- 80) 同上。

- 81) 劉志丹「三辺事变的經驗與教訓」, 『闘争』第82期, 前掲李振民, 張守憲「劉志丹」, 221頁。
- 82) このような人事配置は, 外來の幹部をもって地元出身の幹部を牽制する効果があった。郭華倫編著『中共史論』第3冊, 中華民国国際関係研究所, 1969年, 120~121頁。
- 83) 裴周玉「刘志丹同志犧牲紀実」(『革命資料』8, 1982年)を参照。
- 84) 劉志丹が死去する前に, 地元の共産党軍隊の一部は「外來」の毛沢東の軍隊に対する不満を抱き, 「叛乱」を起こした(これについては前掲「陝甘寧辺区実況」を参照)。
- 85) 中共中央档案館所蔵「怎樣改造哥老会適合於我們爭取的目的」(郭洪濤), 1936年10月2日。
- 86) 前掲「恩来对哥老会工作指示信」。
- 87) 同上。
- 88) 同上。
- 89) 同上。
- 90) 同上。
- 91) 「哥老会是什麼」, 『紅色中華』第304号, 1936年10月5日。
- 92) 「哥老会是什麼」, 『紅色中華』第305号, 1936年10月10日。
- 93) 『紅色中華』第315号, 1936年12月13日。
- 94) 前掲「關於争取閣(哥)老会的經過」。
- 95) 張崇徳「参加碼頭山山堂大会情况的回憶」, 1987年。志丹県党史辦公室所蔵, 史炳忠整理, 以下同様。
- 96) 劉守義「参加碼頭山哥老会大会的情况回憶」, 1986年, 志丹県党史辦公室所蔵。
- 97) 前掲「参加碼頭山山堂大会情况的回憶」。
- 98) 孫玉貴「回憶我保護馬頭山会議的情况」, 1986年, 志丹県党史辦公室所蔵。
- 99) 当時龔逢春は中共志丹県書記であった。陝西省中共党史人物研究会編『陝西近現代名人録』(続集), 西北大学出版社, 1991年, 298頁。
- 100) 前掲「参加碼頭山山堂大会情况的回憶」。
- 101) 前掲「参加碼頭山哥老会大会的情况回憶」。
- 102) 前掲「回憶我参加馬頭山哥老会大会的情况」。
- 103) 前掲『志丹県志』, 761頁。
- 104) 『周恩来年譜』, 中央文献出版社, 人民出版社, 1989年, 327頁。
- 105) 前掲「回憶我参加馬頭山哥老会大会的情况」。
- 106) 前掲「参加碼頭山哥老会大会的情况回憶」。
- 107) 以下の資料を参照。中央調查統計局編「半年来陝甘寧及川康辺境赤匪之竄擾概況」, 1937年。中央調查統計局編「各辺区赤匪流竄之概況」, 1937年。
- 108) 1937年日中全面戦争勃発の際に, 陝甘寧根拠地内の大きな土匪勢力はほとんど根拠地から追い出され, 1939年末までにはほぼ肅清された。「毛沢東, 朱徳電」(1937年7月7日), 西北五省区編纂領導小組・中央档案館編『陝甘寧辺区抗日民主根拠地』文献卷(上), 中共党史資料出版社, 1990年, 269頁。肖勁光「關於剿匪問題」(1939年11月18日), 同上, 274~275頁。
- 109) 「特区統一戦線工作中的幾個問題」(1937年4月25日), 『李維漢選集』, 人民出版社, 1987年, 79頁。
- 110) 「陝甘寧特区党委關於注意使用統戰名詞的通知」(1937年12月6日), 中央档案館・陝西省档案館編『中共陝甘寧辺区党委文件匯集』(1937—1939年), 甲一, 出版元不明, 1994年, 95頁。
- 111) 「關於哥老会工作的指示草稿」(1937年7月15日), 前掲『陝甘寧辺区抗日民主根拠地』文献卷(上), 155~158頁。前掲『中共陝甘寧辺区党委文件匯集』(1937—1939年), 甲一, 9~13頁。
- 112) 「党员数目統計表」(1939年10月5日), 前掲『中共陝甘寧辺区党委文件匯集』, 甲一, 328頁。
- 113) 「党内参加过其他派別团体教会党员調查表」(1939年10月27日), 同上, 333頁。
- 114) 哥老会に対する中共の警戒については, 前掲『中共陝甘寧辺区党委文件匯集』(甲一, 336頁, 364頁, 417~418頁, 447頁)を参照。

- 115) 「陝甘寧辺区党委關於回民工作給隴東分委的指示」(1938年), 同上, 194頁。
- 116) 陝甘寧辺区政府主席林伯渠は仏教会, 一心会を「名義上は宗教団体であるが, 実際には漢奸集団である」とし, これらの団体を禁止する法令を發布した。「禁止仏教会, 一心会活動」(1938年7月15日), 陝西省档案馆・陝西省社会科学院編『陝甘寧辺区政府文献選編』第1輯, 档案出版社, 1986年, 82~83頁。陝西省淳耀県では, 一心会のメンバー張積善は「三期普渡」と称し, 香堂を開いて, 「日本人が来ても, 菜食の者は殺さないから, 本堂に入れば何も恐れがない」と人々に呼びかけた。また, 山西省と隣接する延川県では, 哥老会のメンバーたちは「前清(清朝)は倒れたが, 後清はまた来る。日本は宣統皇帝の即位を擁護する立場を取っている」と言い, また, 日本人は弁髪の人を殺さないのて人々に弁髪を蓄えるよう説得した。房成祥・黄兆安主編『陝甘寧辺区革命史』, 陝西師範大学出版社, 1991年, 136頁。
- 117) 陝甘寧辺区以外の地域においては, 中共のそれまでの哥老会方針は依然として実施されていた。この点については, 1943年夏に国民党支配下の甘肅省に生じた哥老会暴動事件に関する興亜院の調査から窺える。(*「甘肅に於ける哥老会中心の叛乱」*, 大東亜省編『情報』第8号, 1943年9月15日。*「西北地区哥老会暴動情况」*, 同誌第11号, 1943年11月1日)。

评价。他说：“他活泼，勇敢，很打了几次大仗。譬如罢，答王敬轩的双簧信，‘她’和‘牠’字的创造，就都是的。这两件，现在看起来，自然是琐屑得很，但那是十多年前，单是提倡新式标点，就令有一大群人‘若丧考妣’，恨不得‘食肉寝皮’的时候，所以的确是‘大仗’。”^①鲁迅先生这种理性的称赞，对于今人更好地了解和把握刘半农创造使用“她”字的思想文化史意义，显然很有裨益，不过他同时把另一个“牠”字的发明权也归为刘半农，却未必准确。

总之，“她”字在中国的出现及其所产生的影响，并不仅仅局限在纯粹的语言范围之内，更不只是一个单纯词汇的问题。它同时也涉及到微妙的中西文化互动关系，触及到深刻的现代性实质，从而成为近代中国文化交流史、社会性别史、文学史和思想史等的研究领域中都不可回避的历史课题（比如，“她”字的中国现代文学史内涵，就还很值得人们继续加以发掘）。由此可见，陈寅恪先生所谓“凡解释一字，即是作一部文化史”（《致沈廉士》），确属不易之言。本文的方法论追求，也正在于此。虽不能至，心实向往之。

① 鲁迅《忆刘半农君》，收入《且介亭杂文》一书中。

没有暴动的事件

——关于抗日战争时期先天道事件的表述问题

孙江

事件与表述

四十年前，英国历史学家爱德华·卡尔有道：历史是历史学家和事实之间不断相互作用的过程，是现在与过去之间永无止尽的对话。时过四十年，在历经“语言学转变”（linguistic turn）的震荡后，人们注意到，所谓“事实”是文本“事实”，而以语言建构的文本“事实”总是同一定的认识与权力相互纠缠的，因此，以辨别真伪为旨归的历史学家（=叙述者）需要小心避免朴素实证主义的天真，警觉摆在叙述者案头的史料——无论是第一手的表述（representation），还是第二手的再表述（re-representation）都存在因表述/再表述自身的缺陷而带来的暧昧和偏颇。本文拟以具体个案——抗日战争时期发生的先天道事件，探讨历史表述与再表述中“证据”与“可能性”的问题。

研究民间宗教结社的学人都知道，中国历史上存在若干以先天道命名的宗教结社，本文所说的先天道与这些宗教结社一无关系，是日本发动侵华战争期间出现的以宗教为招摇的政治性结社^①。1939年3月，以江洪涛为会长的先天道在北京挂牌亮相后，模仿红枪会等民间结社，“每五十人为堂主，五百人为坛主，五千人为盘主，五万人为麦场主，五十万（人）为秋场主，以上各堂、坛、盘、秋场主，俗称为当家师傅”^②。将各级组织的职能一分为二，设立“文会”和“武会”；“文会焚香念佛，宣传道义，以纠正人心、驱逐共产邪说、祈祷世界平和为宗旨。武会练习武

① 《北京天津思想团体调查》（中），《调查月报》第2卷第5号，339—348页。

② 中国第二历史档案馆藏华北政务委员会总署档（以下简称“总署档”），《先天道会山东省泰安分会调查》，1942年。

术、办理联庄会、打倒共产党、卫护人民治安为宗旨。”^①先天道先后通过个人和组织关系,将散处华北、华中农村的红枪会、大刀会、黄沙会、天门会、黄旗会、白枪会、小刀会等纳入名下,使之成为先天道的分会。后者作为乡村民众的自在结社,乃是基于“防匪御兵”之目的、以特有的乡土宗教信仰为精神支柱而结成的,在日本侵华战争全面爆发后,这些民间武装结社受到日军和八路军的关注。本文所讨论的先天道本为华北和华中不计其数的民间枪会/刀会之一分子,在被先天道收编后,两地的红枪会/大刀会成为日伪统治秩序下的“合法”结社。

关涉先天道的事件有两起。

一起是1943年发生在河北永清县的事件,被日军称为“红枪会叛乱”。关于该事件,日本学者三谷孝在论文中称:“1943年3月河北省永清县红枪会[叛乱]一例,便可说明本应是由于有日本军的努力已被[善导]利用的红枪会,实际上和中国共产党方面一直保持了联络。1938年在永清县从事红枪会工作的中共党员的回想,提供了了解这一[叛乱]实情的材料。”^②三谷是日本研究红枪会问题的学者,他关于红枪会的研究不但在日本,在中国和欧美也被广泛征引,按照他的说法,红枪会对日伪统治明从暗背,“叛乱”的幕后指使是共产党八路军。

另一起事件发生在1945年抗战结束前夜的江苏无锡安镇地区,被远在延安的《解放日报》称为抗敌“大暴动”。在有关该事件的叙述里,事件的主体或曰“刀会”,或曰“先天道”,名异而实同。巧的是,无锡先天道和永清先天道均挂名在汪洪涛先天道总会下。在革命史叙述里,该事件后来被描绘成共产党新四军影响下的民众暴动,近年有关会道门的研究强化了这一表述^③。

于是,我们看到,在不同时空下,涉及日伪傀儡组织先天道的两次事件均被表述为共产党影响下的反日伪统治的政治事件。如果这种叙述是可信的,是否意味着先天道组织上层和下层性质别异、非为一物呢?反之,如果这种表述是不可信的话,那么,何以会出现并被不断再表述呢?应该如何理解这里所涉及的历史

① 中国第二历史档案馆藏华北政务委员会总署档(以下简称“总署档”):《先天道会山东省泰安分会调查》,1942年。

② 三谷孝《抗日战争中的红枪会》,南开大学历史系中国近代史教研室编《中外学者论抗日根据地》,档案出版社,1993年,518页。

③ 参见邵雍《中国会道门》,上海人民出版社,1997年,376—380页。

史书写中事件与表述、表述与再表述之间的关系问题呢?

被表述的事件:永清先天道事件

先看看在河北永清县发生的先天道事件。

在关于永清县先天道事件的表述中,有一则系当时驻扎在永清的日军步兵第二连队留下的记述。此外,据笔者所知,中国第二历史档案馆保存了伪行政机关的调查报告以及先天道方面的申辩。比较当事人关于事件的表述,可见对同一事件,不同立场的看法歧义甚大。

事件发生后,最早详细表述事件的是永清县知事郭长年致津海道尹李少微的电文,其中写道^①:

本月(三月)五日,永清县第一区自卫团奉友军(日军)令,移防后奕镇。因先天道领袖赵宗贤率众禁阻该镇办公人及民夫代为照料,致生冲突,赵宗贤当场殒命。县署闻报,一面制止双方妄动,一面召集该分会副会长张恒之等协议解决。詎料该会阳奉阴违,复于九日第四区该会会员竟聚众数百人围击驻东羊八庄县警备第二中队,经该队官兵射毙该会会员一名,余均逃窜。嗣复调集该会各村会员,分持刀矛,环城三五里,割断电线,设卡严禁行人。咸日四分所警察五名携大小枪四枝征起解县,亩捐三百元赴县,行抵王佃庄,被该村会员扣押。同时,另有县警队兵一名亦被扣押等情。

报告关于县武装的称呼不统一,有自卫团、警备队、警察等,笔者不清楚这些称呼是否所指一致,为行文方便,以下除引文外,统称为“自卫团”。

这段文字告诉人们,事件发生在永清县后奕镇日军和自卫团换防之后,因为先天道阻止第一区自卫团的接防,致使双方发生了冲突,自卫团开枪击毙了先天道领袖赵宗贤。赵系永清先天道会长,赵的意外之死激起了先天道会员的愤怒,第四区东羊八庄先天道包围了驻扎当地的自卫团,冲突中又有一名会员毙命。至此事态扩大,各村先天道会员手持刀矛,割断电线,封锁道路,将解押县亩捐警察多名扣押。

① 总署档:《永清县知事郭长年致电》,1943年3月。

报告强调冲突责任在先天道一方。自卫团隶属县知事管辖,知事的报告有袒护之嫌,姑且不论。对于报告称冲突发生在日伪军“换防”之后,则读者要追问日军驻扎在后奕镇时何以先天道与日军相安无事,而日军和自卫团换防不久冲突就发生了?原因真的如郭长年所说在先天道方面吗?作为当事人的先天道方面是如何讲述事件经过的呢?

事件发生后,先天道总会会长江洪涛非常惊恐,以“变出非常,不明真相”,将分会、支会长及各职员尽皆免职,停止永清县先天道会务,“等候处理”。确实,这起事件可谓“变出非常”。永清先天道是傀儡组织先天道总会的一个分会,怎么会反对伪永清县自卫团呢?江洪涛根据永清先天道分会的报告,拟就的一份致伪华北政务委员会内务总署的信明确表示冲突原因在自卫团,内称:

永清县警备团团长王禄祥于三月五日由县城移防后奕镇,原驻该镇之友军同时撤回城内。该镇先天道支会会长宗贤久居镇内,已(以)往对于驻在各部队颇能联络,向未发生事故。此次王团长移防,适逢交通公司派员受路村民,经日人受路警段后藤和卫、路线长园田光二、警务员中岛寅松、天津警务段长辻新吾诸君事前联络,赵宗贤招集会员数十名参加,观剧听讲之际,王禄祥团长竟将会员所带刀矛解除。赵支会长闻讯,前往请示。王部不分皂白,遽尔开枪射击,事出意外,竟将赵宗贤毙死,并死伤会员数名。复据续面报称,是日王团长在后奕镇枪杀支会会员八名,并将支会副会长杨兰廷家属老幼及刘姓老妇均行活埋。^①

与郭长年的报告一样,江洪涛也指出事件发生在日军和县自卫团换防之后,这是二者唯一共同的地方。接下来,关于事件的起因和经过,江洪涛的表述与郭长年的表述大相径庭。按照先天道的说法,自卫团驻扎后奕镇后,突然要收缴先天道会员的大刀和长矛等非近代武器,在遭到先天道拒绝后,双方发生了冲突。自卫团开枪打死了先天道会长赵宗贤。就此,如果说冲突“事出意外”的话,似乎不无可。可是,同日王禄祥还率队枪杀了其他八名先天道会员,残忍地将支会副会长杨兰廷家属老幼及刘姓老妇均行活埋”。如果自卫团对当事人或先天道没有深仇大恨,很难想象会如此痛下毒手!可以肯定双方的冲突绝非偶发事件。

① 总署信:《先天道总会会长江洪涛致内务总署》。

定另有隐情。永清县上级机关关于事件的调查报告透露了隐情的蛛丝马迹。

伪华北政务委员会接到永清县和先天道双方的报告后,命伪河北省公署予以调查。伪河北省公署派遣民政厅视察王德辉、警务厅绥靖科长宋甲三和津海道尹李少微等共同调查事件。三人报告系依据津海道警务科长姜志诚及特务股主任温首春的调查而撰写的,里面有一些当事人表述中所没有的内容。在这份调查中,录有4月10日“出城讨伐”回城的日军大队长日野原的谈话,据说日野对事件的看法如下:

自上(三)月十八日先天道会与县警备队发生冲突后,于三月二十三日已将该会首领张桓之在城北北仲和村捕获,并捕获该会小头目十七名,现已在部队内管押。嗣经携同该犯屡次分赴各村宣抚,刻下该会各会员大部均已悔悟,并已将伊等持用矛枪等器械先后交出三千余枝,现时大致就算告一段落。不过尚有一小部份在城西南小强庄盘踞,约有六十余名,首领冯金荣。近日冯金荣已亲来部队联络,商讨解散之办法,如此当无其他问题。关于该先天道会日前之蠢动,系受不良分子蛊惑或受匪共之主动所致,实属不无遗憾,姑念出于一般愚民,既能觉悟,亦可不咎既往。^②

从日野的谈话看,在3月5日冲突事件过后,确实有一段较为平静的时期,这印证了郭长年与先天道进行协商之说。但是,短暂的平静过后是更大的冲突,从后文可知,在3月18日先天道会与县自卫团的冲突中,有一名日本人毙命。这惊动了日军。23日,日军大举出城,逮捕了先天道副会长张桓之及其他小头目十七名,迫使这些先天道的头目“屡次分赴各村宣抚”。结果,先天道会员“大部均已悔悟”,先后交出三千余枝矛枪器械。唯一稍费周折的是活动在永清城西南小强庄一带的先天道,首领冯金荣对自卫团仍持敌视态度。这些人何以拒不“悔悟”呢?前述王德辉等三人联合报告在转引日野谈话后,有一段关于冯金荣部与自卫团冲突的文字,内容如下:

红枪会于四月一日又与第一区自卫团(即王部队)官兵发生冲突之原因,系因该团驻李家口村小队队长陈铭奉友军命令率兵士十一名赴各村雇夫挖通断壕,行至西义和村村边,忽发现红枪会员,约有百名,将该队包围,逼

② 总署信:《河北省公署民政厅视察王德辉、警务厅绥靖科长宋甲三、津海道尹李少微的联合调查报告》。

令缴械,后将该小队队长陈铭矛刺颈命,并伤亡士兵三名,其余徒手逃回。并掠去大枪十一枝,手枪一枝。该案发生后,业经友军竹谷队长亲往肇事地点查看,愿负责交涉,刻下虽无明白发表,据由侧面调查,关于此案,业由该会首领冯金荣交涉,将掠去之枪已缴还九枝,其余仍在究办中,观其情形,不致再有其他枝节发生,处理该会,友军并愿负万全责任。查该县先天道会虽然万全解散,该部会员内曾混有一般少数不良份子,与当地土匪方面时有勾结。^①

原来,4月1日第一区王禄祥自卫团的一支小队在李家口村又与先天道发生了冲突,当该小队在各村雇人“挖遮断壕”(系日军为了将占领区和八路军抗日游击区隔离开来修挖的宽4米、深2米的壕沟)时,遭到了一支先天道武装包围。在这次事件中,自卫团终于尝到苦头:枪被下、人受伤无算,小队队长陈铭还被先天道会员活活刺死。直到日军竹谷队长率队介入,冯金荣始答应解散组织,缴还枪支。先天道事件就此告一段落。

综合上述三方意见,按时间序列,事件经过可以整理如下:3月5日先天道(红枪会)与县自卫团冲突;3月18日事件扩大化;3月23日日军逮捕先天道主要成员,事态趋于平静;4月1日争端又起,最后在日军的“交涉”下,终于“不致再有其他枝节发生”。这是关于事件的大致轮廓。

笔者在前文已经说过,从自卫团对先天道会员及其家属老少的残杀可以排除事出于“偶发”的推测。现在,王德辉等报告对冲突激烈程度和持久性的描述证实了这一看法的可靠性。那么,如果先天道事件不是偶发事件,又是怎样的事件呢?无论是郭长年的报告,还是日野谈话和王德辉等三人报告都异口同声地将事件责任归于先天道,而永清先天道的代言人总会会长江洪涛表现得惊恐而茫然“不明真相”。是不是先天道这个傀儡组织的基层出现了什么问题呢?前引日野谈话里有:“该先天道会日前之蠢动,系受不良分子蛊惑或受匪共之主(煽)动所致。”^②王德辉等也认为,“该部会员内曾混有一般少数不良份子,与当地土匪方面时有勾结”^③。

① 总著档:《河北省公署民政厅视察王德辉、警务厅绥靖科长宋甲三、津海道尹李少微的联合调查报告》。
② 同上。
③ 同上。

“不良分子”是指先天道内部存在敌视日伪统治的人,“匪共”是指活动在永定河一带的八路军游击队,而“土匪”则是打家劫舍之辈。三者中,可能性最小的是“土匪”,因为手持大刀长矛的先天道/红枪会要抵御的首先是土匪,怎么会和土匪勾结呢?从永清的地方政治情况看,“不良分子”说和“匪共”说都有很大的可能性,因为傀儡组织先天道即使能收编永清的红枪会,将其改编为先天道,未必能使整个红枪会完全和总会步调一致。但是,江洪涛说永清分会“以往对于驻在各部队颇能联络,向未发生事故”。这说明即使先天道内有“不良分子”,永清先天道和日伪统治不存在不可调和的矛盾。这样,留下来的可能性只有“匪共之煽动”一条了。

前述三谷持有这一的看法。他从从日方资料中看到如下文字:“南部的红枪会表示归顺,而北部的红枪会疑心暗鬼,不愿立即归顺,相反,自行武装并在各地集结,而且很明显在向永定河附近的共产军东进纵队求援。”^④三谷认为“1938年在永清县从事红枪会工作的中共党员的回想,提供了了解这一[叛乱]实情的材料”。日方所说是否属实暂且不谈,上引日文史料只能证明事件发生后的结果,而不能援以解释事件产生的原因。而对于三谷“1938年在永清县从事红枪会工作的中共党员的回想,提供了了解这一[叛乱]实情的材料”的断语,笔者的看法恰恰相反,即中共党员的回想非但没有证明先天道“叛乱”受八路军指使,反而否定了二者之间存在任何联系!

1937年7月,抗日战争爆发后,八路军在永清县改编了不少红枪会进行游击战,当时的八路军干部董振明在《改造红枪会》回忆文中写道,在改编红枪会时,“最大的阻力来自赵总领师和小队长冯金荣一伙人”^⑤。赵总领师系红枪会的武术教师,号称“铁巴掌”,“在群众中有一定影响”。但他“是个瞎咋呼的角色,没有头脑。真正暗中挑唆滋事的是小队长冯金荣几个人。他们拉拢一些落后分子,总是和我们唱对台戏”^⑥。1938年7月,八路军在永清县决定改编红枪会武装,董振明写道:“部队改编时,我们坚持了自愿去留的原则,副大队长彭云武和赵总领师经上级批准,解甲归田。冯金荣在改编时曾想把他的中队拉走,由于有了党的组织,阴

① 防卫厅防卫研究所战史研究室编《北支の治安概観》(2),朝云新闻社,1971年,235页。
② 董振明《改造红枪会》,星火燎原编辑部编《星火燎原》(六),解放军出版社,1987年,76页。
③ 同上,76—77页。

谋未能得逞,后来开小差当了可耻的逃兵。”^①

从前文被自卫团枪杀的赵宗贤“久居后奕镇”看,赵总领师和赵宗贤领师似为一人。而且,在赵被王禄祥自卫团枪杀后,对自卫团抵抗最激烈、时间最持久的不是别人,恰恰是与“赵总领师”相交甚深的冯金荣。人们很难想象八路军“可耻的逃兵”,会在八路军的策动下进行反日伪统治的“叛乱”。事实上,让人吃惊不已的是,与八路军暗通的不是先天道,是冲突的另一方王禄祥的自卫团。

和冯金荣一样,王禄祥的名字也出现在当年八路军干部的回忆文章中。19世纪40年代,在河北省中部进行抗日游击战的旷伏兆在回忆文章中提及王禄祥的自卫团。原来,王出身土匪,大概在1941年以前为日军收编,王部土匪武装摇身一变成为永清县自卫团。王等投靠日军,用旷伏兆的话说,“没有什么政治头脑和政治背景,只图吃喝玩乐,追求高官厚禄,在敌我斗争中,往往脚踏两只船,看风使舵。哪边风硬随哪边,只要能保住金钱、地盘和权势,有奶就是娘”。旷接着说,“他们投敌后也会为害一方。但一旦我们主力部队打回来,他们很易动摇,并愿和我方拉关系,暗中助我,共同对付日军”^②。王禄祥也是如此。如果前文先天道总会会长江洪涛所言属实,王禄祥部将先天道“支会副会长杨兰廷家属老幼及刘姓老妇均行活埋”,可谓匪性丝毫未改。同时,王部大概担心遭到八路军的打击,主动和八路军套近乎,以至旷伏兆特别强调争取王禄祥等伪军工作是“做的最早最有成效的”^③。

“最有成效”一语说明王部和八路军关系非同一般。“最早”是何时?这涉及如何理解事件起因问题,不可不查。详读旷伏兆文章可知,八路军是1942年夏开始在河北省中部设立“敌工组”,开展傀儡军工作的^④,因此,王部与八路军搭上关系大概是在此后不久,从后文可知,也是在此前后(即秋季),一如以往土匪和枪会的对立一样,由土匪部队改编为警备团的王部和由红枪会改编的永清先天道之间产生了深刻的对立。可以推测,这种对立最后发展为次年的冲突可能与共产党八路军不无关系,因为既然对王部工作是八路军“最有成效”的伪军工作之

① 董振明《改造红枪会》,星火燎原编辑部编《星火燎原》(六),解放军出版社,1987年,79—80页。

② 旷伏兆《严冬过后是春天》,前揭《星火燎原》(六),160页。

③ 同上,160页,163页。

④ 同上,159页。

一,而赵宗贤、冯金荣等领导下红枪会隶属于傀儡政治结社先天道,从逻辑上讲这种可能性是存在的。限于资料,对于这种可能性尚无法加以证实。在目前的情况下,笔者宁愿从日常关系的角度来理解二者对立和冲突的由来。日军方面的调查报告称:

昭和十七年(1942)秋以来,属于河北先天道会的永清县红枪会与支那方面的县所属武装团体之间产生齟齬。该会拥有数万县民,在标榜信仰团体的同时,对于我军还算服从。鉴于此,驻军不断加以引导,并且调解其与县政权的关系。昭和十八年一月,二者之间的纷争一度得到解决,但是,进入三月后,再次发生冲突,进而抵抗负有维持治安之责的我永清警备队,以致造成三月十八日国分见习士官以下的死伤。^①

日军方面的记载说明先天道与县自卫团之间的冲突不是偶然的,是长久以来矛盾积聚的结果。在日军驻扎后奕镇期间,一直试图调节先天道与自卫团之间的关系,并且在1943年1月促使二者和解。这样,日军得以和自卫团换防,撤回永清城。但是,3月5日的冲突证明二者之间的芥蒂并没有释解,在互相猜忌和摩擦下终于导致了暴力冲突。

一般而言,致使先天道不满的原因主要来自县政权的各种摊派。从上述郭长年提到的征收“县亩捐”和王德辉等调查报告所言“鹿人挖壕沟”看,这种可能性确实存在。而从日军“对于我军还算服从”的看法可以推知,先天道虽然“服从”日军统治,但保持了自己原有的自卫武装,有一定自主权。因此,先天道对由土匪改编的傀儡军——自卫团心存戒备,当自卫团开始没收其“武器”时,有可能表现出激烈的反应。

至此,我们可以确定在先天道与自卫团冲突事件上,先天道没有受共产党八路军的“煽动”,相反,暗通八路军的是伪军王禄祥的自卫团,冲突事件不是反抗日伪统治的“暴动”。先天道事件被日伪描述为“叛乱”事件,如果不是出于日军的无知,那么就是伪永清县散布的谎言。

① 前揭《北支の治安戦》(2),235页。

被再表述的事件：无锡先天道事件

下面再看发生在江苏的另一起先天道事件。

1945年2月，在无锡、常熟交界的无锡安镇地区发生了一起先天道与伪军的冲突事件。和永清县先天道事件不同，笔者目前还没有掌握事件发生不久当事人的表述。关于事件的大致情形，主要得之于当时日伪和共产党方面的报章评论，以及19世纪50年代以后杂糅了各种与事件有直接、间接关系人的回忆而形成的表述，因此，关于事件的表述都是再表述，即通常所说的第二手史料^①。通过这些再表述，我们对事件能知道多少呢？

关于日伪政权对事件的看法，可以从《申报》和共产党的《苏中报》、《解放日报》相关报道推知一二。5月19日，先天道事件平息，当天伪江苏省政府下令解散先天道组织。《申报》的报道说：

苏省府前以先天道，判用邪教，妖言惑众，早经勒令解散。通飭地方遵办。乃最近该先天道邪教徒之行动，又复变本加厉，故为维护地方治安计，特制定取缔先天道实施方案，分飭各县遵办。其要旨在剿抚兼用之原则下，一面严处先天道之指导者，一面则劝告受愚民众，促其醒悟，知所警戒。同时并授权各县政府，调派所属警保部队，会同地方驻军切实征剿；一方面断绝蔓延区域，一方面严禁城市村镇各铁铺为邪教徒制造刀剑。复制定案办法，俾使民众有以改过自新之途。^②

命令称日伪政权很早认定先天道为“邪教”并勒令其解散，从后文可知这与事实有出入。暂且不论。这段表述告诉人们，面对先天道徒的“变本加厉”——手持“刀剑”的抗争，日伪政权采取了剿抚兼施的方法。但是，“妖言惑众”的先天道的真实目的何在？语焉不详。共产党《解放日报》引用的日伪方面的两条报道对此有所触及。

一条为伪《中央日报》题为《彻底扑灭愚民邪教》社论，内称：“如今无锡、江

^① 诸大党、王庸《抗日战争时期的无锡先天道大暴动》，《无锡文史资料》第13期，14—17页。收入江苏省文史资料委员会编《江苏文史资料集粹》（社会卷），1995年。

^② 《先天道邪教猖獗》，《申报》1945年5月20日。

阴、常熟之先天道，抗官税而扰乱治安，实属严重。”“邪道邪教，不能视为乐观问题”，“其邪教会有政治作用，非单纯的道会，亦非下令拿办所能肃清”^③。原来，“邪教”事件是一场“抗官税”事件，先天道不是单纯的“道会”，具有“扰乱治安”的“政治作用”。另一则摘自4月15日、22日《文编周报》的文字称：

暴动团体名叫天仙会，已经发展至三万余人，其中包括青年农民、知识分子、妇女等。烽烟四起，触目惊心。抗税抗捐，难以收拾。该刊接着说，他们以暴动迎接新四军，因为他们知道中共军不仅不（收）捐税，不扰民，而且吃用老百姓的照样给钱。^④

这条记述中“抗税抗捐”语和前文“抗官税”同，原来，抗拒摊派乃是“妖言惑众”的先天道抗争目的之所在。此外，值得注意的还有两点：第一，称暴动的组织者为“天仙会”，参加人数达三万余人，“烽烟四起”。“天仙会”如何组织如此大规模的暴动，并没有说明。第二，“以暴动迎接新四军”一段文字如果是《文编周报》的原文，则需考虑是在怎样的语境下叙述的，因为新四军在实际支配的地区是征收赋税的。考虑到《解放日报》是作为舆论宣传的工具，这段言辞可以理解共产党对事态发展的某种期待。

那么，共产党方面是如何看待事件的呢？最直接的报道来自新四军发行的《苏中报》。5月20日《苏中报》如是概述了事件的轮廓^⑤：

元宵节，暴动的火焰在无锡、常熟交界的安镇附近爆发了。他们通过迷信的刀会（本来是反动派利用农民落后性，愚弄人民的政治阴谋，现在成了他们的绊脚石）形式而出现。那里的人民受愚教（即忠义救国军）包汉升部与章晓光、王品珊部的蹂躏很深。因此首先对王品珊进行反击。王挨打后，便勾结敌伪企图镇压，又引起人民对敌伪的反抗。一举将安镇13个鬼子和最凶恶的十几个特工全部劈死，大部武装被缴械。这样便轰动了整个澄锡虞地区，各地人民，男的的女的老的少的，都纷纷卷入这一运动，不断对愚教、伪警、土匪斗争。（中略）参加的人民估计共有5万以上，现在还在蔓延开去。

^③ 《利用会门团结力量，江南农民纷纷抗敌》，《解放日报》1945年6月19日。

^④ 《常熟、无锡、江阴一带，三万农民抗敌起义》，《解放日报》1945年5月30日。

^⑤ 《江南敌顽统治区五万人民的大暴动》（1945年5月20日），中共江苏省委党史工作委员会、江苏省档案馆《苏南抗日根据地》，中共党史资料出版社，1989年，383页。

这个运动震动了京沪线,引起了敌伪和忠救的恐惧,现在正在阴谋企图威胁利诱,以特工打入内部,来镇压、分化、瓦解他们。

文章使用了“暴动”一词,这是共产党方面对事件性质的看法。从上述文字可知,事件起因于“刀会”与国民党系的“忠义救国军”的矛盾,系从无锡一个名为安镇的小地方开始,逐渐向无锡、常熟等地蔓延。为了反抗忠义救国军的“蹂躏”,乡民们在刀会的组织下赶走了忠义救国军,而忠义救国军在投靠敌伪后,企图对刀会进行“镇压”,结果,刀会与忠义救国军的矛盾转化为刀会与敌伪的矛盾,刀会“一举将安镇13个鬼子和最凶恶的十几个特工全部劈死,大部武装被缴械”。事件扩大为“对忠救、伪警、土匪斗争”。

对于这一长段文字,需要注意的有两点:(1)事件的发动者是“刀会”,文章没有出现“先天道”字样,这和上文摘引的日伪报道略有不同。(2)反抗目标首先是“忠义救国军”,其后扩大到“敌伪”统治,而“忠义救国军”并不见于日伪方面的报道。

关于谁是事件的发动者之第一个问题,共产党方面的表述不尽相同。《苏中报》使用“刀会”一词。《解放日报》出现了不同称呼:“现南京地区农民,亦利用帮会组织、一心会等”;“无锡还有先天道、金光会等组织”^①。“江南农民起义,声势日益浩大。五月七日,无锡农民组织的大刀会,发起对敌伪抗捐抗粮抗税运动,打死无锡城南伪海关征税所人员七名”^②,等等。这些不同称呼的出现,说明一如无锡先天道被称为“红枪会”,大刀会、刀会也许仅仅是一种对民间武装结社的泛称——往往是“他称”,在这一名称下,存在各种不同的如先天道、金光会等“自称”,这些道会组织之间存在一定差异,并非“刀会”一言可以蔽之。这样,无锡先天道事件到底在多大程度上和傀儡组织“先天道”有关,是在叙述该事件时需要考虑的一个问题。

前文说过,先天道是一个以江洪涛为首的成立于北京的政治结社,为了扩大组织,它模仿华北红枪会一类的民间武装结社,成立“文会”和“武会”,将红枪会一类的结社纳入自己的名下,使之成为先天道分会。先天道进入江南地区很晚

① 前揭《利用会门团结力量,江南农民纷纷抗敌》。

② 同上。

中华人民共和国成立后,在镇压反动会道门的政治运动中,先天道作为反动会道门被镇压;案犯们的供词道出了先天道进入无锡前后的情况。根据陆仲伟的研究^①,大致情形如下。

将先天道引入无锡的是一个叫倪子才的人。倪子才,安镇人,早年参加当地民间宗教结社同善社。1943年,倪遭到了大概是匪化的忠义救国军——“游匪部队周某”的绑架勒索后,愤激不平,幻想得到神佛的助力。听说先天道咒语能“佛力保家,刀枪不入”,要求改信先天道的同善社信徒徐粹初介绍加入。在徐的引领下,倪北上拜访了先天道在济南的联络员张智先,经张介绍,复北上在北京得见先天道总会长江洪涛。倪等向江要求传授道法,得到江的同意。江派弟子边宝仓、联络员梁钟卿等随倪来到无锡。1944年7月,在边宝仓的策划下,先天道在无锡成立了“华中总分会”,又名“佛力保家会”,会长为宜兴同善社首士夏维宗,副会长为副首士徐粹初,“点导师”为边宝仓。边在无锡惠山公园,根据八卦“乾坤震巽坎离艮兑”传授了倪子才和范禄宝、朱升明等八大弟子。后来又“将八卦一化为二”,培植了十六小弟子,并传授五大女弟子,先天道利用这些男女传道师以无锡为中心,在宜兴、常州、江阴、常熟、苏州等地设立分支机构,在乡村设坛堂。在很短的时间里,据说就有近十万人参加。在暴动发生的常熟、锡武、锡澄接壤处,就有三万余人参加。

先天道在半年多时间能够获得如此大的发展吗?令人怀疑。假设真的有如此大的发展,可以推测和在华北乡村的做法一样,先天道只是把既有的宗教结社(如同善社)和“防匪御兵”的乡村武装结社刀会纳入“先天道”这一在日伪统治下具有“合法”身份的名目下。先天道的头目多为原同善社会员,这说明先天道吸收了大量本地原有同善社信徒,甚至可以说同善社可能集体改信了先天道。而在乡村,原来的刀会在换上了“先天道”的招牌后,并非完全听命于先天道分会的指示。安镇事件发生后的情形证明了这一点。

安镇事件发生后,先天道在江洪涛“与友军和政府合作”指示下,4月6日,无锡分会会长倪子才前往安镇伪区署,接受日军警备队铃江、日宪兵队宣抚班长龟山和伪无锡县长张修明的招降,起草了六条《誓约书》,“解散佛力保家会,会员收

① 陆仲伟《中国秘密社会》第五卷“民国会道门”,福建人民出版社,2002年,343—344页。

编为自卫团”，并将先天道分会总部迁到事件发生的张泾桥日警备队驻地，“以配合友军和政府”，遏止“渝伪匪共”（重庆国民党的忠救和共产党新四军）等。4月20日《誓约书》被刊载在报纸上，并散发于四乡。但是，对于无锡分会的决定，城区双河上、锡北长安、张村和锡西井亭等三大派拒不接受《誓约书》。最后，日伪将先天道徐粹初、倪子才一千人等逮捕。5月9日发布命令，限令20日之前交出武器，否则对先天道“格杀勿论”。

上述过程说明傀儡组织先天道的力量十分有限，其对下属道会亦缺乏有效的约束力，把手持刀剑的民众抗争一概说成是先天道所为存在很大问题。同样，从各地抗争的表象看，反抗对象并不一样，这涉及如何理解《苏中报》论及的第三个问题——先天道为何既反对“忠义救国军”，又反对“敌伪”统治之问题。

《苏中报》在回顾该地区人民生活时也写道：“苏锡澄虞一带人民，在敌伪、忠救等层层压迫下，透不过气来，过去曾不断消极反抗，如自发的几百人、几千人的非法暴动和合法请愿，但都被镇压下去了。”^①确实，长期以来，无锡、江阴、常熟等地为“敌伪”和“忠救”所困扰。1941年，日伪政权开始“清乡”运动。1942年2月，第三期“清乡”在澄（江阴）锡（无锡）武（武进）三县和昆山至无锡的铁路线南侧展开^②。因为无锡“地处沪宁铁路要冲，邻近新四军的茅山根据地”，所以一直到1943年清乡仍在进行^③。为了维持日军、保安队、警察和日常办公开支，日伪政权向民间派征田赋、捐税，其中“军米”一项开支“对人民威胁很严重”。而事件前传来的“抽壮丁”，“补充伪军”，“这件事也引起人民极度惊慌”^④。其时，无锡、江阴和常熟等地民众生活极其困窘。1944年正逢大荒年，4月14—15日，邻近常熟县大河、王庄等地的农民组织大刀会，集众千余人，用大刀长矛等攻打驻扎大义桥的保安队，遭到镇压，死近百人。事后伪县政府发布布告，威逼会员登记悔过，凡是登记者，交米三石^⑤。而日伪统治下的乡级政权更为腐败，“乡民等呼吁无门，即呈述于县政府，县长亦畏之如虎，亦从未闻有查办者”^⑥。

- ① 前揭《江南敌顽统治区五万人民的大暴动》，前揭《苏南抗日根据地》，382页。
- ② 江苏省常熟市地方志编纂委员会编《常熟市志》，上海人民出版社，1990年，26页。
- ③ 汪曼云《千里哀鸿说清乡》，转见前揭《苏南抗日根据地》，430页。
- ④ 前揭《江南敌顽统治区五万人民的大暴动》，前揭《苏南抗日根据地》，380—381页。
- ⑤ 前揭《常熟市志》，26页。
- ⑥ 余子道等编《汪精卫国民政府“清乡”运动》，上海人民出版社，1985年，358页。

在日伪“清乡”下，民众本已苦不堪言，此外，还要遭受由国民党部队溃兵形成的亦匪亦兵的忠义救国军的无休止的侵扰。该地忠救有四个系统：包汉生、包福颐一股为国特嫡系；包系主力，投入日伪的章晓光系统；孙纪福系统；胡肇汉系统。“各个系统中又有各小股，小股之间也有矛盾。主要是经济上的矛盾，收税绑票的冲突，分赃不均。”^①四个系统的忠救部队在各自划定的地盘上征粮抽税，经常绑票敲诈^②。前述倪子才原为同善社信徒，之所以投入先天道，盖由于遭受绑票之灾，试图借助先天道之佛力来保家护身。因此，在该地区进行游击战的新四军说先天道攻击的目标首先是忠救可谓事出有因。

综合上述有关先天道事件再表述的内容，事件的轮廓可以描述如下：（1）安镇先天道与日伪发生冲突；（2）冲突事件前后，民众对侵扰地方的忠救和日伪统治不满，发生了以无锡、常熟为中心的抗争风潮；（3）因为安镇事件的主角是先天道，先天道成为抗争的象征符号。而实际上，先天道作为日伪统治下的傀儡组织，不可能发动针对日伪统治的抗争，其基层组织与日伪军发生冲突是由于地方性因素造成的，与政治因素无关。

1953年2月，“先天道”被作为反动会道门镇压^③。对于其历史上的事件，有关叙述发生了变化：作为抗争主体的先天道被一分为二，上层被视为反动的傀儡组织，下层被视为具有反抗日伪民族精神的组织。与此相对，“忠救”从事件叙述中脱落了，抗争的目标单一化为反对日伪统治。而且，共产党形象出现在事件的后期，据说中共“苏中六地委”在安镇暴动发生后提出“保村庄、保太平、打鬼子、反土匪”的口号，深得先天道“中下层群众”拥护^④，从此，先天道事件被纳入地方革命史叙述之中。在这种政治化叙述下，有关事件表述的再生产丰富了人们关于事件起因的知识^⑤。

1945年正月（1月12日）新年刚过，手持大刀的先天道信徒赶走了无锡三里许的傀儡政权乡长乔厚坤。一个月后（2月25—26日），先天道信徒三千人攻打安镇，

- ① 前揭《江南敌顽统治区五万人民的大暴动》，前揭《苏南抗日根据地》，381页。
- ② 同上，382页。
- ③ 无锡市地方志编纂委员会编《无锡市志》（第三册），江苏人民出版社，1995年，2378页。
- ④ 包后昌、张单如《1945年春的苏南“先天道”暴动》，《江苏革命史料选辑》第六辑。
- ⑤ 诸大光、王鹰《抗日战争时期的无锡先天道大暴动》，《无锡文史资料》第13期。该文收入江苏省政协文史资料委员会编《江苏文史资料集粹》（社会卷），1995年。

其首领、被称为“八大先生”之一的朱胜(又作“升”)明死于枪弹之下。为给朱报仇,29日,先天道聚集上万人包围安镇,击毙了三名日军士兵、二名伪军士兵,活捉了伪军队长。4月3日,在坊前镇冷巷,来了十几个名为“护路军”的日伪军向民众索要食物。当地居民立刻鸣锣集合,召集了附近村落里的许多民众,将日伪军团团包围,砍死其中七人,将日伪军赶走。而1月12日的冲突竟源于三里许伪乡长、地主乔厚坤与先天道先生范绿(又作禄)宝、朱胜明之间的个人化的矛盾。这是先天道事件的源头。

结 语

以上,本文通过对抗日战争时期发生在日伪统治区的先天道事件的考察,检讨了事件表述和再表述中所存在的问题。在讨论永清先天道事件时,由于学者囿于先天道(=红枪会)为“防匪御兵”农民排外组织之成见,将事件视为一场“排他性”的抗争,并且按照这一先验的前提有选择地截取了史料。如此进行的解释也许具有很大的适用范围,但至少在本文所讨论的事件上是缺乏说服力的。

同样的问题也存在于对无锡先天道事件的表述上。关于无锡先天道事件,虽然目前缺乏第一手的表述史料,仅能利用第二手的再表述史料,但这不妨碍进行文本比较研究。比较不同文本可以看到,在事件发生后不久,日伪即认定抗争事件是一起由“邪教”挑起的抗捐抗税运动;相比之下,共产党新四军虽然在表述事件时掺杂了对先天道的主观期待,将其视为“暴动”和“农民起义”,但由于身临其境,其表述的事件要比后来的表述复杂得多。19世纪50年代以后,当这次事件被纳入抗战革命史叙述后,事件轮廓被精简得清晰明了,忠义救国军的存在无关紧要,甚而从几乎所有的文本中消失了。

与有关抗日战争历史的大叙述相比,本文所讨论的问题微不足道。不过,如果回到本文开头引用的卡尔的话,从中可以引申出如何表述历史的大问题。在历史表述问题上,直至上个世纪80年代,实证主义史学依然占有绝对的话语霸权。它的朴素的信奉者坚信通过对文本的比较和解释,最终一定可以揭示“事实”真相。而实际上,很多情况并非如此,借用性别学(gender)学者斯科特(J.Scott)的话来说,“新的历史事实也许可以实证过去妇女的存在,但未必能改变女性活动

重要性(或阙如)”^①。何以见之呢?因为文本事实不等于历史事实,朴素的实证主义史学将文本事实与在特定时空里发生的历史事实同一化,认为文本可以复制历史事实,只要对文本去伪存真即可再现历史。本文的讨论说明无论是对事件的当时表述,还是稍后进行的再表述,都存在各种各样的缺陷。面对过去之不在场,叙述者所进行的真伪判断其实是对语言建构的事实所进行的判断,与过去发生的历史性事实并非一拍即合之关系。因此,本文所能做到的仅仅是指出不同文本的表述差异以及存在的判断错误,摸索证据与可能性之间的关系。

在文本事实与历史事实问题上,“语言学的转变”在点中了朴素实证主义史学的无知的同时,给历史学带来了可怕的颠覆性后果。欧洲中世纪史学者G.M. Spiegel将这种颠覆作用形容为“解构历史,即离开[现实]转向语言,唯有语言是构成人意识的主体,唯有语言方能产生社会意义”^②。这一颠覆意义当被历史修正主义者(revisionist)偷梁换柱、援以为意识形态的工具后,具有讽刺意味的是,好谈“事实”者,不是朴素的实证主义者,就是修正主义者。因此,面对过去不在和过去实在性(reality)之间的断裂,历史学家与事实之间的相互作用、现在和过去之间的对话从此不单单是“认识论”上的知识问题,亦是如何摆脱“权力”制肘的政治正确问题。历史学家唯有直面认识和权力在历史表述中的位置,现在和过去的对话即使“永无止尽”,“相互作用”必为具有生产性的知识活动。

① Joan W. Scott, *Gender and the Politics of History*, New York: Columbia University Press, 1988, p. 3.

② G.M. Spiegel, "History, Historicism, and the Social Logic of the Text in the Middle Ages", *Speculum: A Journal of Medieval Studies*, Vol. 65, No. 1. 日译文收入《思想》1994年第4号。

图书在版编目(CIP)数据

新史学. 第1卷, 感觉、图像、叙事/杨念群主编. 北京:
中华书局, 2007.4
ISBN 978-7-101-05492-7

I. 新… II. 杨… III. 史学-文集 IV. K0-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2007)第 031016 号

书 名 新史学(第一卷)——感觉·图像·叙事
主 编 杨念群
责任编辑 孙文颖
出版发行 中华书局
(北京市丰台区太平桥西里 38 号 100073)
<http://www.zhbc.com.cn>
E-mail: zhbc@zhbc.com.cn
印 刷 北京瑞古冠中印刷厂
版 次 2007 年 4 月北京第 1 版
2007 年 4 月北京第 1 次印刷
规 格 开本/700×1000 毫米 1/16
印张 21 1/4 插页 2 字数 280 千字
印 数 1-4000 册
国际书号 ISBN 978-7-101-05492-7
定 价 38.00 元

《新史学》编辑委员会

召集人: 孙 江 杨念群 黄兴涛

编委: (按姓氏笔画排列)

毛 丹 王 笛 朱庆葆 刘建辉 李晨光

余新忠 贺照田 夏明方 黄东兰 麻国庆

龚 隽 章 清

피부색의 등급 -근대중일교과서의 인종서술

쑨장(孫江)

1. 서론

17세기 이래 형성된 각 종 근대 지식 가운데, 인종/종족지식(racial knowledge)의 생산/재생산은 편견과 원한을 전파하는 인종주의/종족주의(racism)와 매우 밀접한 관계를 지니고 있어, 오랫동안 대부분 학자들의 관심에서 벗어나 있었다. 지난 세기말 포스트모더니즘의 영향으로 학계에 갑자기 이전의 인종지식에 대한 연구 붐이 일어나, 근대 인종지식에 대한 여러 저술들이 연이어 발표되었다. 이러한 저작은 단지 “인종 없는 인종주의”라는 근대의 허구성을 폭로했을 뿐만 아니라 인류 역사발전과정 중의 인종차별 현상의 보편성을 밝혀내었다.¹⁾

이러한 인종연구 붐 속에서 중국역사 역시 연구자의 관심사가 되었다. 수많은 연구 가운데 가장 주목할 것은 프랑크 디코터(Frank Dikötter)의 『근대 중국의 인종담론』(*The Discourse of Race in Modern China*)을 들 수 있다. 이 저서는 인종 서술에 관한 중국 고금문헌자료를 광범하게 수집하여 그 문제 연구를 위한 중요한 참고서의 역할을 하고 있을 뿐만 아니라²⁾ 또 더욱 보충 토론할 가치가 있는 많은 문제들을 제기 하였다. 예를 들어 동 일시대에 서로 다른 인종서술이 서로 어떤 관계를 맺고 있고, 족군(族群)차별을 지닌 “화이 지변”과 이러한 차별을 없애는 “화이합치(華夷合治)”가 어떻게 오랫동안 공생할 수 있는가? 인종문제의 “보편성”을 강조하면서 동시에 중국 “전통”의 족군/인종담론과 서구 “근대” 인종 지식을 선형적 역사 순차 속에 넣고 동일시 할 수 있는가? 사카모토 히로코(坂元ひろ子)는 이러한 문제들에 주의한 듯, 중국 근대 인종지식의 다방면을 정리한 한 후, 중국 근대 인종 개념은 중국 전통 인종지식과 서구 인종지식의 산물이라는 절충적인 관점을 제기하였다.³⁾ 그러나 이러한 인종개념은 어떻게 “결합”되었는가라고 진일보하여 묻는다면, 대답은 그리 간단하지 않다. 사카모토 히로코의 연구⁴⁾와 이시카와 요시 히로(石川禎浩)⁵⁾, 피터 자로(Peter Zarrow)⁶⁾등의 량치차오(梁啟超) 인종담론에 관한 연구는 두 종류의 인종담론 사이에 직접적인 관계는 없으며, 양자의 상호 연관은 다른 요소의 매개를 통해서 이루어졌다는

1) “race” 자체의 애매하고 복합적인 의미와 마찬가지로, 그 어휘의 번역어 “人種”, “種族” 등도 동일한 문제를 지니고 있다. 본문에서 사용하는 “인종”은 피부색, 골격과 같은 인간의 가시적인 부분에 대한 근대인종 담론의 집착을 강조하고 있다.

2) Frank Dikötter, *The Discourse of Race in Modern China*, Hong Kong, 1992. 楊立華譯《近代中國之種族觀念》, 江蘇人民出版社, 1999年. “Racial Identities in China: Context and Meaning”, *The China Quarterly*, 138, 1994.

3) 〈中國史上の人種概念をめぐって〉, 竹沢泰子編《人種概念の普遍性を問う: 西洋的パラダイムを超えて》, 京都: 人文書院, 2005年, 191頁.

4) 坂元ひろ子〈中國民族主義の神話——進化論・人種觀・博覽會事件〉, 《思想》849號, 1995年. 收入氏著《中國民族主義の神話》, 東京: 岩波書店, 2004年.

5) 石川禎浩〈辛亥革命時期的種族主義與中國人類學的興起〉, 中國史學會編《辛亥革命與二十世紀的中國》, 中央文獻出版社, 2002年. 〈近代-アジア“文明圈”の成立とその共同言語——梁啟超における“人種”を中心に〉, 狹間直樹《西洋近代文明と中華世界》, 京都大學學術出版會, 2001年.

6) Peter Zarrow, “Liang Qichao and the Conceptualization of Race in Late Qing China”, 《中央研究院近代史研究所集刊》第52期, 民國九十五年六月.

것을 보여준다.

중국 역사를 돌아해보면, 한적(漢籍)자료에서 수 많은 인종관련 서술을 발견할 수 있을지라도, 19세기 말 20세기 초의 지식공간에서의 인종서술에 관한 맥락을 명확히 확인할 수 있다. 즉 구미의 인종차별화 서술이 어떻게 내재화되는가 하는 문제, 그리고 이와 관련하여 인종차이(difference)의 내재화 과정에서 일본이 맡은 매개 작용. 본문은 이 문제에 대한 필자의 기존 연구를 바탕으로⁷⁾, 우선 구미에서 비롯된 근대 인종지식이 동아시아의 콘텍스트(일본과 중국)하에서 어떻게 재생산되는가 하는 문제를 논하고, 다음으로 근대 지식을 전파하는 가장 중요한 도구인 교과서를 통해 재생산된 이러한 인종지식이 얼마나 큰 사회적 의미를 지니고 있는지를 검토해 보고자 한다. 구체적으로 말해서, 본문의 관심은 피부색의 등급화/차이화라는 “근대 인종지식”이 동아시아 세계에서 어떻게 내재화되었는가라는 문제이다. 19세기 말-20세기 초 세기적 전환기에 각 종 서구 인종지식이 간접적 혹은 직접적으로 (일본을 경유하여) 중국에 유입된 후, 어떤 지식들이 공공지식(public/official knowledge)으로 되었는가?

2. "문명 개화"--메이지 일본 교과서속의 인종서술

“교과서가 일본인을 형성했다”⁸⁾. 일본은 메이지 시기에 다양한 인종관련 서술이 존재하였는데, 공공지식 특징을 지닌 인종지식의 글쓰기와 전파는 주로 교과서를 통해서 완성되었다. 일본의 근대교육을 고찰해 보면, 근대국가를 건설하는 과정에서 메이지 정부는 근대학교의 교과서가 국민을 형성하고 국민의지를 통일시킴에 있어 중요한 수단이라는 것을 인식하였음을 알 수 있다. 그리하여 메이지 5년 후부터, 각 급 학교에서 사용하는 교과서는 문부성에서 지정하기 시작했다.

문부성의 인정을 받은 교과서 가운데는 후쿠자와 유키치가 편역한 『世界國盡』이라는 책도 포함되어 있었다. 이 교과서는 5권과 부록으로 구성되었는데, 초판은 메이지 2년(1869년)에 출판되었다. 제1권의 “세계인민의 일(世界人民之事)”에서, 후쿠자와는 당시 유행하던 블루멘바흐(J. F. Blumenbach)의 인종 5분법에 따라, “유럽 인종은 백색으로, 그 수는 4억2천만이고, 아시아 인종은 담황색으로 그 수는 4억 6천만이며, 아메리카 산속에 거주하는 인종은 붉은 색으로 그 수가 1천만에 이르고, 아프리카 인종은 검은색으로, 그 수가 7천만, 그리고 대양주의 섬에 거주하는 인종은 다갈색으로 그 수가 4천만에 이른다.”⁹⁾고 하였다. 이 5종의 인종에 대해, 위 책에서는 또 章별로 나누어 서술을 마친 후, 부록 “인간의 지리학(人之地學)”편에서, “세계의 인종은 5종으로 나눌 수 있는데, 그 용모와 지혜가 각기 다를 뿐만 아니라 각 국의 풍속과 생계방식도 또한 서로 다르다”고 지적하였다. 나아가 문명과 야만의 시각으로부터 5종의 인종을 네 가지 특성으로 세분하였다.¹⁰⁾

“첫째는 혼돈과 야만의 범위에 속하는 최하등의 백성으로 鳥獸과 다를 바 없다. 아프리카 내지의 뉴기니,阿斯达里加 등의 토인은 야만인으로 광야를 배회하며 수렵을 업으로 삼고, 혹은 곤충을 먹거나 야생 과일과 풀뿌리를 먹고 산다. 그 곳의 사람들은 자비심이 없고 서로 싸우며, 사물에 집착하여 인도를 모르고, 심지어 식인하는 자도 있다. 일정한 거주지가 없거

7) <拉克伯里的中国之旅——“中国人种西来说”在东亚的传布与文本之比较> (未刊)。

8) 唐澤富太郎《教科書の歴史——教科書と日本人の形成》, 創文社, 1956年, 第1頁。

9) 福澤諭吉《世界國盡》, 参見《日本教科書大系》近代篇, 第15卷, 地理(一), 讲谈社, 1965年初版, 1977年三版, 15頁。该教科书亦可参见《福澤諭吉全集》第2卷, 岩波书店, 1959年。

10) 上掲书, 57-58頁。

나, 간단한 작은 집을 짓고 모여 마을을 이루어 살기도 한다. 편리를 위해는 갑자기 사방으로 흩어져 흔적을 남기지 않기도 한다. 농업에 종사하지 않아 오곡을 먹지 않고, 의복은 간단하고 보잘 것 없어 거의 나체에 가깝다. 그 지식은 고루하고 험애하며, 문자를 모르고, 법률을 알지 못하며, 예의가 없고, 도로표지가 없다. 이러한 우매한 백성가운데 두목이 대중을 통치하는데 행하는 것이 매우 포학무도하다.”

“두번째는 야만 혼돈한 자 보다 훨씬 뛰어난 지나 북방의 타타르와 荒火野, 아프리카의 토인 등으로, 이들은 집이 없이 천막을 치고 비바람을 막거나 간혹 집을 짓기도 하지만 매우 조잡하다. 수초를 따라 생활하는데 천막과 가재도구를 휴대하고 이동한다. 소나 양고기를 먹고 그 젖을 먹는데, 간혹 농업을 아는 자는 오곡을 먹기도 한다. 야만국은 비록 문자가 있지만 글을 읽을 수 있는 자는 매우 적다. 기술(藝術)은 졸렬하기 그지없고, 도구나 장식 관련 재주를 알지 못한다. 이러한 인민을 통치하는 자는 족장(patrainarch--인용자)으로, 자손 대대로 계승하여 아랫사람은 그를 대하기를 군주 대하듯 존경하고 흠모하며, 그 법은 인정이 없고 거의 포학에 가깝다.”

“세번째는 미개 혹은 반개화한 자로, 비록 참된 문명개화의 경지에 다다르지는 못하였지만 야만과 비교하면 훨씬 뛰어나다. 농업이 발달하여 음식이 충족하고, 기술도 진보하여 온갖 기교를 쫓기도 한다. 도시를 건설하고, 집을 꾸미고, 문자와 학문의 도 역시 흥성하였다. 그러나 질투심이 심하여 타국의 사람을 미워하고, 부녀자를 멸시하고, 연약한 자를 능멸하는 풍속이 있다. 지나와 土留古, 邊留社 등의 국가를 반개화국이라 할 수 있다.”

“네 번째는 문명 개화국으로 예의를 중시하고, 올바른 도리를 귀히 여긴다. 인정이 온화하고 풍속이 순정하며 사업 각 분야가 나날이 새로워지고, 학문도 나날이 발전한다. 농업에 힘쓰고, 각 직업에 종사하여 온갖 기예가 발전하지 않는 것이 없다. 국민은 자신의 업무에 만족하여 성실히 하면 곧 하늘의 도움을 받는다. 그리하여 말단의 위치에 있는 자라도 만족감을 얻는다. 아메리카 합중국, 영국, 프랑스, 게르만, 네덜란드, 스위스 등 국가를 가히 문명개화의 경지에 도달했다고 할 수 있다.”

『世界國盡』은 미국인의 저작을 편역한 것으로, 메이지 정부의 “문명개화”의 요구에 부응하기 위해 출판 후 거듭 재판을 발행하여 그 독자수가 후쿠자와의 계몽 명저인 『勸學篇』에 뒤지지 않는다. 그리고 서로 다른 인종의 문명과 야만관한 그의 서술은 그 후 교과서 인종서술의 본보기가 되었다. 의미심장한 것은 후쿠자와의 서술가운데 일본이 “부재”한다는 것이다. 그는 일본이 위 네 가지 류 가운데 어느 류에 속하는지 명시하지 않았다. 그에게 있어 일본은 비록 막부정권을 전복시키고 “메이지 유신”을 시작하기는 했지만, 봉건제의 누습이 제거되지 않고 다시 손을 봐야할 것이 수없이 많기에, 아직 영미 강국과 대등해지기에는 부족하고, 어떤 의미에서는 “지나”-중국과 동일한 등급의 “半 문명개화”의 상태에 처해 있었다. 하지만 일본 국력의 증강에 따라서 그리고 “문명개화”의 열강 여러 국가들과 나란히 대등해짐에 따라, 교과서의 일본에 관한 서술은 부단히 변화하였다. 이 점은 일본 교과서를 고찰할 때 특히 유의할 필요가 있다.

메이지 초년, 문부성이 지정한 또 한편의 저명한 지리교과서는 우치다 마사오(内田正雄) 편저의 『輿地誌略』이다. 이 책은 메이지 3년(1870년)에 출판되기 시작하여, 메이지 10년(1877년)에 4편11권의 전권이 출판되었는데, 마지막 1편은 우치다 사후 다른 계몽학자 니시무라 시게키(西村茂樹)가 이어서 편집한 것이었다. 인종서술에 관한 이 책의 틀과 내용은 후쿠자와의 『世界國盡』과 유사하다. 제1권의 “衣食의 수요와 개화의 등급”이라는 절에서 서로 다른 인종의 야만-문명 틀 속에서의 등급을 장편의 문장을 통해 서술하고 있다. “야

만”의 예로는 “북아메리카의 토인”(甲)을, “미개의 백성”으로는 유목을 주요 업으로 삼고 있는 “아라비아, 시베리아, 타타르”와 반유목의 “아라비아, 아프칸”, 그리고 농업과 목축업을 겸업하고 있는 “아프리카주 및 남양 제군도의 토인”과 “이전 인도 및 아시아 內地”의 인민(乙)을, “반개화의 백성”으로는 “지나, 比耳其亞, 터키”(丙)를, “문명개화의 백성”에는 “서양 여러 국가와 아메리카 합중국”(丁)¹¹⁾을 각각 귀속시켰다.

비록 우치다의 교과서의 서명에 편역인지 창작인지 명시하지 않았지만, 후쿠자와의 교과서와 마찬가지로 편역된 것임에 틀림없다. 메이지 초년에 출판된 지리 교과서 가운데는 유럽 문장에서 번역하였음을 직접 명기한 것들도 있다.

메이지 5년(1872년) 출판된 사누이(讚井逸三), 카와무라(川村秀二)가 공역한 미첼(Mitchell)의 『지리서직역(地理書直譯)』에서는 세계의 인종을 백인종, 황인종, 흑인종, 다갈색인종, 적색인종 등 5가지로 나누고, 그 가운데 “백인종이 다른 인종보다 우수하다”¹²⁾라고 말하고 있다. 얼마 후, 메이지 7년(1874년) 『官許輿地新編』이 출판되었다. 역자인 石黑厚의 서술에 따르면, “이 책은 런던, 弗拉地費亞鏤行의 지리서를 발췌·번역한 것”이었다. 이 책에서는 인종에 대해 구분을 짓지는 않았지만, “문명개화”를 기준으로 세계 인종을 “개화 인종”, “반개화 인종”, 그리고 “미개화 인종” 세 등급으로 나누었다. 그리고 그 구체적인 특징으로서, “문명개화 인종은 학술과 기예를 중시하고 대자연의 조화를 통찰하며, 가문을 경시하고 현명한 것을 숭상한다. 그리고 신의로써 사해 만국과 교류하고 법과 정치는 맑고 투명하다”. 문명개화 인종의 대표로는 “영국, 프랑스, 아메리카 합중국, 프로이센 등 국가이다”. 다음은 반개화의 인종이다. “반개화의 인종은 기예와 문자를 중시하고, 옛 것을 숭상하고 스스로 자대자존하며 외국인을 멸시한다. 가문을 중시하고 부녀자를 노예처럼 여긴다”. “이를 미개화 백성과 비교하면 훨씬 더 개화되어 있다. 이들 국가로는 일본, 지나, 터키, 百耳失亞 국가등이 있다”. 마지막으로 미개화 인종이다. “야만인은 수렵을 생업으로 삼고, 나체로 지내며 곤충이나 야생 과일을 먹고 산다. 심한 경우는 식인을 하기도 하며 성인을 위해 강제로 약한 자를 죽이기도 한다. 대부분 동굴에서 살아 금수와 거의 차이가 없다. 중부 아프리카의 인민, 신기니, 오스트레일리아 국가 등이 바로 그러하다.” “미개화 인종을 전자(야만인)와 비교하면 간혹 다소 문자를 아는 경우도 있지만 기르는 가축과 함께 무리를 지어 그 젖을 먹고 사는데, 타타르, 아라비아, 북부의 아프리카 인종이 그러하다”.¹³⁾

위의 책과 같은 메이지 7년(1874년)에 출판된 지리교과서로 또 深間内基가 William Huse, Ogustin Michel, Gold Smith 등 영국 지리학자의 저작을 편역한 소학 지리교과서 『輿地小學』이 있다. 이 책은 5대 인종의 체격 특징을 소개한 후, 또 각 종족의 성격, 습성을 소개하였는데, 그 구체적인 내용을 보면, (1) 코카소이드 혹은 백인종, 도 유럽인종이라고 부르는데, “골격이 가장 반듯하고 용모가 매우 아름다우며, 여러 인종가운데 가장 개량되었고 가장 재주가 많아 마땅히 앞장서서 문명의 극치에 도달할 것이다.” (2) 몽고인종, 혹은 황색인종(일본, 중국 등 다수가 이 인종에 속한다)으로, “천성이 인내심이 강하고 학업에 성실하여 마땅히 문명의 경지에 들어가게 될 것이다.” (3) 이디오피아 종, 혹은 흑인종으로 “습성이 게으르고, 아직 개화의 경지에 들어서지 못하였다.” (4) 말레이 종, 혹은 다갈색인종으로, “성격이 강렬하고 항상 복수심을 품고 있으며 개화된 바가 매우 적다.” (5) 아메리카 종 혹은 적색인종으로, “복수심이 강하고 호전적이다”¹⁴⁾. 인종 특징에 대해 이 책은 위의

11) 内田正雄《輿地志略》，前掲《日本教科书大系》近代篇，第15卷，地理（一），80-82页。

12) ミツチエル（密都尔）著，讚井逸三、川村秀二译《地理书直译》，新初学地理书，明治5年，16页。

13) 石黑厚译述《官许輿地新编》尾张栗田氏，明治7年，11-12页。

책보다 가시적인 피부색, 골격으로부터 더욱 세밀하게 서술하고 있다. 뿐만 아니라 이 책은 문명론의 관점으로부터 또 인종과 문명의 관계를 설명하고, 5대 인종에 대해 각각 고유한 지위를 부여하고 있다. “(1) 야만인은 가장 하등인으로 비록 인간의 외모를 갖추고 있지만 그 마음은 금수와 다를 바 없어, 인륜을 전혀 모르고 단지 배 고품과 갈증만을 알 뿐이다. 아프리카, 오스트레일리아 인이 이에 속한다. (2) 미개인은 야만인보다 약간 뛰어나지만 천막에 거주하며 목축을 주업으로 삼고 있다. 지식이 몽매하여 비록 문자가 있으나 단지 일을 기록하는데 그칠 뿐이고 그나마 문자를 아는 자도 매우 드물다. 대대로 추장이 통치하는데, 추장이 인민을 대하는 것이 가혹하고 잔학하다. 터키인(아라비아 인)과 북아프리카인이 이에 속한다. (3) 반개화인은 政體나 풍속에 있어 크게 개선되고, 인민은 경작에 능하며, 도시가 발달하고 학문이 진보하였다. 그러나 인민은 대부분 외국인을 싫어하고 부녀자를 노예처럼 대한다. 지나, 터키 등이 모두 이에 속한다. (4) 문명 개화인은 예의를 중히 여기고 바른도를 행하며, 모든 사물과 사업을 개량하여 완미하게 하지 않는 것이 없고 학술에 열중한다. 개화의 백성은 경작을 위해 산술을 중시하고 회화와 肖像, 기술등 역시 완미할 정도로 발전해 있다. 인민은 각기 그 뜻을 펼치기 때문에 국가 또한 매우 융성하다. 그 가운데 가장 뛰어난 국가는 아메리카 합중국, 영국, 프랑스, 게르만이다.”¹⁵⁾

이외에 학교 교사들이 집단적으로 편찬한 지리교과서가 있다. 메이지 9년(1876년), 千叶师范학교에서 편집한 『初學地理書』는 인종 5분법에 근거하여 지구상에는 황인종(몽고인종), 백인종(코카소이드), 흑인종(아프리카), 홍인종(아메리카), 다갈색인(巫來由)이 있는데, “이 중에 가장 개화된 것은 백인종이고, 다음이 황인종이다.”¹⁶⁾라고 지적하고 있다.

이상의 지리교과서로부터 다음을 확인할 수 있다. 첫째, 인종 5분법은 교과서에서 일반적으로 채택하는 분류법이다. 둘째, 분류의 기준은 가시적인 피부색과 골격 등 신체속성에 근거해 있다. 셋째, 이러한 자연속성에 문명/야만이라는 함의가 부여되었다. 이와 같기 때문에 같은 인종이라 하더라도 또 다른 형태의 등급차이가 존재한다. 예를 들어 같은 백인종 가운데서도 영국, 프랑스, 독일, 미국등이 동유럽이나 남유럽의 지역과 국가의 백인종보다 확연히 뛰어나다. 또 같은 황인종이라도 터키, 이란, 중국등은 기타 지역이나 국가의 황인종보다 더 뛰어나다. 이러한 내용은 그 저본(original)인 영문 텍스트에서는 어떻게 나타나고 있는가? 이에 대해 본 논문에서는 더 이상 논하지 않겠다. 그러나 내용으로부터 분명히 확인할 수 있는 것은, 메이지 교과서의 저본은 결코 중국의 전통지식이 아니라, 구미의 근대 인종 지식이며, 메이지의 “문명개화”를 배경으로 이러한 지식은 일본의 교과서에서 무단히 재생산되었다는 것이다.¹⁷⁾

일본 근대 교과서의 역사에서 메이지 10년(1877년)은 중요한 한 해이다. 이 해에 문부성은 검정교과서제도를 반포하여, 학교에서 사용하는 교과서는 모두 문부성의 “검정”을 받아야 했다. 국가의지가 교과서의 편찬에 구현되기 시작한 것이다. 예를 들어 메이지 27년(1894년) 太田保一郎이 편찬한 『中等新地理』가 東京八尾書店에서 출판된 후, 문부성에 보내 “검정심사”를 신청하였다. 저자는 일본 學習院 의 지리 “조교수”로서, 그 책을 “보통중학교”에서 사용하려고 하였다. 그러나 결과는 성이 “小川”인 한 심사원이 그 책에 “불허”라고

14) 深間内基《與地小学》，1874年，16-18頁。

15) 同上，19-22頁。

16) 千叶师范学校編輯《初學地理書》，東京：出雲寺万次郎，明治9年，페이지 구분 없음。

17) 柏原学而譯《地學訓蒙》(甲府書林，明治8年)은 단지 피부색만 얘기할 뿐 높고 낮음에 대한 언급은 없다. 인류를 몽고인종, 말레이종, 백인종, 아메리카종, 아프리카종으로 나누고, 그 책 부록의 인종화보에 백인종을 정가운데 배치하였다.

朱筆을 달았는데, 이유인 즉 “체제가 허술하여 교과서로 적합하지 않다. 오류가 심히 많다”는 것이었다. 그러나 그 책 전체를 통독해보면 결코 이러한 심각한 문제점은 발견되지 않는다. 다만 인증서술에 있어서, 그 책은 인증구분의 5분법과는 달리 백인종, 황인종, 흑인종이라는 또 다른 3분법을 채택하고, “다갈색의 말레이인과 구리색의 아메리카인은 모두 황인종으로 분류할 수 있다”고 하였다. 뿐만 아니라 그 책은 각 인증에 대해서도 높고 낮음을 구분하지 않았다.¹⁸⁾ 이는 후에 더욱더 “과학”적인 것으로 증명된 이러한 인증 분류법이 일본 교과서의 세계에서는 아직 “공공지식”이 되지 못하였음을 말해준다.

그렇다면 문부성의 심사에서 합격한 교과서의 인증서술은 어떠했는가? 이제 그 가운데 몇 가지 예를 들어보겠다. 물론 이들 교과서는 일본에서 현재 거의 사용되지 않는다.

우선 인증서술의 새로운 변화, 즉 “주(洲)”의 지역단위로 인증을 구분하는 서술이 등장하였다. 西村义民은 『地理總論』에서 가시적인 피부색에 따라 인증차이를 서술하지 않고, “주(洲)”로써 그 차이를 구분하였다. 그 책의 제4장에서 “그 개화문명을 논하자면, 유럽이 제1위이고 아메리카가 그 다음이며, 아시아가 또 그 다음이다. 나머지 두 주(洲)는 대부분 미개화한 나라 혹은 부락이다.”¹⁹⁾라고 하였고, 제5장에서는 “5대주(洲) 가운데 저명한 국가는 무릇 30여국으로, 우리 일본은 그 가운데 첫 손가락에 꼽히는 나라고, 그 나머지 작은 부락은 이루 다 셀수 조차 없다”²⁰⁾고 하였다. 辻敏之, 冈村増太郎의 『小學校用地理』에서도 주(洲)에 따라 인증을 구분하고, “대양주(洲), 인도 제 島嶼의 열대지역에 거주하는 사람들은 먹거리가 풍부하여 게으르고 방종하며 야만의 풍속에서 벗어나기 어렵다. 또 극한지역으로 둘러 쌓인 국가의 인민은 항상 衣食이 부족하여 역시 開明의 경지에 들어가기 어렵다. 오직 온대지역에 거주하는 인민만이 적당하여 최고의 문명 수준에 오를 수 있는데, 서양 여러 국가와 일본, 지나등이 그러하다.”²¹⁾라고 하였다.

이 밖에 일부 교과서는 비록 여전히 5분법을 따르고 있지만, 더 이상 피부색이 문명개화의 정도를 결정한다고 강조하지는 않는다. 메이지 16년 출판된 三橋惇의 『小學輿地誌略』에서는 비록 “세계인류는 크게 5가지로 분류된다. 즉 몽고인종(황인종), 코카소이드종(백인종), 以日阿伯种(이디오피아종, 흑인), 巫來由种(말레이, 다갈색인종), 아메리카종(구리색 인종)이 그 것이다”라고 하였지만, 이러한 피부색의 차이와 “각 국 인민의 개화 정도에는 높고 낮음의 차이가 있다”는 것 사이의 직접적 관계를 명시하여 설명하지는 않았다.²²⁾ 이와 달리 冈村増太郎의 『新撰地誌』 제9과에서는 단지 피부색과 골격에 따라 인증을 코카소이드종, 몽고인종, 아메리카종, 아프리카종과 말레이종 등을 판단하는 말이 여러 곳에서 나온다.²³⁾

하지만, 후쿠자와 이래 인증5분법과 “문명개화”의 高下의 차이는 여전히 교과서 서술의 주류를 이루고 있다. 메이지 12년(1879년), 山田行無가 편찬한 『新撰地理小誌』 제 3장에서는 “유럽은 아시아 서부에 위치해 있는, 코카소이드 백인종의 거주지이다. 토지는 비록 가장 작지만 인민은 지식이 풍부하고 공예에 뛰어나며 웅장하고 화려한 주택에서 거주한다. 가볍고 따뜻한 의복을 입고, 신선하고 맛있는 음식을 먹으며, 감히 현재 세계의 낙원이라 할 수 있다”²⁴⁾라고 하였다. 그리고 高橋熊太郎이 편찬한 『普通小學地理書』의 제9장 인증

18) 太田保一郎 《中等新地理》，东京：八尾书店，明治27年，118-119页。

19) 西村义民 《地理总论》神户：熊谷久荣堂，明治15年，5页。

20) 同上，9-10页。

21) 辻敏之、冈村増太郎 《小學校用地理》第三册，东京：普及社，明治20年，44-45页。

22) 三橋惇编辑 《小学輿地志略》上，修静馆，明治16年，7页。

23) 冈村増太郎编纂 《新撰地志》第三册，文学社，明治19年，11页。

24) 山田行无编 《新撰地理小志》，东京：香风馆，明治12年，6页。

에 관해서 에서는, “이 인종 가운데 유럽인종이 가장 지식이 풍부하고, 농공상을 배우며, 모든 일과 사업에 개화되어 있다. 따라서 5개 인종 가운데 최상위를 점하고, 아프리카인종은 우매하여 일하지 않고 게으름에 빠져있어 감히 야만이라 부를 수 있는데, 5개 인종가운데 최하등에 속한다”²⁵⁾라고 하였고, 前川一郎의 『萬國地理小學』에서는 “황인종을 몽고인종이라 하며, 아시아에 거주하고, 세계 개화의 시조이다. 백인종은 코카소이드종이라고도 하며 유럽과 아메리카에 분산되어 거주하고 있으며 인류가운데 가장 우수하다.” “그 외에 세 인종은 인류가운데 가장 열등하다”²⁶⁾라고 하였다. 小笠原利孝가 편찬한 『小學萬國地誌』에서는 “5개 인종 중 몽고, 코카소이드 두 인종이 문명개화의 경지에 도달했고, 아프리카 이하 3개 인종은 아직 야만의 상황에서 벗어나지 못하였다”²⁷⁾. “반개화의 인민은 스스로를 과대평가하여 허망한 미혹에 빠져있고, 지식이 빈곤하며 기체가 조잡하다. 군주가 혼자 권위를 독점하고 임의적으로 만민을 억압한다. 몽고인종 대부분이 이러한 류에 속한다.”²⁸⁾라고 하였고, 坪井祥가 편찬한 『改訂小學新地誌』에서는 개화의 등급을 아프리카, 대양주, 남북아메리카 토인의 야만인과 아시아 및 남아메리카의 대부분이 속해 있는 반개화인, 그리고 아시아 일부와 유럽, 북아메리카의 대부분을 포괄하는 개화인으로 나누었는데, 이중 개화된 인민은 교육이 보급되고 지식이 진보하여 자주권을 지니고 있으며, 또 학술과 기예가 모두 정교하고, 풍속으로 말하자면 예의단정하고 덕과 의(義)를 중시하고 우의를 돈독히 한다고 말하고 있다.²⁹⁾

이상 교과서의 인종서술은 기본적으로 메이지 초년 교과서의 복사판으로 새로운 면이 없다. 심지어 高橋熊太郎이 편찬한 『普通小學地理書』처럼 8년전의 高城与五郎의 『萬國新地誌』의 인종서술을 그대로 베낀 경우도 있다.³⁰⁾

갑오전쟁(1894-1895년)후, 일본은 청조와의 전쟁에서 승리하여 국내의 민족주의가 고양되었다. 金港堂書籍株式會社가 편집한 『小學外國地誌』는 세계인민을 야만인, 미개인, 반개화인과 문명인 4등급으로 나누고, 문명인은 “예의를 숭상하고 학술과 기예에 정통하며, 농공상업을 발전시키고 널리 교통과 무역을 열어서 인류가운데 가장 우수하고 쾌락한 생활을 추구한다. 우리 국민이 바로 이러하다”³¹⁾라고 하여 일본이 엄연히 “문명개화”의 경지에 도달했다고 선언하였다.

그리고 20세기 초 러일전쟁(1904-1905년)에서 러시아-백인종에 대한 승리로 일본사회는 더더욱 인종승리의 쾌감에 도취되었고, 교과서속의 일본형상에도 근본적인 변화가 발생하였다. 예를 들어 地理研究會가 편찬한 『新地理·中學校用概說之部』에서는 여전히 인종 5분법에 따라 인종을 “아시아 인종, 유럽인종, 아프리카인종, 아메리카인종, 해안과 島嶼인”과 같이 구분하고 다음과 같이 서술하고 있다. 즉 그 중에서 “아시아 인민은 피부색이 황색이고 광대뼈가 튀어나왔으며 두발은 일반적으로 검은색이다”. “아시아 인구는 5억8천만이며 그 인종은 고대에 세력이 자못 커서 일찍이 유럽대륙 중부를 석권한 적이 있었다. 현재는 우리 일본(大和)종족을 제외하면 그 세력은 날로 쇠약해져 유럽인종에 비해 열세의 위치에 처해 있다”³²⁾. “(유럽)은 근대에 이르러 널리 식민지를 개척하고 경쟁적으로 이주한 까닭에 그

25) 高橋熊太郎編纂『普通小學地理書』卷之上, 第一冊, 東京: 集英堂, 明治19年再版, 18頁.

26) 前川一郎『萬國地理小學』卷之上, 東京: 集英堂, 明治20年, 10頁.

27) 小笠原利孝編『小學萬國地誌』訂正再版, 上, 岐阜: 岡安慶介發行, 明治22年, 20頁.

28) 同上, 22頁.

29) 坪井祥編『改訂小學新地誌』第三冊, 東京: 翠紅樓, 明治24年, 19頁.

30) 高城与五郎『萬國新地誌』卷之上, 富山中田清兵衛發行, 明治27年, 第24-25頁.

31) 金港堂書籍株式會社編輯所『小學外國地誌』, 東京: 金港堂, 明治32年, 15-17頁.

분포가 크게 확대되어 현재 세계 곳곳에서 볼 수 있고, 문명이 가장 발전하였으며 세력이 가장 크다”³³⁾. 하지만 아프리카는 “현재 여전히 몽매하고 야만의 상태에서 벗어나지 못하고 있다”. 아메리카의 “인종은 과거에 일찍이 발달했던 시대가 있었지만 현재는 완전히 야만의 상태에 빠져있다”³⁴⁾. 이러한 고양된 일본문명 개화담론은 실은 이전 일본의 “반개화”상태를 반영하는 것이며, 백인종을 기준으로한 문명관의 또 다른 표현이라고 할 수 있다.

3. “종족경쟁”--청말민초 교과서의 인종서술

1901년 청정부 “新政”을 실시한 이후, 각 지역에 소학교와 중학교가 세워짐에 따라 교과서에 대한 수요도 급속히 확대되었다. 청정부는 1902년과 1903년 선후로 『欽定學堂章程』과 『奏定學堂章程』을 반포하였다. 1904년 1월 3일 정식 반포된 일련의 장정에서 수신, 격치, 역사, 지리 등 각 학과의 교육목적과 내용에 대해 구체적 규정하였다.

청말의 교과서는 두 가지 유형으로 구분할 수 있다. 하나는 학교교육 관련 교과서이고, 다른 하나는 실제로 학교교육과 관련된 교과서(후에 이러한 교과서는 “學部”의 심사를 거쳐야 했다)이다. 역사 교과서에 대해 말하자면 曾鯤化的『中國歷史』³⁵⁾, 夏曾佑의『最新中學中國歷史教科書』³⁶⁾, 劉師培의『中國歷史教科書』³⁷⁾등 만청 3대 저명교과서가 모두 개인적으로 발행한 교과서였다. 자연히 이러한 책속의 인종서술은 잔지 작가 및 그가 속한 집단의 관점을 대표할 수 있을 뿐이다. 예를 들어 曾鯤化的『中國歷史』는 다음과 같이 말하고 있다.³⁸⁾

國史씨가 말하길, 20세기의 세계는 제국주의의 세계이다. 그리고 제국주의의 시대는 종족 경쟁의 시대이다. 지구 각 국의 분열과 통합의 이유를 살펴보면 지역의 지형과 민족의 종류로 인해 자연의 차이를 형성하지 않는 것이 없다. 그렇지만 우리나라가 문명이 정도가 높고 화합력이 강성한 것은 예부터 이미 널리 알려진 사실이다. 상하 수 천년 외족이 누차 우리나라를 침범하였지만, 모두 우리 政教와 풍속의 문화적 힘에 의해 용해되어 그 이민족(異種)의 실질은 사라져 버렸다. 이제 감히 우리 국민에게 고하노니, 중국이란 한족(漢人種)의 중국이다. 지금부터 그 국민정신을 진작하여 외족 노예의 굴레를 벗어버리고 우리 한족(漢種) 고유의 국가 권력을 회복해야 한다. 그리고 우리 한족(漢種) 고유의 우수한 문화의 힘을 발휘하여 외족의 모든 경계를 없애고 그것을 삼키고 뱉어내야 한다. 그런 후에 20세기의 세계를 응비하여 백인종과 경쟁해야 한다.

이러한 한인 지상주의적인 인종서술은 공공지식이 될 수 없고, 단지 배만(排滿)혁명 콘텍스트 속에 넣고 이해해야 한다. 만청시기 배만혁명파가 한때 선전했던 “중국인종 서방 유래설”이 실제로 선전하고자 했던 것은 적자생존 가운데서의 “한족 종족(漢種)”의 “영광”스러운 역사였다. 이에 대해, 夏曾佑는『最新中學中國歷史教科書』에서 의문을 제기하였는데, 劉師培는『中國歷史教科書』,『中國地理教科書』등에서 적극 주장하였다. 이러한 서로 다른 태도는 서로 다른 역사인식에 근거한 것이기도 하지만, 동시에 배만정치에 대한 입장의 차이가 중요한 요소로 작용하였다. 자연히 이러한 인종지식은 청조 통치하의 소학교, 중학

32) 地理研究会編纂《新地理・中學校用概說之部》，東京：文學社，大正2年，78頁。

33) 同上。

34) 同上，79頁。

35) 橫陽翼天氏(曾鯤化)《中國歷史》，東京：東新社，1903年版。

36) 夏曾佑의『最新中學中國歷史教科書』，商務印書館，1904年初版。

37) 收入《劉申叔遺書》下，南京：江蘇古籍出版社，1997年。

38) 橫陽翼天氏(曾鯤化)《中國歷史》，東京：東新社，1903年，19-20頁。

교 교과서에 반영될 수 없었다.

청정부의 교육정책에 근거하여 교과서를 편찬했던 사람들은 일반적으로 모두 의식적으로 학생의 특징에 맞추어 교과서를 편찬하였다. 黃英은 『蒙學地理教科書』에서, “교학을 함에 있어 보통의 기준에 따르지 않고, 대부분이 모르는 것을 가지고 말하여 이해할 도리가 없는 이것이 바로 국민이 지식이 없는 까닭이다”³⁹⁾라고 하였다. 이것은 어떻게 “보통”의 방식으로 지식을 전달하여 계몽의 목적을 이룰 것인가하는 문제를 지적한 것이다. 管圻이 편찬한 『中國地理新教科教授法』의 “總論”에서는 “무릇 소학교 지리를 가르치는데 있어서 반드시 본국의 국가상황의 대요를 가르쳐, 그들로 하여금 인민생활의 상황을 이해하고 그렇게 함으로써 또 그 애국의 정신을 양성해야 한다”⁴⁰⁾고 강조하였다. 이것은 교육의 목적이 애국 의식을 배양하는 데 있음을 강조한 것이다. 지식계몽과 국가정체성을 본 취지로 하여 편찬된 이러한 교과서에서는 어떻게 인종서술을 하고 있는가? 필자가 확인한 지리교과서 가운데 두 방면의 내용이 특히 주목을 끄는데, 하나는 “종족경쟁”에 대한 내용으로서, 이것은 갑오 전쟁이후 지식계에 고양된 “종족보존(保種)”의 외침과 일맥상통한다. 陳毅는 『胎內教育』이라는 책의 <서문>에서 다음과 같이 말하고 있다.⁴¹⁾

우리가 일시 싸움에서 패하였다지만, 십 수년, 수 십년이 못되어 생활하는 것이 예와 똑 같다. 저 백인종은 용맹스럽고, 덕과 교묘한 지혜를 겸비하고, 그 생존경쟁의 마음으로 그 식민의 정책을 행하고 있다. 이미 홍인종과 흑인종을 강제로 부려서 노예로 삼고서 그 방법을 마치 수많은 말(馬)이 샘물을 마시고 수많은 화살이 과녁을 향하는 것같이 우리에게 사용하려 하고 있는데, 소위 민족경쟁이란 것이 이런 것이 아닌가? 우리 황제 자손이 그와 한 무대에서 만나 이를 거부하려 해도 할 수 없고, 피하려 해도 할 수 없어, 홀로 몇 겹의 포위 속에 갇혀 있으니, 어떻게 지혜를 익히고 덕을 새롭게 하며 신체를 강하게 하여 그와 경쟁해야만 할 것인가?

작자는 종족경쟁은 반드시 태내교육으로부터 시작된다고 보았는데, 이러한 언술은 당시 신문지상을 가득 채우던 화두였다. 잠시 1902년 9월 2일 간행된 『新世界學報』 제1기의 뒤 표지의 『各國種類考』의 출판광고를 보면, 다음과 같은 내용이 실려 있다. 즉 “諸暨의 趙氏叢刻本은 첫머리에 오주총론(五洲總論), 다음에 아시아주, 즉 일본, 인도, 이란, 다음에 소아시아, 즉 팔레스타인, 아라비아, 조선, 남양 각국과 남양제군도, 다음으로 유럽……전체 32편으로 되어 있다. 여기에 종족의 결합(通種)과 종족강화(強種)의 부록을 덧붙였는데, 이 두 편은 종족의 생명의 깊은 원리를 분석하고 만국 대동의 이치를 상세히 설명하였다. 이전 종중에 의존하여 實學에 힘쓰지 않고, 귀한 種을 어루만지며 스스로 생존을 위해 경쟁하는 자는 자들은 속히 이 책을 읽어 볼 지어다.”⁴²⁾여기서 종족 결합, 종족 강화는 바로 19세기 말 唐才常등 인사들이 강조했던 내용이다.⁴³⁾ 1904년 錢承駒가 편집한 『蒙學地文教科書』는 더욱 단도직입적으로 “우리 국민은 황인종이다. 2천년 동안 한족문명은 대지를 밝게 빛냈는데, 이제 거의 백인에 의해 가려졌다. 국민으로서 과연 어떻게 이 수치를 씻고 아시아 대륙 地文化 발달의 책임을 저버리지 않을 수 있을까”⁴⁴⁾라고 말하고 있다.

39) 黃英《蒙學地理教科書》，南洋官書局，光緒三十二年三月初版，第2頁。

40) 管圻編《中國地理新教科教授法》上冊，上海樂群圖書編譯局，光緒三十二年十月初版，第1頁。

41) 陳毅《胎內教育》，廣智書局，1902年版，2頁。

42) 《新世界學報》第1期，光緒二十八年八月一日（1902年9月2日）。

43) 參見唐才常《通種說》，湖南省哲學社會科學研究所編《唐才常集》，中華書局，1980年。

청말 인종경쟁에 대한 이러한 위기감은 구미의 근대 인종지식에 근거한 것이었다. 일본과 마찬가지로 인종 5분법의 인종차이에 관한 담론은 교과서에서 보편적으로 채택되었는데, 이것은 청말 교과서의 인종서술의 또 다른 두드러진 특징 가운데 하나이다. 钱承驹의 『蒙學地文教科書』는 “동물 가운데 가장 우수한 존재는 인간이다. 인간은 5개종이 있는데, 하나는 황색인종, 두 번째는 백색인종, 세 번째는 홍색인종, 네 번째는 다갈색인종, 다섯 번째는 흑색인종이다.” “흑인종이 가장 낮은데, 아프리카와 적도부근 여러 부락에 거주하는데, 이른바 흑인노예가 바로 그들이다”⁴⁴⁾. 黄世基가 편찬한 『初等小學地理教科書』 제4과 <인종>에서는 인종우월의 원인을 다음과 같이 설명하고 있다. 즉 “사람 또한 동물이지만 그 중 가장 영특한 존재이다. 그러나 성정과 생김새는 거주지에 따라 다르다. 열대지역에 거주하는 자는 물산이 풍요롭고 의식이 쉽게 해결되기 때문에 성정이 대부분 어리석고 게으르다. 한대지역에 거주하는 자는 생계가 매우 힘들어 종신토록 근색하다. 따라서 성정이 대부분 어리석고 둔하다. 오직 온대지역만이 기후가 온화하여 물산이 모두 풍족하고 번식하고 발전하기에 가장 적합하다.”⁴⁶⁾ 비록 황인종, 백인종, 흑인종, 다갈색인종과 구리색 인종 중 어느 것이 우수하고 열등한지에 대해 명시하지는 않았지만 이로부터 결론을 추론하기는 어렵지 않다.

청말 교과서에서 백인종을 내놓고 격찬하는 문장은 결코 많지 않다. 이와 반대로 어떤 문장은 오히려 황인종의 우월성을 강조하기조차 한다. 陶澐宣는 『地學歌』에서 심지어 “五方の土 가운데 중앙이 黃임으로 황인종이 백인종보다 고귀하고 홍인종, 갈색인종, 흑인종은 무지한 백성이며”, “아시아는 본래 문명의 조상이다.”⁴⁷⁾라고 하였다. 또 다른 예는 光緒31년(1905년) 초판 발행 후, 宣統 3년(1911년) 제 26판을 발행한 『學部審定最新地理教科書』를 들 수 있는데, 이 교과서는 <人種> 課에서 당시 유행하던 인종학설을 다음과 같이 소개하고 있다.⁴⁸⁾

전세계 인류는 약 15억이며 5개종으로 나눌 수 있다. 첫째, 황인종 또는 몽골로이드종으로 피부색이 누렇고, 얼굴이 평평하고 코가 낮다. 모발은 검고 직선적이며 아시아 동부와 북부지역에 거주하고 수는 약 6억여명 정도이다. 둘째는 백인종, 또는 코카소이드종으로 피부색이 희고, 눈이 파란색이며, 이마가 넓고 코가 높다. 모발은 갈색이며 유럽과 아시아 서남부에 거주하며, 아메리카, 오스트레일리아 및 아프리카 해안지역에도 많이 거주하고 있다. 인구수는 대략 황인종과 비슷하다. 셋째는 갈색인종, 또는 말레이종으로 그 모양은 황인종과 약간 유사하다. 피부색은 까무잡잡하고 남양 여러 섬에 거주하며 수는 대략 5천만 정도이다. 넷째는 홍인종 또는 인디안종으로 눈이 짙고 모발은 성글며, 피부는 구리빛을 띤다. 아메리카의 토인들로서 수는 단지 1천5백만 정도이다. 다섯째는 흑인종 또는 니그로종으로 입술이 두껍고 코가 작으며 피부색은 검다. 아프리카 토인들로서 그 수는 약 2억정도이다.

이어서 <문화> 課에서는 인종을 야만, 반개화, 문명 등 진화개념과 결합하여 서로 다른 피부색 인종에 고유한 위치를 부여하였다. 즉 “오늘날 오직 백인종만이 나날이 문명에 가까워

44) 钱承驹编《蒙學地文教科書》，上海文明書局，光緒二十九年八月初版，同年十二月再版，30頁。

45) 同上，29頁。

46) 黄世基编《初等小學地理教科書》上册，两江學務處審定，南洋官書局出版，光緒三十二年四月版，34頁。

47) 陶澐宣《地學歌》，通藝堂詩錄卷2，光緒壬寅刻，7頁。

48) 謝洪賚编《學部審定最新地理教科書》（高等小學用、第三冊），商務印書館，光緒三十一年正月初版，1911年6月26版，6頁。

지고 있고, 황인종은 여전히 반개화의 단계에 정체되어 있다. 그리고 흑인종, 갈색인종, 홍인종은 모두 야만상태에 있을 뿐이다.”편찬자는 또 “문명인”에 대해 “공업, 상업, 기술이 정교하고, 지혜가 발달했으며 학술이 심원하다. 德과 義를 존중하고 예의와 양보를 귀하게 여긴다. 인민의 생활은 편안하고 국가의 토대는 공고하다”⁴⁹⁾. 이 교과서 제4책 『外國地理』 하권의 유럽부분에서 편찬자는 백인종을 라틴, 튜튼, 슬라브 세 민족으로 나누고, “세 민족은 각 대륙으로 널리 이주하였는데 그 재주와 기예가 다른 민족보다 뛰어나 이르는 곳마다 그 곳의 대권을 장악한다. 백성의 풍속은 수치심을 알고 자중하며, 작은 일에 얽매이지 않는다. 교육이 널리 보급되고 풍속이 둔후하다. 토지가 비옥한데다 백성들이 지혜로워 서 농업이 발전하고 공업과 기술이 날로 발전하며, 항해업과 상업이 전 세계로 뻗어나가고 있다”⁵⁰⁾고 설명하고 있다. 앞의 일본 교과서의 인종서술과 비교해 보면, 이 교과서의 서술이 일본 교과서의 영향을 분명히 받았음을 알 수 있다.

일반적으로 말해서 청말 교과서의 인종 5분법에 대한 서술은 모두 피부색을 기준으로 삼고 있다. 한편 余璠가 편집한 『地理略說』은 모발을 기준으로 삼고 있는데, 그 중에서 말하기를⁵¹⁾ “인류는 꼭 같지가 않다. 근세 학자는 모두 인류가 동일한 조상에서 나왔는데, 그 후 거주지의 기후가 달라 점차 변모하여 마침내 종족의 분화가 발생하였다고 말하는데, 그 분화의 기준에 대해 혹자는 모발을, 혹자는 머리를, 또 혹자는 피부색을 내세운다. 이제 그 모발을 기준으로 보면 크게 세 가지로 구분되며, 이 세 가지는 또 각기 몇 가지로 세분되기도 한다.” “곧은 머리종”은 유색인종으로 “사상이 곱슬머리보다 비교적 높다. 오스트레일리아의 토인도 이러한 종류에 속하지만, 피부가 검고, 이마가 낮으며, 입술이 두터운 것은 곱슬머리종과 차이가 없다. 따라서 사상이 지구상에서 가장 낮다.” “부드러운 곱슬 머리종”은 대부분 백색이어서 백인종이라고 부른다. “이 종 가운데 대다수 사람들의 지식은 다른 종보다 뛰어나다.” “코카소이드 족은 부드러운 곱슬머리 종내에서도 사상이 가장 뛰어나다.” “곱슬머리종”은 옅은 갈색에서 검은색까지 다양한데, “이 종의 사람은 사상이 매우 열등하고, 역사에 빛날만한 것이 하나도 없다.” 이와 같이 분류법은 비록 다르지만, 결론은 매우 분명하다. 즉 백인종이 높고 흑인종이 낮다는 것이다.

청말 지리교과서 가운데, 이와 같은 인종차이 서술은 또 중국영내에 거주하는 각 민족을 서술할 때에도 적용되기도 한다. 많은 교과서들이 문명/한족기원 문제를 언급할 때, 매번 “苗族”과 기타 소수민족을 무시하는 용어를 사용하고 있다.⁵²⁾ 蔡元培가 교정하여 출판한 『最新高等小學地理教科書』는 그중에서도 비교적 공정한 편인데, 제15과 <人種>에서 다음과 같이 말하고 있다. “우리나라 사람은 대개가 황인종에 속하며 여섯(민족)으로 세분할 수 있다.” 한족, 몽고족, 퉁구스족, 터키족, 서장족, 묘족이 바로 그것이다. “新疆 서북부에는 코카소이드종이 있고, 남양 琼州島에는 말레이종이 살고 있다”⁵³⁾. “우리 민족은 대개 황인종으로 한족이 가장 많고 전 세계 인구의 1/4을 차지한다”⁵⁴⁾. “몽고인민은 모두 약 250만으로 종족은 한족과 다르다. 풍속은 말 타고 활쏘기를 즐기고 성격은 인내심이 강하다. 민첩하고

49) 謝洪資編《學部審定最新地理教科書》(高等小學用、第三冊), 商務印書館, 光緒三十一年正月初版, 1911年6月26版, 7頁。

50) 謝洪資編《學部審定最新地理教科書》(高等小學用、第四冊), 商務印書館, 光緒三十一年正月初版, 1911年3月25版, 2-3頁。

51) 余璠輯《地理略說》, 江西法政學堂讲义, 宣統年間鉛印本, 11-12頁。

52) 拙文<連續性與斷裂——清末民初歷史教科書中的黃帝敘述>, 復旦大學現代化研究中心編《中國現代學科的形成》, 上海古籍出版社, 2007年8月。

53) 蔡元培校訂《最新高等小學地理教科書》(二之一), 上海會文書社, 年代不詳, 9頁。

54) 張相文編《蒙學中國地理教科書》(初等小學堂學生用書), 文明書局, 1903年, 9-10頁。

용맹하며 목축에 종사하고 농경은 잘 모른다. 의복이 거칠고, 예의는 간소하다. 불교를 믿고 라마를 받들며, 모피를 입고 유즙(乳汁)을 먹는다. 천막에 거주하고 수초(水草)를 따라 이주하여 도시는 거의 없다.”⁵⁵⁾

민국 성립 후, 교과서의 인종관련 서술에 변화가 발생하였는데, 인종의 공통근원설에 대한 소개가 증가하였다. 上海商务印书馆은 민국 원년에 『共和國教科書』의 새로운 시리즈를 출시하여, 출판 후 널리 호평을 받았다. 그 가운데 『新國文』의 제6책에 <人類一源說>이라는 제목의 한 課를 별도로 두어 당시 인류학계에서 상식이 된 인류동일기원설을 소개하였다. 그 중 편자의 말에 다음과 같은 내용이 있다.

세계 인류의 종족은 크게 다섯 가지가 있다. 황인종, 백인종, 흑인종, 홍인종, 갈색인종이 그 것이다. 또 피부색은 같지만 풍속과 언어의 차이로 각각 여러 종족으로 나뉜다. 예를 들어 황인종이라도 한족, 몽고족이 있고, 백인종 가운데도 튜튼족과 라틴족이 있다. 세계인류는 처음에는 모두 하나에서 기원했는데, 기후, 혼인등의 사정 때문에 점차 여러 종으로 분화되었다. 이것은 인류학자의 공통된 인식이다. 인류 종족의 차이는 피부색이 가장 두드러지며, 또 피부색의 차이는 흑백이 가장 현저하다. 그렇지만 흑백의 구분은 그 처음 시조의 유전에 의한 것이 아니라 외부환경의 영향을 받아서 그렇게 된 것이다. 아프리카 인종은 열대지역에 살기에 태양의 직사광선을 받아 피부가 검게 그을려서 검은 색이 되었다. 유럽 인종은 서늘한 지역에 거주하여 그 피부색은 특히 희다. 이것이 피부색과 기후의 관계이다. 아프리카의 옛 풍속은 배우자를 선택함에 피부가 검은 것을 귀히 여겼는데, 그 결과 피부가 검은 자는 결혼하기가 유독 용이해서 그 종이 날로 번식하였고, 결국 검은 피부도 자연 더욱 검게 되었다. 이것이 피부와 혼인의 관계이다.⁵⁶⁾

인류의 피부색과 환경, 혼인관계를 강조하는 것은 마치 진화론 서열에 근거한 인종담론과 다른 것처럼 보인다. 하지만 전체적으로 보면, 민국초기에 출판된 교과서는 기본적으로 청말 교과서의 내용을 답습하고 있다. 교과서의 인종담론은 대부분 여전히 청말 진화론 계보의 연속이다. 예를 들어 고등소학교용 『新地理』는 전체 6책으로 확대되었는데, 1책에서 4책까지는 중국지리, 5, 6책은 세계지리에 관한 것이다. 또 제6책은 <천문지리개요>, <地文지리개요>와 <인문지리개요>를 첨가시켜 청말 교과서에 비해 내용은 더욱 충실해졌다. 그러나 <인문지리개요>의 인종에 대한 기술은 위에서 언급한 청말 谢洪赉가 편찬한 谢洪赉의 『學部審定最新地理教科書』와 기본적으로 동일하다.

5대 인종 가운데 각 인종의 특징에 관한 묘사도 『學部審定最新地理教科書』와 완전히 일치한다. 그러나 5대인종의 세계에서 처해있는 지위에 대한 묘사는 청말과는 다소 다르다.

현재 황인종이 가장 번식하고 백인종이 가장 강하다. 우리 인민은 모두 황인종이다. 나머지 지는 날도 쇠락하여 감소하고 있다. 태고적 인간은 들판의 동굴에서 살고 날 고기와 피를 먹었으니 이른바 야만인이었다. 시간이 오래 흘러서 비로소 목축업이 생기고 주택에서 거주하게 되었지만 백성의 지혜는 고루하고 민심은 흩어져 있었으니 바로 반개화인이다. 근세에 이르러 지혜가 발달하고 학술이 진보하며 도덕을 숭상하고 정치가 완비되었으니 이것이 이

55) 谢洪赉编《學部審定最新地理教科書》(高等小学用、第二冊), 商务印书馆, 1905年, 15页.

56) 庄俞编《共和國教科書新國文》教育部審定高等小学校春季始業學生用第六冊, 1912年6月初版, 1920年5月119版, 32页.

른바 문명인이다. 오늘날 세계 사람들 가운데 문명인은 생존하고 우매한자는 망하게 될 것인데, 이는 자연의 법칙이다.⁵⁷⁾

여기서 주목할 것은 (1) 청조에서 민국으로의 대변혁을 겪은 후, 황인종의 지위에 대한 서술에 미묘한 변화가 발생하여, 인구가 많음을 강조하는 “가장 번식했다”라는 말로써 청말의 단순한 진화서열의 “반개화”를 대신했다는 것, (2) “백인종이 가장 강하고”, “나머지는 날로 쇠퇴하여 감소할 것이다”라고 하여, 황인종을 장차 쇠망할 홍인종, 갈색인종, 흑인종과 구별했다는 점, (3) 문명과 우매를 생존과 멸망의 기준으로 삼고, 그것을 “자연의 법칙”이라고 한 점등이다. 또 흥미롭게도 편찬자는 이 책 수정본의 <중국인문지리개요>라는 한 절에서 진화론적인 인종학 지식을 중국 영내의 인민에 적용하여 다음과 같이 말하고 있다.

세계인민 가운데 황인종이 가장 번성했으며, 우리나라는 특히 번성한 인민가운데도 대표이다. 개화가 빨랐을 뿐만 아니라 학술도 심오하다. 단지 그것들 대다수가 오늘날 세계에 적합하지 않을 뿐이다. 최근 상황에 따라 변화하여 이미 문명인으로 진입하였다. 진실로 실사구시하고 함께 노력하여 나아간다면 언어, 문자, 종교, 정치, 실업등 제 방면에 있어서 어찌 훌륭한 경지에 이르지 않겠는가!⁵⁸⁾

그러나 진화론에서 “인종경쟁”은 여전히 민국초기 교과서 서술의 기본논조로서 긴장감이 팽배해 있었다. 庄俞, 沈颐, 樊炳清이 함께 편찬한 『高等小學女子新國文』의 <進歩>라는 절에서 다음과 같이 말하고 있다. 즉 “인간은 동물가운데 하나이지만 동물 위를 차지하고 동물을 부리면서 자기를 위해 이용하고 있다. 저 동물은 도살되거나 노역을 당하면서도 어쩔 수 없으니 어찌된 까닭인가? 말하자면, 인간은 진보하였지만 동물은 진보하지 못했기 때문이다”⁵⁹⁾, “진보법칙은 날마다, 달마다 변화하는 것을 증히여겨 해마다 다르게 변모한다. 한 인종이 정제되어 나아가지 못하면 얼마 안 있어 곧 타 인종이 그것을 앞질러 날듯이 공격해 올 텐데, 또한 위태롭지 않은가? 우리나라는 문명이 앞선 것으로 유명하다. 하지만 근세에 이렇다 할 진보가 없었다. 만약 급히 분발하지 않는다면 어떻게 세계에서 생존을 경쟁할 수 있겠는가? 우리나라 사람들이 원숭이를 거울로 삼기를 바란다”⁶⁰⁾.

1913년 中華書局에서 출판한 고등소학교용 『新制中華地理教科書』 제7권에서는 세계인구를 아시아인종(황인종), 유럽인종(백인종), 아프리카인종(흑인종), 말레이종(갈색종)과 아메리카인종(홍인종)으로 나누고, “5개 인종 가운데 유럽인종이 가장 강한데, 이에 거의 대항할 수 있는 자는 오직 우리 아시아인종일 뿐이고, 나머지는 모두 생기가 없어 장차 소멸하고 말 것이다. 적자생존, 우생열패는 진화의 법칙이다.”⁶¹⁾라고 말하고 있다.

1915년 上海會文堂書局에서 간행한 『高等小學新國文範本』의 인종담론은 인종에 대하여 새로운 이해를 보여준다. 그 대체적인 내용은 다음과 같다. 즉 테고적 인류는 지리, 교통의 제한으로 죽을 때까지도 서로 왕래하지 않아, 가히 “산림의 인종”, “유랑인종”, “물위에 거주

57) 庄俞編《共和國教科書新地理》第六冊(高等小學校用), 商務印書館, 1912年9月初版, 17頁。

58) 庄俞編《共和國教科書新地理》第四冊(高等小學校用), 商務印書館, 1912年6月初版, 1913年7月訂正45版, 1916年4月訂正105版, 13頁。

59) 庄俞、沈颐、樊炳清《高等小學女子新國文》第三冊, 商務印書館, 1912年11月出版, 二年四月再版。

60) 同上。

61) 史礼綬編《新制中華地理教科書》七(高等小學校用“E第三學年第一學期”), 中華書局, 1913年4月初版, 1915年5月第4版, 4頁。

하는 인종"이라 할 수 있다. 그리고 생계의 제한을 받아 "유목인종", "棲食인종", "수렵인종"의 구별이 생겨났다. 인종이 진화하여 부락을 형성하고, 다시 진화하여 국가를 구성하였다. 부락과 국가의 형성은 각각 인류진화의 제1급과 제2급이다⁶²⁾. 또 편자는 세계의 5개 인종이 각각 처해있는 지위에 대해 다음과 같이 묘사하고 있다.⁶³⁾

세계인종은 황인종, 백인종, 홍인종, 흑인종, 갈색인종 5가지로 나뉜다. 황인종과 백인종은 일찍이 부락에서 발전하여 국가를 형성하였고, 홍인종과 흑인종, 갈색인종은 아직 야만의 구습에서 벗어나지 못하여 흩어져 부락을 형성하고 심지어는 부락조차도 형성하지 못한 것도 있다. 오히려 우수한 것이 승리하고 열등한 것이 반드시 패한다. 홍인종, 흑인종, 갈색인종은 백성이 고루하고 열등하여 이미 거의 도태되었다. 황인종은 개화가 가장 빨랐으나 지금은 오히려 백인종만 못하다. 어찌 백인종이 과연 하늘의 총애 받는 자이겠는가? 아시아 대륙의 황인종이 서로 집단으로 연계하여 유지해 나간다면, 아마 거의 타인종의 유린을 면할 수 있을 것이다.

황인종과 백인종의 홍, 흑, 갈색인종에 대한 서열에서, 백인종은 우승열패의 적극적(긍정적)인 교과서라면, 홍, 흑, 갈색인종은 우승열패의 소극적(부정적)인 교과서(거울)이다. 황인종은 오직 분발하고 부강을 도모할 때 비로소 홍, 흑, 갈색인종처럼 도태되는 운명을 면할 수 있다. 이에 대해 『高等小學新國文範本』 제 2책에서는 <체육은 인종을 강화케 할 수 있다>라는 제목의 한 편의 글을 수록하였는데, 작자는 단지 체육교육을 강화하고 강건한 체력을 배양하는 것을 통해서만 비로소 인종경쟁에서 중국이 패하지 않을 수 있다고 지적하고 있다. 즉⁶⁴⁾,

세계의 인종은 다섯이 있다. 그 중에 특히 특출난 것은 오직 황인종과 백인종 둘 뿐이다. 백인종이 강한 것은 이미 알려져 있지만, 황인종은 그 세력이 점차 쇠퇴하고 있다. 일본은 특히 大和魂, 武士道 정신을 지니고 있는데, 황인종이 모여 사는 우리나라의 경우는 숨이 간들간들하여 부진을 면치 못하고 있다. 어째서 그러한가? 체육이 없기 때문이다. 나는 구미 각 국가가 모두 체육으로 유명하다고 들었다. 시험삼아 우리 민족과 저 민족을 서로 비교하면, 저들은 건장한데 우리는 왜소하다. 저들은 용감한데, 우리는 유약하다. 저들은 굳세고 힘이 있지만, 우리는 움츠려든다. 저들은 활발한데 우리는 더럽다. 전장터에서 나가지 않더라도 승부는 이미 예측할 수 있다.

이 외에 中華書局에서 1916년에 초판으로 발행한 후 1921년 제38판을 인쇄한 『新式國民學校國文教科書』(교육부 감정) 제 7책 <人種>에서 편집자는 인종간 우승열패의 냉혹한 현실에 대한 우려를 글속에 생생하게 표현하고 있다.⁶⁵⁾

세계인류는 피부색에 따라 황인종, 백인종, 갈색인종, 흑인종, 홍인종 5개 종으로 나뉜다. 이 5개 인종은 처음에 그 지혜가 차이가 그다지 크지 않았지만, 그 후 진화속도에 차이가

62) 蔡蔭編《高等小學新國文範本》, 上海會文社, 1915年1月出版, 22頁.

63) 同上.

64) 同上, 24-25頁.

65) 陸費逵等編《新式國民學校國文教科書》第七冊(教育部審定, 國民學校用), 中華書局, 1916年3月初版, 1921年3月38版, 4頁.

발생하여 우수한 자는 승리하고, 열등한 자는 패하게 되었다. 따라서 갈색, 홍, 흑인종은 날로 쇠망의 길로 빠져들고, 오직 황인종과 백인종만이 세계에서 서로 대치하게 되었지만, 백인종이 훨씬 강하다. 우리 황인종은 갈색, 흑, 홍인종의 쇠망을 본보기로 삼아, 속히 스스로 분발할 계책을 수립할 것인가 아니면 기꺼이 그 전자의 전철을 뒤따를 것인가?

교과서의 인종서술은 아직 중국이 처한, 날로 위급해지는 국제환경과 밀접한 관련이 있다. 제1차 세계대전이 폭발한 후, 일본은 유럽국가들 동양을 돌볼 겨를이 없는 틈을 타서 膠州灣만을 군사력으로 점령하고 중국에 대한 침략의 발걸음을 재촉하였다. 앞서 인용한 『高等小學新國文範本』 제1책 인종부분의 같은 쪽 위부분에 특별히 “일본은 같은 인종을 해치지 말라”⁶⁶⁾는 평어가 달려 있다. 작자가 보건데, 중국에 대한 일본의 침략은 황인종의 상호 상해에 다름 아니었던 것이다. 그 책이 출판된 후 얼마 안 있어, 大隈重信 내각은 袁世凱의 북벌야심을 이용하여 袁世凱에게 중국 주권을 심각히 침해하는 ‘대중국 21개 요구조항’을 제기하였다. 1927년 商務印書館에서 출판한 『新時代地理教科書』 제4책에는 다음과 같은 내용이 나온다. “황인종은 달리 몽골로이드라고도 하는데 인구수가 가장 많고, 태평양 연안에 분포해 있다. 중화민족은 인구가 4억으로 가장 크고 가장 오래된 국가를 가지고 있지만, 외세의 침략을 받아 정세는 매우 위태롭다. 저 동쪽의 이웃국가 일본은 大和族이라고도 부르는데, 세력이 가장 강하다. 애석하게도 같은 인종인 여러 민족에게 종종 압박을 가하여 골육상잔이라는 비난을 받는다”⁶⁷⁾.

진화론-“인종경쟁”은 일종의 지식체계로서 중국에 소개된 후부터 널리 지식계에 수용되었다. 왜냐하면 그것은 중국이 장기간의 부진으로 열강의 침략을 받는 현실을 해석하는데 유용했을 뿐만 아니라 동시에 또한 사람들을 자극하여 구국을 위해 부강을 도모하게 할 수 있었기 때문이다⁶⁸⁾. 민국의 건립은 비록 국내정국을 변화시키기는 하였지만 국제상에서의 중국의 지위는 결코 변화하지 않았다. 뿐만 아니라 청말과 비교하여 민국의 성립 후 곧이어 폭발한 제1차 세계대전은 의화단 사건 후 청정부와 열강이 체결한 『辛丑條約』 하에서의 유지되어 온 중국에서의 열강의 세력균형을 깨뜨렸다. 열강이 유럽전쟁으로 동양을 돌볼 겨를이 없게 되자, 일본은 중국을 독점할 기회를 얻게 되었다. 일본 정부가 袁世凱 정부에게 제출한 “21개 조항 요구”는 중국의 망국위기를 더욱 격화시켰다. 그리하여民国초기, “적자생존”, “우승열패”의 사회진화론과 이에 근거한 인종학설은 청말과 마찬가지로 여전히 중국 지식계의 요구에 부응하였다.

4. 결론

미국 뉴욕의 자연사 박물관에 가 본적이 있는 사람에 따르면, 그 박물관은 선사시대에서 근대문명까지 인류의 진화과정을 진열하고 있다고 한다. 이 과정의 최우는 각종 유색인종의 생활사이다. 인류진화과정의 장관을 감탄한 후, 사람들은 전람실에 백인종의 생활사가 없다는 것을 발견한다. 이 백인의 “부재”는, 유색인종의 근대역사는 “타자”의 시선에 의해 뒤덮힌 “묘사된” 역사라는 것을 사람들에게 일깨워 준다. 동아시아(일본과 중국)교과서속의 근

66) 前掲蔡蔭編《高等小學新國文範本》, 22頁.

67) 陳振編《新時代地理教科書》(大學院審定小學校高級用)第四冊, 商務印書館, 1927年11月初版, 1932年6月國難後第12版, 12頁.

68) James Reeve Pusey, China and Charles Darwin, Cambridge (Massachusetts) and London: Harvard University Press, 1983.

대인종 담론에 대한 본 논문의 고찰에 대해 말하자면, 근대 세계체제가 세계를 석권했을 때, 백인종이 가시적인 피부색과 골격을 통해 구성한 인종 5분법 지식도 동아시아에 전파되었다. 메이지 일본 교과서에서 선언한 “문명개화”가 은유하는 것은 일본이 “문명개화되지 못했다는 것”이었고, 그래서 교과서는 5개 인종의 등급서열 중 백인종은 맨 위에, 홍색, 갈색, 흑인종은 맨 아래, 그리고 황색인종은 중간에 처해있음을 강조하였고. 또 중국도 감히 “반문명개화”의 전형이라 불렀던 것이다. 이러한 의미에서 일본의 인종서술은 백인종-구미의 근대지식에서 기원하였고, 그것은 인종에 대한 일본 기존 역사의 관점과는 직접적인 관련이 없이, 양자간에 뚜렷한 단절로 나타났다.

일본과 완전히 같지는 않지만, 청말 민초 중국 교과서에서 외친 “인종경쟁”은 매우 복잡한 의미를 내포하고 있다. 간혹 나오는 중국인종은 “저열하다”는 은유, 이러한 자아 “차별”은 서구 근대인종차이 지식의 내재화라고 할 수 있다. 그러나 일본 교과서와 비교하여 일반적으로 중국 교과서는 일본처럼 그렇게 황인종에 대한 자기비하 콤플렉스가 없을 뿐만 아니라, 오히려 종종 “우승열패”의 사회진화 중에서 백인종에 승리할 수 있다는 신념을 내비치기도 하였다. 이는 주로 기존 문명역사에 대한 자부심과 현실에 대한 낙관주의적 평가(영토가 넓고 인구가 많다는 등)에 기인한다.

또 하나 지적할 것은 근대 인종지식의 일본과 중국에서의 재차이화 문제이다. 인종에 대한 재차이화에 대한 기술은 일·중간에 다소 다르게 나타난다. 일본은 기타 유색인종, 특히 황인종에 대한 “재차이화”를 통해서 자신을 백인종과 대등한 위치로 끌어 올렸다. 반면 중국은 같은 방식에 따라 서술하면서도, 기타 유색인종에 대해서도 재차이화를 진행하였다. 인도, 아프칸 및 묘족을 대표로 하는 중국 국내 족군은 대외적, 대내적 재차이화의 두 예이다. 이것은 “인종서방기원설”이 한때 성행한 것을 배경으로 한다.民国 성립 후 족군 융합을 도모하는 정치적 요구로 인해 후자의 참조역할은 인종서술에서 탈각되었다.⁶⁹⁾

마지막으로 특히 강조해야 할 것은 비록 청말 민초 중국 교과서의 인종서술이 일본교과서와 다소 다르기는 하지만, 중국 교과서의 인종지식이 일본에서 유입되었다는 것이다. 교과서 체계만이 일본에서 본 따온 것이 아니라 그 내용도 대부분 일본을 모방하였다. 당시 많은 교과서의 편집자도 이러한 점을 인정했다. 이 문제에 대해서, 필자는 다른 논문형식을 통해 보다 심도있게 논할 계획이다.

우세문화의 전파과정에서 어떤 지식이 광범하게 전파되고 수용되는가 여부는 결코 그 지식이 당시 가장 선진적인가에 의해 결정되지 않고, 대부분은 그것이 수용자의 요구를 만족시키는가에 의해 결정된다는 것을 알 수 있다. 때로는 객관적 조건의 제한을 받아, 수용자는 지식의 “정치적 정확성(political correctness)”을 포기하고, 오류이자 이미 낡은 것으로 증명된 지식을 기꺼이 선택하기도 한다. 따라서 근대 인종개념은 생물학상의 개념이 아니라 근대가 형성한 “정치적 개념”이다. 정치는 인종문제를 해소할 수도 있고, 인종을 차이화 할 수도 있다.

(번역 : 차태근)

69) “우리민족이 팽창한 원인을 찾아보면, 실제로 타민족을 받아들였기 때문이었다. 이제 우리 민족의 발전을 도모하려면 우리 조상의 그러한 법을 본받지 않을 수 없다”。吳貫因〈五族同化論〉,《庸言》第1卷第7号, 1913年。

성균관대 동아시아학술원 동양학학술회의

지식의 근대기획, 미디어의 동아시아

知識的近代企劃, 媒體與東亞
知の近代企画、メディアの東アジア



- 일시 : 2007. 12. 14(금)~15(토) 10:00~18:00
- 장소 : 성균관대 600주년기념관 6층 첨단강의실
- 주최 : 성균관대학교 동아시아학술원